

第73回 全国造形教育研究大会・北海道大会
第70回全道造形教育研究大会・札幌大会



大会テーマ

“わたし”を創る

～今を生きる、共に生きる造形教育～



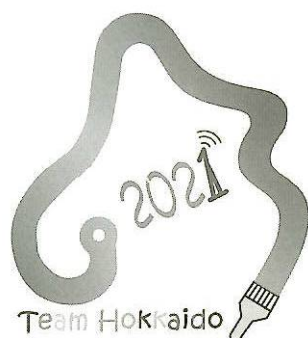
研究主題 **この子が感じる＝考える＝表す** 造形活動
～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～

会期 2021年10月2日(土)
会場 オンライン開催
主催 全国造形教育連盟
北海道造形教育連盟
札幌市造形教育連盟

第73回全国造形教育研究大会・北海道大会
第70回全道造形教育研究大会・札幌大会

“わたし”を創る

～今を生きる、共に生きる造形教育～



目 次

3 挨拶

…全国造形教育連盟委員長
…大会会長

4 祝 辞

…北海道教育委員会教育長
…札幌市教育委員会教育長

5 大会宣言

6 開催要項

9 研究について

20 大会風景・子どもの作品

29 分科会 A

39 分科会 B

49 分科会 C

59 分科会 D

69 記念講演・全体講評

75 成果と課題

79 各地区サークル活動報告

89 資 料





御挨拶

全国造形教育連盟委員長
大野 正人

今回開催の「第73回全国造形教育研究大会・北海道大会、第70回全道造形教育研究大会・札幌大会」は、一昨年開催の愛知名古屋大会以来、2年ぶりの全国大会開催となりました。コロナ禍であっても開催できたことは、大変意義深い限りです。動画、オンデマンドによる子どもたちの活動報告や研究発表、北海道札幌市ホテルライフオーソ札幌をキーステーションにオンラインで結んでの分科会研究協議、意見交換。そして、東京の国立教育政策研究所教育課程研究センターから小林恭代教科調査官、平田朝一教科調査官による指導・講評、講演に、全国から300人余りの皆様のご参加をいただきましたことに感謝申し上げます。

世界中が変異ウイルスによる感染拡大の中、この夏の東京オリンピック・パラリンピックにおきましても、マラソンは札幌にて開催されましたが、一部を除いてほぼ無観客での開催を強いられました。そのような状況下、各園、学校におかれましては、様々な工夫により感染防止対策を講じつつ、保育・教育活動を止めないよう尽力され、各園、小学校では新しい幼稚園教育要領、学習指導要領での授業が展開されています。そして、中学校は今年度から、高等学校は来年度から完全実施となります。このような重要な時期に新型コロナウイルスの脅威に屈することなく着々と実践され、この日に向けて取り組んでこられた皆様の功績は多大であり、発表の成果が全国に展開することを願っております。さらに、今回はオンラインによる開催であったため、どこまでできるのか可能性の追求の意味でも期待と不安がありました。が、トラブルなく終了することができ幸いでした。

今回を契機に、今後益々、造形美術教育が充実し、幸せな生活ができる社会となることを祈念いたします。結びにあたり、森長弘美北海道造形教育連盟会長始め、北海道・札幌市の皆様、発表者、提言者、開催運営に当たられました皆様、御参加くださいました全ての皆様に感謝申し上げます。



学びをつなげる ～大会を終えて～

大会会長
北海道造形教育連盟会長
森長 弘美

10月2日、文部科学省小林恭代調査官、平田朝一調査官の御出席と、全国、全道より300名を超える方々の御参加をいただき、第73回全国造形教育研究大会・北海道大会及び、第70回全道造形教育研究大会・札幌大会を開催できましたことに心より喜びを感じております。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、多くの研究大会や研修会が中止となりましたが、私たち北海道造形教育連盟と大会を主管した札幌市造形教育連盟は、コロナ禍の中にあっても研究大会を催すことはできないものかと協議を重ね、オンラインという新たな形での実施を決断し、準備を進めてまいりました。

昨年は、誰もが不安や不自由さを感じる一年であり、今年もまた同様にストレスを抱えながらの生活が続いています。

だからこそ子どもたちには自分の心を解き放つ時間をもってほしい。私たちが進める造形教育が、描くこと、つくることを通して、なかなか表すことのできない心の内、言葉にできない思いを表現することを促すきっかけとなるのではないだろうか。校内を歩きながら、美術室の前を通りかかった時、内なる思いに向き合って考えを巡らし、形と色による言葉を紡ごうと真剣な眼差しを向け、ひたむきにペンを動かして作品に向かう子どもの姿を見て、そんなことを考えました。

子どもたちにとって今がどんな状況であろうと、これからがどんな状況になろうと、みずみずしい目と心で感じ、伝え方を考えて、いきいきと表す、という造形活動が、改めて自分を見つめ、未来につながる時間となることを願い、この研究大会の成果が皆様の進める造形教育に資するものになれば幸いに存じます。

御講演をいただいたお二人の調査官、今大会のために御準備いただいた研究発表者の皆様、提言の皆様、助言者の先生方、そして開催に携わった全ての皆様に心より感謝を申し上げます。



第73回全国造形教育研究大会・ 北海道大会を終えて

北海道教育委員会教育長
倉本博史

第73回全国造形教育研究大会・北海道大会が、全国各地から多くの先生方の参加を得て、オンラインにより、盛大に開催されましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴連盟におかれましては、長年にわたり、組織的・計画的な研究・研修を積み重ねられ、図画工作・美術教育の振興・発展に多大な御尽力をいただいておりますことに深く敬意を表します。

さて、情報通信技術の高度化や新型コロナウイルス感染症への対応など、予測が困難な状況が続く中、学校教育においては、子どもたちが未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するために必要な資質・能力を育成することが求められています。

そのため、各学校においては、本年1月に取りまとめられた中央教育審議会答申に示された「全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと、協働的な学び」の実現により、学習指導要領を着実に実施していくことが重要です。

とりわけ、図画工作科、美術科においては、感性や想像力等を働かせて、表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成するとともに、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図ることが重視されております。

このような中、本研究大会が「この子が感じる＝考える＝表す造形活動～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～」を研究主題に掲げ、生活を豊かにする造形活動や、表現と鑑賞を相互に関連付けた指導等に関する研究発表や提言発表を通して、研究を深められたことは誠に意義深く、本研究大会を通して得られた成果が、図画工作・美術教育の一層の充実にも寄与するものと大きな期待を寄せております。

結びに、本研究大会の開催に力を尽くされた関係の皆様方に心から敬意を表しますとともに、会員の皆様の御健勝と御活躍、貴連盟の一層の御発展を祈念し、発刊に寄せる言葉といたします。



御挨拶

札幌市教育委員会教育長
檜田英樹

このたび、全国各地から多くの皆様の参加をいただき、「第73回全国造形教育研究大会・北海道大会兼第70回全道造形教育研究大会・札幌大会」が盛大に開催されましたことを心からお喜び申し上げます。

御参会の皆様におかれましては、子どもの健やかな身体、豊かな心の育成に向けて、研修等を通じて自らの専門性を高めるとともに、日々、教育活動の充実に御尽力されておりますことに深く敬意を表します。

本大会は、感染症対策を講じたオンラインでの開催という、新しい研究大会の可能性に挑戦し、随所に工夫の見られた大会となりました。この運営方法は、今後の研究大会等の在り方に大きな影響を与えるものと感じております。

本大会では、大会テーマに「“わたし”を創る～今を生きる、共に生きる造形教育～」を掲げ、これからの時代を生き抜く、子どもたちの創造性、主体性があふれる取組が提案されました。

このテーマは、「未来に向かって創造的に考え、主体的に行動する人」「心豊かで自他を尊重し、共に高め合い、支え合う人」といった、札幌市の教育が目指す人間像である「自立した札幌人」を育むことと軌を一にするところであり、本大会が、札幌市におけるこれからの図画工作・美術教育の方向性に大きな示唆を与えていただけたと考えております。

また、校種間の連携による連続性のある教育活動により、必要な資質・能力の育成を目指すことが重要とされている中、幼稚園から、小・中・高等学校の取組が一つの大会で発表され、研鑽を深められたことは、札幌市だけではなく、全国の園・学校における「校種間連携」の充実につながるものであり、本研究大会の貴重な成果であると考えております。

結びとなりますが、本研究大会の開催に当たり、多大な御尽力をいただきました関係の皆様方に心から敬意を表しますとともに、北海道造形教育連盟並びに札幌市造形教育連盟の一層の充実・発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

大会宣言

2011年の夏、全国図画工作・美術教育研究大会IN北海道において、私たちは、わが国が戦後以来の大きな転換期を迎えているとし、人間が人間らしく生きていくことの大切さとともに、幼児期からの遊びや様々な体験を通して、美しいものや自然に感動する、生命を尊重するなどの「豊かな心」と、自らの生活を豊かにする「創造性」を育む造形教育の価値と重要性を訴えました。

その後、私たちを取り巻く社会はますます複雑さと先行きの不透明さを増していきました。

学習指導要領総則の解説にもあるように、今の子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、我が国は生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化し、予測が困難な時代となっていると考えられています。

そして、同解説では、このような時代の学校教育について、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し、情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められているとしています。

これらの子どもの姿は、まさしく図画工作・美術を含む造形教育の中で、私たちが目指している姿に他なりません。

自らの感覚と感性を働かせながら身の回りにある様々な事象に向き合い、そのよさや特徴を感じ、自ら表したいものを考え、自分の知識や技能を生かしながら表していく。そして、友達と一緒に、互いのよさや違いを認め合い、繰り返し試しながら新たな価値を創りだしていく。

私たちは、改めてこれまで目指してきた方向が正しかったことを確信するとともに、このような時代だからこそ、より一層、造形教育の価値を広め、その充実に資していきたいと考えます。

予想だにしなかった新型コロナウイルスの出現と世界的な流行は、私たち教育の世界にも甚大な影響を及ぼしました。そして、現在もその終息は見通せません。一方、未曾有の事態の中で、私たちが改めて気付いたことがあります。

それは、子どもたちが教室に集まり、同じ空間にしながら、自分の思いを表し、互いの思いや考えをやりとりしながら学ぶことは、何にも代えがたい価値があること。また、子どもたち同様、我々教育に携わる者たちが一同に集い、語り合い学び合うことが、どれだけ貴重なものであるかということ。人と人が心を寄せ合って高め合う当たり前の光景に、感謝と喜びを感じるなどです。

今回、大会テーマを「“わたし”を創る～今を生きる、共に生きる造形教育～」とし、再びここ北海道を起点としてオンラインによる研究大会を行います。そして、研究テーマ「この子が 感じる＝考える＝表す 造形活動」のもと、今、目の前にいる「この子」一人一人に目を向け、どの子にも生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質や能力を育み、造形的な見方・考え方を更新できるようにするための授業や保育の在り方、教師の関わりについて、全国の皆様とともに考えていきます。

今大会の開催を機に、私たちは、造形教育の一層の充実を目指し研究・実践に努めることを宣言いたします。

令和3年(2021年)10月2日

第73回全国造形教育研究大会・北海道大会
第70回全道造形教育研究大会・札幌大会

大会開催要項

- 1 **開催日**
令和3年（2021年）10月2日(土)
- 2 **大会名称**
「第73回全国造形教育研究大会・北海道大会」「第70回全道造形教育研究大会・札幌大会」
- 3 **主催**
全国造形教育連盟 北海道造形教育連盟 札幌市造形教育連盟
- 4 **後援**
文化庁 全国国公立幼稚園・こども園長会 全国連合小学校長会 全日本中学校長会
全国高等学校長協会 全国公立学校教頭会 全国特別支援学校長会
公益社団法人日本PTA全国協議会
北海道教育委員会 北海道国公立幼稚園こども園長会 北海道私立幼稚園協会
北海道小学校長会 北海道中学校長会 北海道高等学校長協会
札幌市教育委員会 札幌市立幼稚園・こども園長会 札幌市私立幼稚園連合会
札幌市小学校長会 札幌市中学校長会 札幌市立高等学校・特別支援学校長会
- 5 **目的**
北海道内や全国の幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校及び大学の造形美術教育に関する様々な課題等について、研究発表及び研究協議等を行い、豊かな人間性の育成と造形美術教育の向上を図ることを目的として開催する。
- 6 **開催形式及び内容**
オンライン開催とする
開会式・研究発表・提言発表・講演・閉会式
- 7 **会場**
Zoom基地局（ホスト局） ホテルライフオーブ札幌 2F ライフオーブホールⅠ・Ⅱ
（札幌市中央区南10条西1丁目 TEL011-521-5211）
- 8 **対象者**
全国の幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校、大学関係教員他
- 9 **研究主題**
大会テーマ 「“わたし”を創る ～今を生きる、共に生きる造形教育～」
研究主題 「この子が感じる＝考える＝表す造形活動
～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～」
- 10 **講演**
講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
小林 恭代 氏、平田 朝一 氏
演題：「これからの造形教育と学習指導要領」

11 参加費

2,000円（集録及び郵送費含む）

12 日程

【10月2日(土)】

9:00～9:30 受付

9:30～10:00 開会式

- ・開式の言葉
- ・大会会長挨拶
- ・全国造形教育連盟委員長 挨拶
- ・閉式の言葉

10:00～11:50 研究発表50分（発表20・チャット5・協議15・助言10）×2 休憩10分

11:50～12:45 昼食・休憩

12:45～13:50 提言発表65分（発表15・質疑10・休憩5・発表15・質疑10・助言10）

14:00～15:00 講演

15:10～15:30 閉会式

- ・開式の言葉
- ・大会宣言
- ・大会実行委員長挨拶
- ・次期大会開催地代表挨拶、大会紹介
- ・閉式の言葉

13 組織

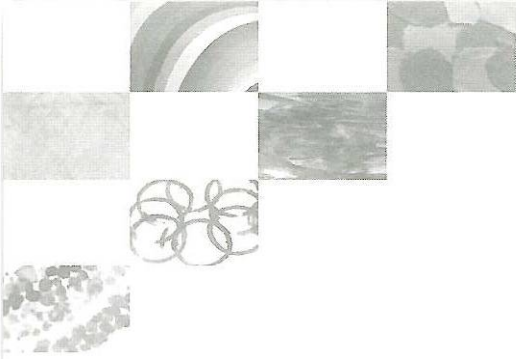
別紙

14 研究発表者・提言発表者・助言者

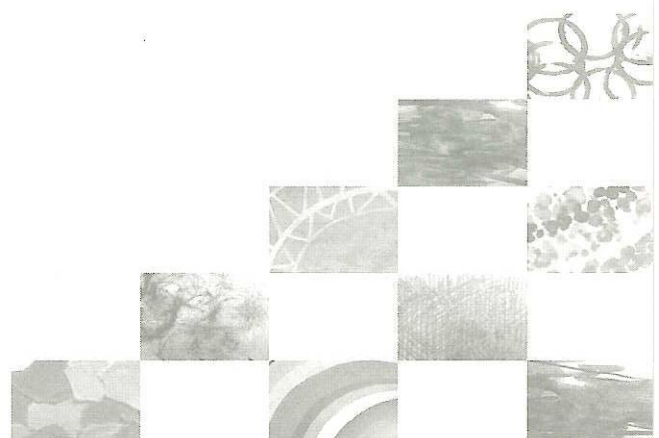
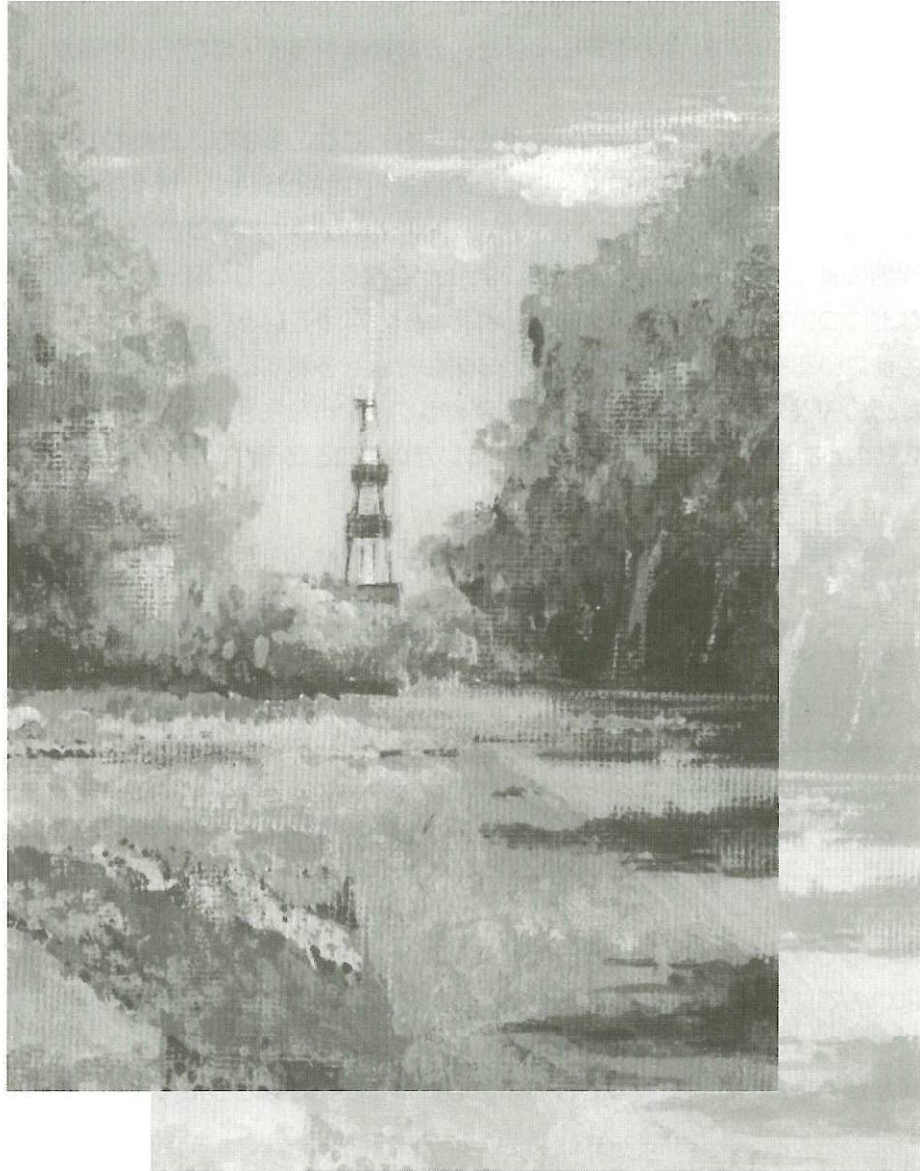
分科会	研究発表者	提言発表者	助言者
A	鳥海利織 (札幌市 札幌わかくさ幼稚園)	栗林友恵 (名寄市 名寄西小学校)	阿部宏行 (札幌大学女子短期大学教授)
	三浦真奈美 (札幌市 北海道教育大学附属札幌小学校)	永縄啓太 (横浜市 南太田小学校)	
B	黒川友理 (札幌市 栄西小学校)	若林朗子 (千歳市 北陽小学校)	橋本忠和 (北海道教育大学函館校教授)
	菊地惟史 (札幌市 円山小学校)	大須賀章人 (名古屋市 豊岡小学校)	
C	久蔵美和子 (札幌市 あいの里東中学校)	櫻井純 (函館市 巴中学校)	森岡香子 (札幌市教育委員会指導主事)
	市川雅基 (札幌市 新陵中学校)	大和田具志 (市原市 千種中学校)	
D	伊藤彩乃 (札幌市 真駒内中学校)	更科結希 (釧路市 北海道教育大学附属釧路義務教育学校)	佐々木 幸 (北海道教育大学釧路校教授)
	千葉有造 (札幌市 平岸高等学校)	水野恭子 (長野県松川町 松川中学校)	

15 刊行物等

- ・一次案内
- ・二次案内
- ・大会集録



研究について



札幌市造形教育連盟の研究

札幌市造形教育連盟 研究部

* 第73回全国造形教育研究大会・北海道大会

* 第70回全道造形教育研究大会・札幌大会 研究主題説明

1. はじめに

グローバル化や情報化、AIやロボット等の技術革新が急速に展開される今日では、時代の変化を予測することが困難だといわれる。特に、SDGs（持続可能な開発目標）への対応や少子高齢化に伴うGDPの減少予測、相対的貧困など、これからの時代に向けて解決を目指すべき問題が散見される。2016年閣議決定された「Society 5.0」¹の社会の実現に向けた、人材育成や学校・学び方の変革が、まさに時代や社会の要請といえる。

このような時代にあって、学校教育（幼稚園を含む）では、多様な人と関わりながら学び、その中で自己の資質・能力を発揮するだけでなく、他者との協働的な課題解決や、様々な情報の再構成、新たな価値創造、目的の再構築などが求められている。また、2020年からの新型コロナウイルス感染症の出現に伴うオンライン学習の推進やGIGAスクール構想により、これまで当たり前に行ってきた教育活動へのICT機器の有効活用などについて、急速な対応が求められる状況となっている。

今、目の前にいる子どもたちが活躍する近未来の社会を予測することは困難ではあるものの、よりよい社会を創るために子どもたちに必要な学びに焦点を当て、次代を生きる子どもたちを豊かに育む造形活動とはどのようなものであるかを考え、日々の実践を紡いでいくことこそが、我々の使命であると考えられる。

以下は、小学校図画工作科のある授業での一コマである。

児童A：先生、黒い折り紙ちょうだい。

教 師：どうして？

児童A：春夏秋冬をつくりたいから、黒が欲しいの。

教 師：どの季節に使う？

児童A：夏に使うの。だってね、夏は影がすごく黒く見えるから。

Aさんにとって「黒色」は、日常生活の中にたくさんある色のひとつであると思われるが、この場合、黒ければよいのではない。Aさんが「表そうとしたこと」は黒色ではなく、夏の強い日差しで生じる影の「黒さ」なのである。まさに、その子の生活経験における色彩のイメージの豊かさの表れであり、その光景が映像として浮かんできたAさんにとっては他の色の折紙では表せなかったのだろう。

子どもには、一人一人の“この子”なりの世界の見方・感じ方があり、それらは大人の想像が及ばない程の豊かさで溢れている。それと同時に、子どもが身の回りの形や色に自ら働きかけたり表そうとしたりする行為、すなわち「自ら働きかける（自律的）な造形活動」は、発想と創造的な工夫との往還を生むと同時に、それらの経験によって造形的な見方や感じ方をより一層豊かなものとするキーワードとなり得るのではないかと考える。

このような「自ら働きかける（自律的）な造形活動」を教育活動の場で保障しながら社会や未来に向かって紡いでいくことは、子どもの感性をより豊かにし、形や色²との関わりを通して自分自身がよりよく生きようとする、つまり次代を生きる子どもたちを豊かに育むことにつながると思う。

2. 研究の経緯

札幌市造形教育連盟（以下、当連盟）では、子どもにとっての「よりよい造形活動」を目指し、保育・授業（以下、授業）の実践を基にした研究理論の構築を図るとともに、造形活動の啓発を行ってきた。

平成23年開催の「全国図画工作・美術教育研究大会in北海道」では、「私を創るー自立と共生の造形活動を目指してー」を大会テーマ、「『あったかい！』をつなげ合う造形活動」を授業実践テーマに据え、「心の発動」と「感動の共有」の二つの視点から授業づくりを行った。

「心の発動」では、題材と出合った際に子どもが「やってみよう！」「すごいな！」と自ら心を動かし、意欲を高めつつ主題を追求する姿を大切に考えた。具体的には、教材化に焦点化し、教材がもつ子どもの学びを成立させる価値や学習目標を具現化するための妥当性、題材構成における学習課題の設定等について検証することができた。また、「感動の共有」では、造形活動を通して感じ取ったよさや美しさなどの感動を他者と共有する姿を大切に考え、授業場面に位置付けた。造形活動を通して美的な価値を求め、心通わせ、共に学び合う体験がより豊かな学びとなり、共生の学習風土が「あったかい！」という心情を生み、つなげ合う造形活動となることが検証できた。

その一方、課題としては、心の発動、感動の共有の二つの視点において指導の側面での手だての検証は一定程度できたものの、意欲の持続や高まりなどといった子どもの心の変容についての評価の難しさを残すこととなった。学習目標に準拠した実現状況を資質や能力で見取る学習評価においては、学習目標から導かれる具体的な評価規準をもって子どもの学習活動を見つめることとなる。この点において、心の発動や感動の状況については、情的な理解や判断が強くなり、客観的かつ分析的な検証に課題を残した。

また、平成28年開催の「第66回全道造形教育研究大会札幌大会」では、「“すき”が輝く造形活動」を主題とし、一人一人が感じる造形的なよさや美しさなどを自分なりに追求する姿を目指した。その中で、「シコウ（思考・試行・志向・嗜好）が生まれる題材の工夫」「響き合いが生まれる場所・場面の工夫」の二つの視点と、更にこれらの視点がより機能的に働くために「場や空間、物や人、身の回りに起こる事象、時間などを関連付けて、子どもが具体的な資質や能力を発揮するために必要な経験を得られることをねらった環境の構成」を授業実践テーマに据え授業づくりを行った。

具体的には、指導案上に環境構成図を位置付け、子ども（個・集団）の思考の流れや響き合い、資質や能力の発揮を促す場面等を想定した「子ども中心の造形活動」を発信した。本大会では、協働的な学びを通して、個の学びが更に深まることが明らかとなったことを成果とした一方で、協働的な学びを進める上で鍵となる言語活動において、音声や文字言語だけによらない造形言語を通じた言語活動の在り方が課題として挙げられた。教科で育む資質や能力をより着実に身に付けるための言語活動であることを再確認するとともに、造形活動における形や色などの造形言語について、授業レベルで改めて捉え直す機会となった。

札幌市の造形教育においては、これまでも一貫して子どもが自分の思いを、自分の形や色などに表しながら、つくりだす喜びを味わう授業の展開を目指してきた。しかし、時代が急速なスピードで進展していることに加え、これまでの大会での「造形活動に対する意欲の持続や高まりをどのように支えていくのか」、「造形言語を通じた言語活動の充実」などといった課題の克服や、子ども一人一人に寄り添った造形活動の提案、造形環境の構成の工夫等の成果のより一層の深化を目指す必要もある。

特に、これまでの大会では、授業参観及び研究協議による研修に主眼が置かれていたこともあり、提案される授業設計に力点が置かれることが常であった。しかし、オンラインでの大会では、それらに加えてより精緻な授業分析や主題・仮説の検証、主張が求められることとなる。それは、我々自身の教育研究活動を未来に向かって拓く機会であり、これまでとは異なる研究発表検討のプロセスの中で、我々が一貫して大切にしてきたものを見直すとともに、次代を生きる子どもたちに提供する造形活動の質の向上に寄与できるものとする。

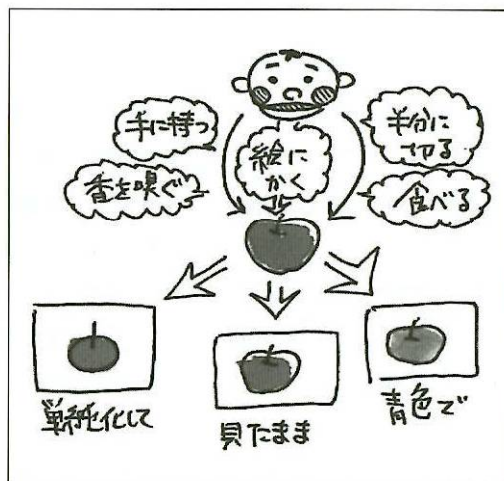
3. 当連盟で目指す子供像

小林秀雄(2004)³は、林檎がどんなに美しい色合いをしているか、つくづく眺めたことのある人は少ないという。なぜならそれは、林檎が造形的な見方・考え方で捉える対象となっていないためである。林檎は食べるため、時計は時間を知るため、椅子は座るために見ると小林は続けるが、いかに深い色をしているか、あるいは機能性を追求した形態かという視点で対象を捉えることの重要性を説いている。

しかし、大人はそうであったとしても子どもはどうであろうか。

ある子は手に持ったり、香りを嗅いだりするかもしれない。また、ある子は半分に切ってみたり、食べたりするかもしれない。あるいは食べ物と知らない子はボールのように投げるかも知れないし、自分の部屋に飾るかも知れない。対象にどのように働きかけるのかは一様ではなく、一人一人の子どもそれぞれの経験によるところが大きい。しかし、自ら対象に造形的に働きかけようとする体験は、例えば林檎と自分とが「一つになる」経験や、「一つになっている」林檎と自分を客観的に捉えたりするような経験を生む。対象を形や色などの造形要素をきっかけとして主観的に捉えたり、客観的に捉えたりする経験を重ねることで、ただの「林檎」が、その子だけの「林檎」となっていく。

そういった経験の連続によって、対象への見方・考え方や働きかけは広がりや深さを生む。前掲のAさんが感じた「黒さ」と同様に、その子だけのイメージをもったり作りだしたりすることができると思う。つまり、対象の形や色、材料、光、肌合い、さらには方向や量感、色価等を教科の基本的な内容として扱う図画工作・美術の窓を通すからこそ、対象を授業の枠を越えて造形的な視点で捉えることが可能となっていく。それこそが、我々の教科でいうところの豊かさの根底をなすものと考えられる。しかし、それは一人一人の子どもが造形的な見方・考え方の主体となって、対象へ自ら(自律的に)働きかけることで得られるフィードバックであると考えられる。それはすなわち、自ら(自律的に)働きかけた度合いによって捉えられる造形的な視点も変動するという仮説が成立する。



例えば「林檎」を造形活動の対象として設定してみる。

「林檎」と出会った子どもは、まず食べ物としての「林檎」と向き合うことだろう。自らの経験と照らし合わせて、食べ物としての「林檎」にまつわる過去の様々な場面を想起するかも知れない。しかし、これらの「林檎」も指導者による教材化次第で、様々な学習活動として展開することが可能となる。

自分が見たままに表したい、あるいは単純化して表したい、さらにはあえて青色にしたい…など、子どもは感性を働かせながら自分なりの捉え方で、対象である林檎に自ら働きかけ探求し始める。そして、形や色などの造形的な視点で「林檎」を改めて捉え直し、イメージを膨らませ、発想と創造的な工夫とを行き来しながら、「わたし」の形や色、材料、肌合いなどを工夫して表現し、他者との協働的な学びを通して、自分を認め合い、今まではそこになかった意味や価値を「わたしの林檎」として作り出したという喜びを子どもは享受するのである。

前述のとおり、造形活動を通して享受される作り出す喜びは、子どもたち一人一人の自ら(自律的)働きかけた度合い、つまり、いかに主体的に学んでいるかによって大きく左右されると考えたため、研究の構造としての構成要素を明らかにすることを焦点化し、整理することとした。

学習指導要領では、造形活動を通して育成された資質・能力が向かう先は、「生活や社会の中の形や色など(美術や美術文化)と豊かに関わる」こととされる。

子どもが自分の身の回りに溢れている形や色などに対し、感性を豊かに働かせながら関わろうとする姿とは、学習活動でのみ見られるものではなく、日常の生活場面においても見られるものである。

例えば、三つ葉のクローバーで作った指輪をまじまじと見つめながら、「葉っぱの緑と茎の緑って違うんだね。」と、普段何気なく見ている対象を、造形的な視点で捉えたり、同じ色でも人によって捉え方が違うことに気付いたりするだけでなく、「元気な感じにしたいから、青色より黄色がいいな。」、あるいは「この形や色を少し変えたら、大勢の人がより快適に暮らせるのではないか。」などと、自らの生活をよりよいものにしようと今まで気付かなかった形や色のよさや美しさを感じ取ったりする姿である。

それらの行為により、子どもが身の回りの事象へアンテナを少しずつ広げ、働きかけようとしたり、あるいは感じ取ったよさや美しさを再構成し、自分の表現へとつなげたりする姿こそが、幼少期の表現活動から図画工作・美術を貫く学びの現れであり、現在から未来へと向かって拓かれる姿なのではないかと想定した。

そこで、研究構造の中核として、以下の「目指す子ども像」の設定に至った。

子ども一人一人が、形や色などを通して、よりよい生活をつくりだそうとする姿

この姿に至る過程が「わたし」を創る」子どもの姿であると考えた。この姿を実現するために、当連盟がこれまでも大切にしてきた、子どもが自ら（自律的に）身の回りの形や色など（美術や美術文化）に関わることを楽しむ姿を大切にするとともに、「作品づくり」ではなく、題材を通して子どもが「自分をつくり出す過程を重視する」という視点から授業を考える。つまり、子どもが自ら対象や事象を造形的な視点で捉えた上で、自分なりのイメージをもち、意味や価値をつくりだすような造形活動を展開する必要があるということである。

子どもの毎日の学習には、新しいことや不思議なこととの出合いが用意されている。そこでの一つ一つの経験が、子どもたちの世界を少しずつ広げ、子どもたち自身を形づくっていく。それを教科（領域）の窓から見つめ、後押しするための要素を明らかにしていく。

4. 研究主題説明

(1) 研究主題

この子が 感じる＝考える＝表す 造形活動

これまで、我々は一貫して一人一人の子どもの思いの実現を大切にする「子ども中心の造形活動」を前提として表現活動や授業を設計・実施してきた。授業後の研究協議では、それぞれの参観者の眼差しを通した子どもの姿から、一人一人の思考や造形行為、それらから読み取れたことを紡ぐと同時に、題材（子どもにとっては学習活動のまとめ、教師にとって学習指導のまとめ）の妥当性の検討を中心に、研究活動を進めてきた。

上記の研究主題は、前述の当連盟が目指す子ども像の実現に向けて、我々がどのような造形活動や授業を構想するかの総体である。以下、理論を考えていく際に、我々が乗り越えてきた2点の問いに触れておくこととする。

- ①「この子」とすると、学習が個に閉じていると読めるのではないか。
- ②造形活動で、「感じる＝考える＝表す」のは当たり前なのではないか。

これらの2点については、研究部を中心に論議を重ねてきたところである。まず、①について説明する。

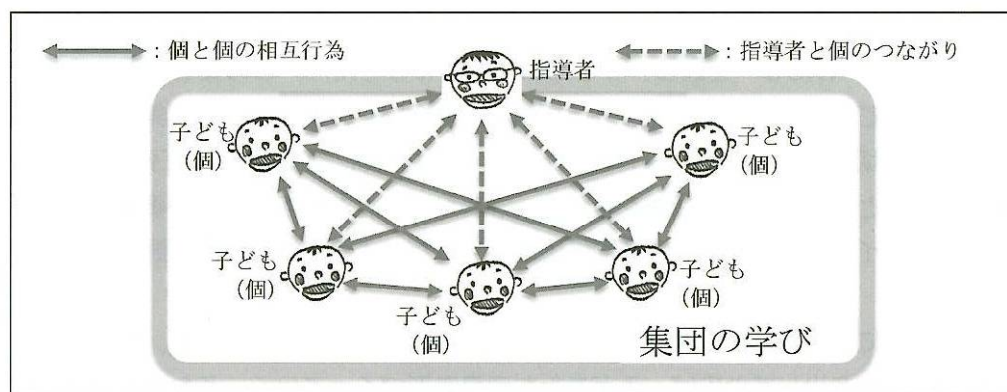
(2) ①「この子」について

研究主題で「この子」を取り上げたのは、我々のこれまでの研究の反省からである。ここでは、学習集団（学級）全員の子どもの思いを大切にし、一人一人の子どもの活動や学びが、それぞれの子どもなりに更新されていくことを願う、我々の決意の表れである。

学習集団は一人一人の「個」の集団である。学習指導の過程では、一斉指導での導入に始まって、一斉指導のまとめ・整理で終わることが一般的である。しかし、我々は一人一人の「学びの深さ」を意識できたのであろうか。もちろん、1単位時間で全ての子どもの「学びの深さ」を見ることは物理的に難しい。しかし、題材を通して、一人一人の学びがより深まること、造形的な見方・考え方が豊かになることを目指す必要がある。

子ども一人一人の「個」によって集団が形成される訳であるから、この子が感じたり、考えたり、表したりする場面で、他者との相互行為は当然発生する。

我々が考える「この子」とは、他者や集団と関わらない個に閉じた学びを意味するのではなく、一人一人の子どもを大切に、個の学びが深まるために各々の相互作用が機能した学びであると考えている。



(3) ②「感じる＝考える＝表す」について

確かに、学びの対象となる事象や材料との関わりを通して「感じたり、考えたり、表したりすること」は子どもの造形活動の中核を為すものである。しかし、当連盟において我々は、造形活動を「実践をしさえすればそこには何かしら学びが生じるといふ、経験主義に逃げ込むことを許してきた」⁴という指摘に着目する必要があると考えた。

本当に「造形活動」を通して、一人一人の学びが深まったのか、生活を豊かにしようとする姿の高まりが生じたのかについて、我々は論理的な主張をすることができるのだろうかと問い直した。西野範夫（1998）は、「子供たち自ら総合的な経験＝学びの資質や能力である〈感じ＝考え＝行為する（＝身体性）〉を紡ぐように総合し、高めていくことによって、子供たちが主体的に学ぶことができる内容や範囲などが」⁵ひらがることに言及する。

我々も、〈感じ＝考え＝表す〉ことに順序性をつけず、意図的にそれらを総合し高めていく『題材』を提供することが、子どもたちの主体的な学びの拡張につながるものと考えている。

さらに、子どもが主体的に造形活動に取り組むためには、目の前にいる一人一人の子どもが造形的な見方・考え方をより豊かに働かせながら、自ら（自律的に）事象や対象に働きかけることで、つくりだす喜びを感じる大切であると考えた。

そのために私たち教師は、子どもの思いに寄り添いながら、一人一人が資質・能力を発揮する場を保障することが重要であると考え、本研究主題の設定に至った。

また、本教科の独自性を意図して「造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して」を研究副主題とした。

5. 研究の視点

これまで、時代の要請や目指す子ども像、研究主題の設定理由について言及してきたが、ここからは授業実践を具体的に考察していく。

子どもが身の回りの形や色に自ら働きかけたり表そうとしたりする行為、すなわち「自ら（自律的に）対象に働きかける造形活動」が、発想と創造的な工夫との往還を生むと同時に、それらの経験によって造形的な見方や感じ方をより一層豊かなものとするキーワードとなり得ると考えていることは前述のとおりである。

この度の学習指導要領改訂では、主体的に学ぶ態度が資質・能力の3つの柱の一つとして整理されているが、これは自己調整や学習方略までを包括する概念である。子どもは学びの主体者といえるが、主体性に関する資質・能力の発揮は、この自律性に支えられるものである。

自律性とは「行動をはじめ、それをコントロールしたのは、ほかならぬ自分である」⁶という感覚を原点とするものであり、他律（性）の対概念とされるが、子どもが自ら（自律的に）対象に働きかける力を発揮するためには、表現や活動への欲求の発動に風を当てる必要があると考えた。

風車は遠くから全体的に風を受けて回ることが一般的であるが、1つの羽根だけに強烈に風を当てても、風車は力強く回ることができる。小澤治夫のライフマネジメント研究における「風車理論」⁷の援用である。この、自ら（自律的に）対象に働きかける力を発揮するための表現や活動への欲求を発動させるものを、ここでは子どもの【もっと！】と設定する。



主体的に、あるいは自律的に造形活動に取り組むこととは、どのような子どもの姿が生まれることなのだろうか。子どもが表現したり感じ取ったりする行為は、自分だけの形や色を感じたり、表したりすることであり、つくりだす喜びを味わうことにつながる。つくりだす喜びは、「次は、もっと形にこだわってみよう。」「今度は、もっと自分だけの色でかいてみたい。」などと、次への造形活動の期待感や原動力となる。このような経験を積み重ねた子どもは、新たな事象や対象に出合った際に自ら「やってみよう」と踏み出し、「やってみたら、できたよ。」という経験を重ね、「もっと、やってみよう！」と、より自ら（自律的に）対象に働きかけながら造形活動に取り組もうとする。このことから、「もっと！」という思いを子どもが生み出すようにすることが主体的に造形活動に取り組むために重要となる。

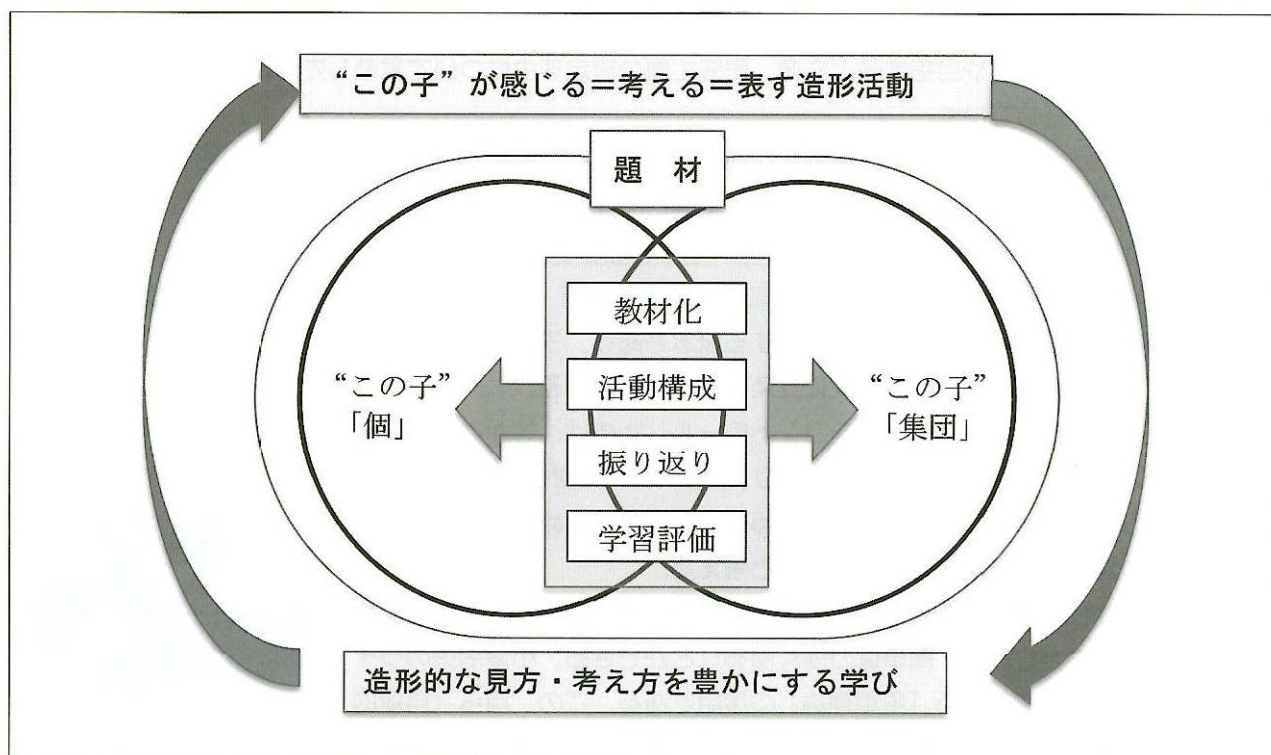
さらに、子どもの「もっと、やってみよう！」という欲求は、形や色を通してよりよい生活をつくりだそうとする態度を高めることにつながると考える。

また、身の回りの形や色などをより深く理解することは、造形活動だけに完結するものではなく、子どもを取り巻く様々な事象や対象へと広がり、これまでに気付かなかった自分自身の感性の豊かさや可能性に気付くきっかけとなる。

この【もっと！】については、目指す子ども像の実現に向けて欠かすことのできない重要な要素であり、研究主題の理念の実現に向けた題材の構成要素を【もっと！】の視点から考えることが、本研究の独自性であると考えている。

(1) 子どもの【もっと！】を生む題材の構成

本教科でいう“題材”とは、国語科などで取り上げられる「題材学習」などとは異なり、子どもにとっては学習活動のまとめり、教師にとっては学習指導のまとめりとされる。⁸ そこで、本研究では、①教材について子ども理解を基に、教育的意義や、活動や目標の妥当性などを検討する「教材化」、②目標の達成とともに、子どもたちの資質・能力が最大限に発揮できることを想定した活動構成、③自他の活動や、お互いの学びの成果を概念化するための相互評価や振り返り、④教師による学習評価（観点別学習状況の評価だけでなく、個人内評価を含む）の4点を題材の構成要素として抽出した。



先に述べたように、それぞれの構成要素に対して【もっと！】をキーワードとしつつ、個の学びと集団での協働的な学びのそれぞれの機能の発揮を目指したいと考えている。

以下に、それぞれの構成要素について述べる。

(2) 授業づくりの視点

視点①「もっと！」を生み出す教材化

子どもが題材と出会った際に、「つくってみたい!」「見てみたい!」と、自ら動きだす姿の実現のための「教材化」を「研究の視点①」として設定する。

まず「教材化」について述べる前に、本研究における「教材」とは、教師の教授活動、児童の学習活動と並ぶ授業の構成要素（岩崎由起夫、1999）⁹とする。岩崎は、教育理念実現のための教育内容や教育方法の核に「教材」を位置付け、「目標、内容、方法、評価の集約されたものとしての機能」を条件とするとともに、子ども自身の選択の幅を保障することの重要性に言及する。さらに岩崎は教材研究の過程を以下の①～③とした。（原文ママ）

- ①教材の発掘・開発…教材の芽をもつ素材を文化的・科学的に深く吟味し、教育的価値の高いものを洗い出して教材のかたちにすること
- ②教材の選択…学ばせたい教育内容を典型的に担う好適な教材を選択し、構成すること
- ③教材の解釈…子どもの視点から予想されるところと教師のとらえ方を対照させながら考察し、授業展開の見地からその教材の効果的な学ばせ方を工夫すること

本研究では、子どもの「もっと！」に着目し、目指す子ども像の実現に向けた①～③を「教材化」の基本要素としつつ、②の後段にある「構成」及び③を次項で述べる「活動構成」とする。③を次項で抽出する理由については後述する。

また、岩崎の研究から、我々が「教材の真の追究者」となるための方向性に関する大きな示唆を得た。子

子どもが一つの題材の中で材料・用具や表現方法などを選択することを重視する「題材内選択」を可能とする教材開発では、子どもの興味・関心、ニーズを把握するために、子どもの立場に立って、以下の3点に留意する必要があるとされる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 材料・用具や場所などの選択ができること (2) 表現方法の選択ができること (3) 自分のペースの選択ができること |
|---|

上記(1)~(3)は、従前の学習において空間・時間・題材の同一性や共通性に重点がかけられ、個性や創造性という学びの要素が軽視されてきたことを問題の所在とする。それらの提案は、我々の大切にしている個と集団における「この子」の学びの実現に向けて通底するものがあると考えた。

そのために、子ども理解を中心にどのような資質・能力の発揮を願うのかといったことを原点として、「もっと！」を生み出す教材がもつ要素を理解・精選するとともに、選択の幅を広げながら、集団との対話的な学びの中で自分らしい作品や活動、見方や感じ方などをつくりだし、一人一人が自分の納得する意味や価値を創造するための教材化を目指したい。

視点②「もっと！」が連続する活動構成

学習を展開していく中で、子どもが「さらに、ここにこだわってつくってみよう。」「次は、こんなことを表したい。」と、「もっと！」を連続的に生みだし、喚起された意欲を持続するとともに、高めながら学びを深める子どもの姿を目指す。

視点①で述べたように、本研究では、子どもの「もっと！」に着目し、目指す子ども像の実現に向けた②の後段にある教材の「構成」及び③を「活動構成」とした。

「この子が感じる＝考える＝表す造形活動」を研究主題に掲げる我々にとって「活動構成」は授業改善における重要なキーワードの一つであり、これらの造形活動を通した学びという考え方は、教科の目標として「表現や鑑賞の(幅広い)活動を通して～」と示されている。

これまで述べてきたように、本教科の特性は子どもが自ら対象や事象を造形的な視点で捉えた上で、自分なりのイメージをもち、意味や価値をつくりだすことであるから、その活動とは、“この子”なりの“意味生成”、あるいは“価値創造”の過程そのものであるといえる。

視点① (3)「自分のペースの選択ができること」については、活動構成を考えるに当たり矛盾に感じられるかも知れない。勿論、岩崎が言うとおり、子どもが今までに体験したことを生かせる内容的なゆとりがなければ、じっくり考えることも、自分なりの工夫を思い付くことも、自他のよさに気付く余裕はない。しかし、E.W.アイズナーが指摘するとおり、「美術学習が成長につれて自動的に学習できるものではなく、指導によって成長できる」¹⁰ものであるのであれば、自分のペースの保障と同時に、教師の意図をもった「“この子”のための活動構成」が必要と考えるものである。

そのため、目指す子ども像や研究主題の実現に向けて、子どもが自己との対話や他者との関わりから、表したいことの実現や、感じたり考えたりしたことの深化に向けて意欲を高めていくことを意図した活動の構成を行う。子どもたちの既習を生かした活動の構造化、材料や用具の扱いと身に付ける学習過程のデザイン、安全かつ相互の学び合いに資する場面の設定など、題材を立体的に構成する。ここで言う立体的とは、作品の完成から時系列に遡った作業手順としての平面的な活動の流れではなく、学びの要素に着目した構成要素を多面的に位置付け、構造化する活動構成を意味する。

なお、前掲の岩崎の教材研究の方向性には、もう一つ「学習主題内選択」が提案されている。これは、複数の題材の中から、児童が自らの興味・関心に基づいて題材そのものを選択するものであり、題材配列や年

間指導計画、カリキュラム編成に直結するものであることから、本連盟の共同研究としての射程とすることは難しいと考えている。

視点③「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り

子どもが、造形的なよさや美しさに対して、自分なりの見方や感じ方の広がりや深まりなどの変容を自ら捉える姿を目指す。

前項で「活動構成」について述べたが、本項はその「活動構成」に位置付くものの中から、特に「振り返り」を共同研究の視点として抽出したものである。そのため、本項でも視点①(3)「自分のペースの選択ができること」について触れる必要があると考えている。

これまでも述べてきたように本研究では、“この子”が自ら対象に働きかける造形活動が、発想と創造的な工夫との往還を生むと同時に、それらの経験によって造形的な見方や感じ方をより一層豊かなものとすることを重視しており、そういった経験の連続によって、対象への見方・考え方や働きかけは広がりや深さを生むという考えを立脚点としている。すなわちそれは、対象を形や色などの造形要素をきっかけとして主観的に捉えたり、客観的に捉えたりする体験を経験化させていく営みである。

いつ、“この子”の造形活動の体験が“経験”となるかは一様ではなく、造形活動に対して即時的に行われているかも知れない。本教科の特性を考えると、1単位時間の終末時に振り返りをする妥当性さえも検討の対象となる。

山本正男(1982)は美術表現の構造を「自分自身を発見し、人間の他を発見し、そして人間の世界を発見し、その意味を自覚する」¹¹⁾とする。その視座からは、「自分のペースでの振り返り」だけでは“この子”の集団としての学びとしては不十分であると考えられる。

造形活動に没頭している子どもは、その対象や作品と一つになっている。つまり、そこでは主に主観が働いているといえる。しかし、一度立ち止まって考えたり、自身の活動を振り返ったりするような客観化がなければ、山本の言う「自分の発見」には至らない。すなわち一人一人の“この子”が自分のペースで適宜体験を振り返る必要がある。しかし、それだけでは「他者や世界の発見、そして自覚」には及ばない。他者との対話的なやり取りを通じた「更なる客観化」があるからこそ、自分の個性に対する認識を深めたり、自他の表現のよさに気付いたりすることができると思う。

一人一人の“この子”のペースでの振り返りを保障するからこそ、自己内対話で終始することなく、他者との対話的な振り返りの活動を活動構成に位置付けたいと考える。

視点④「もっと！」を高めるための学習評価の工夫

表したいことや、感じたこと、または、表したことに対して感覚的に捉えていることを、形や色などの造形的なよさや美しさと結び付けて考える子どもの姿を目指す。

本項では、本研究で目指す子ども像や研究主題の実現に向けた「教師による学習評価」を取り上げる。視点①の教材化の中で、子どもたちが資質・能力を発揮する姿(題材としての目標)が想定され、視点②の「活動構成」に伴って評価計画が設定されるわけであるから、これまでの視点と連動しなければならないものであり、指導と評価の一体化を目指す上で欠くことのできない視点である。

特に、本研究における学習評価は、観点別学習状況の評価と個人内評価の両者を、「子供たちが次への一歩を踏み出そうとする」¹²⁾ための「形成的評価」の視点で捉えようとするものである。「形成的評価」自体に新規性はないが、「学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない」¹³⁾との指摘から、「形成的評価」が定着していない、あるいは機能していないと考えることが妥当であり、それを改めて共同研究の視点として焦点化させる意味があるのではないかと考えるに至った。

形成的評価は指導と評価の判別がやや難しいが、辻田(2002)は、「発想や構想に従って、活動を進め

ようとしているかを見守るところから始まり、こだわりやつまずきに対する支援、活動に傾ける子ども達の思いに対する共感的理解、それに活動への試みや工夫を促すことが主要な評価の働き¹⁴であるとする。

したがって、観点別学習状況の評価に準拠しつつ、一人一人のよさや可能性を認め、それらの更なる発揮を促すための子どもにとっての学習活動を、教師の学習指導を絶えず更新・改善することを目指した「働きかけ」である。

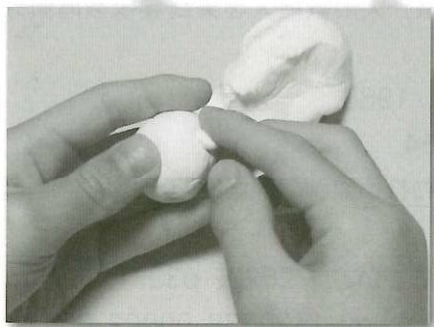
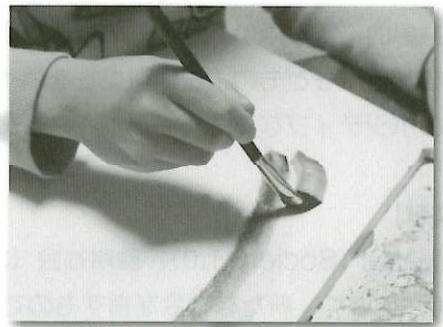
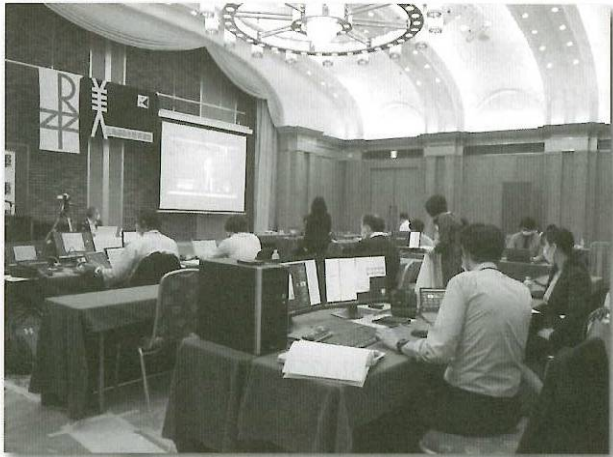
図画工作・美術に求められている学習評価は、芸術の権威的な評価でも作品の出来映えを判断するような、いわゆるコンクールの格付けでもない。「子供が自ら考え、主体的に判断し、表現できる資質や能力を基礎・基本の中核をなすものとしてとらえるとともに、それらを子供たちが自ら獲得するようにする」¹⁵のために、表現や鑑賞の活動を通して、一人一人のよさや可能性を認めたり、それらの発揮を促したりするような、指導・支援と一体となった学習評価を目指したい。

そのため、授業において子どもが感覚的に捉えていることや表現の工夫などについて語っていることに、教師が共感的に寄り添い、子どもの表現意図と造形的な視点や活動の意味、自己調整に関することなどを関係付けながら、子どものよさや可能性を認め、それらの更なる発揮を促すような、一人一人の“この子”にとってのポジティブなフィードバックとしたいと考える。

【引用文献】

- 1 狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く、新たな社会を指すもので、「第5期科学技術基本計画」において我が国が目指すべき未来社会の姿。 https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/
- 2 文中には便宜上「形や色」と標記しているが、中学校学習指導要領で示されている「形や色彩」と同義とする。
- 3 小林秀雄『美を求める心』新潮社、2004、pp245-252.
- 4 小澤 基弘 他「うみだす教科の内容学」平成 25・26 年度東京学芸大学連合大学院教員研究プロジェクト研究成果報告書、p5.
- 5 西野範夫「教育課程基礎講座7」初等教育資料、平成10年5月号 (No.685)、p64.
- 6 波多野詔余夫・稲垣佳世子『無気力の心理学—やりがいの条件—』中央公論社、1998、p131.
- 7 例えば、小澤治夫 (2009) 子供の生活リズム向上のための調査研究、文部科学省
- 8 例えば文部省『新しい学力観に立つ図画工作の学習指導の創造』日本文教出版、1993、p51.
- 9 岩崎由起夫「図画工作科における教材開発に関する一考察」大阪教育大学実践学校教育研究第3号、1999、pp69-76.
- 10 E.W.アイズナー『美術教育と子どもの知的発達』黎明書房、1986.
- 11 山本正男『美術教育学への道』玉川大学出版部、1981、p34.
- 12 児島邦宏「育てようとする学力に対応した評価方法を—問われる教師の評価能力—」啓林館、CS研レポート、vol.51、2004、p5.
- 13 文部科学省「新学習指導要領の全面実施と 学習評価の改善について」2020、p32.
https://www.mext.go.jp/content/20201023_mxt_sigakugy_1420538_00002_004.pdf
- 14 辻田嘉邦『造形・美術の教育評価』日本文教出版、2002年、p121.
- 15 文部省『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』東洋館出版、1993年、p10.

大会風景・子どもの作品





森長 弘美 大会会長による挨拶



大野 正人 全国造形教育連盟委員長による挨拶



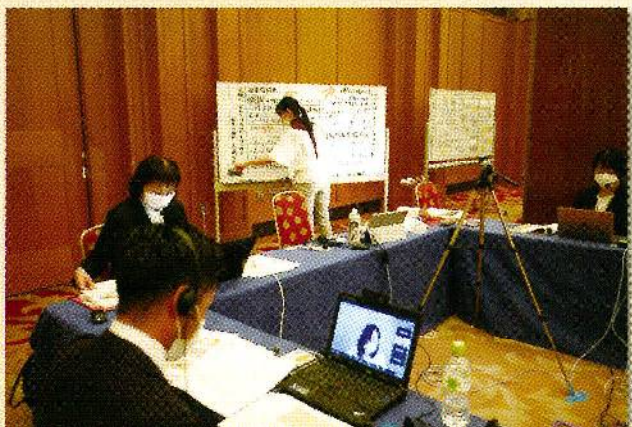
基地局 第一会場（本部）の様子



分科会Aの様子



分科会Bの様子

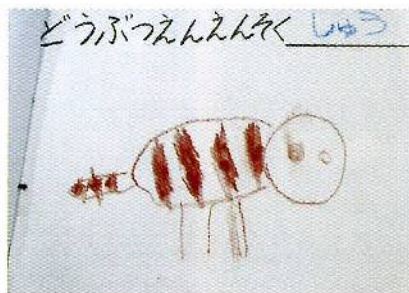
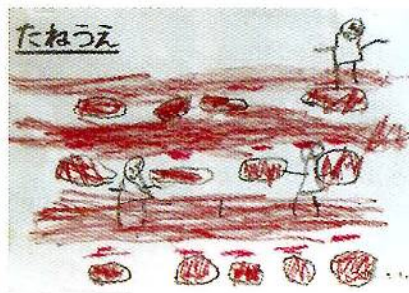
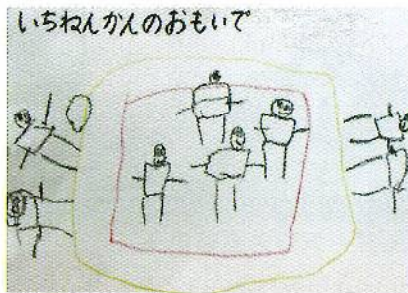


分科会Cの様子



分科会Dの様子

子どもの作品①

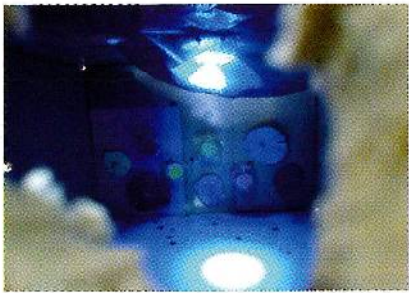


分科会 A 研究発表 札幌わかかさ幼稚園 鳥海 利織先生

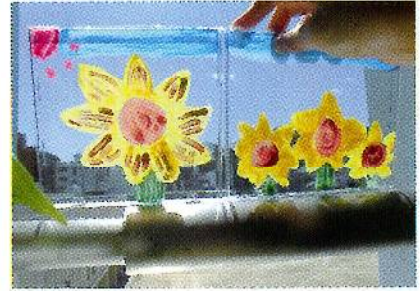
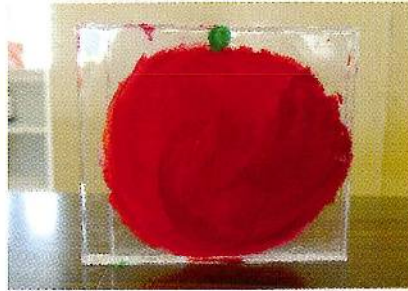


分科会 A 研究発表 北海道教育大学附属札幌小学校 三浦真奈美先生

子どもの作品②



分科会 B 研究発表 札幌市立栄西小学校 黒川 友理先生

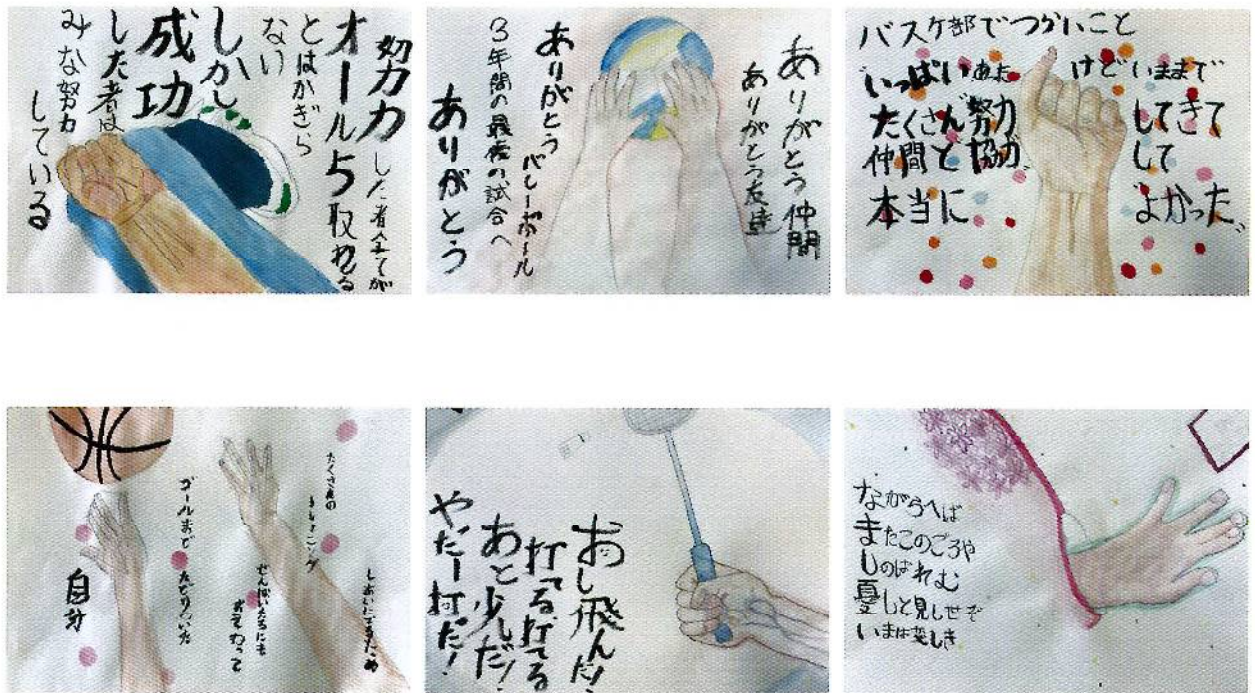


分科会 B 研究発表 札幌市立円山小学校 菊地 惟史先生

子どもの作品③

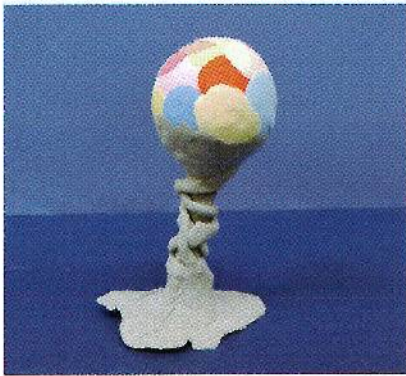
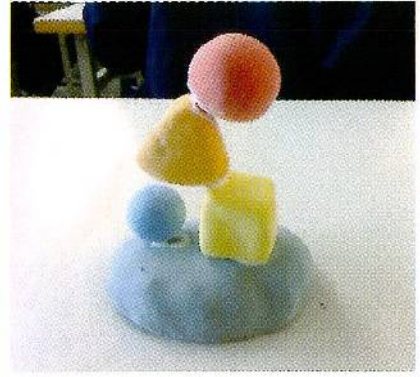
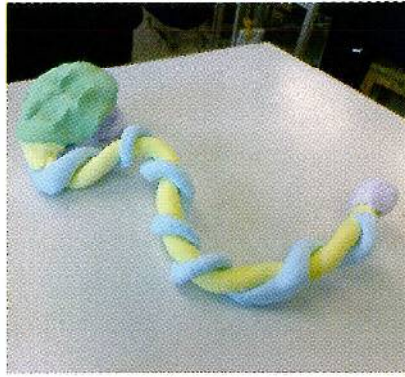


分科会C 研究発表 札幌市立あいの里東中学校 久蔵美和子先生

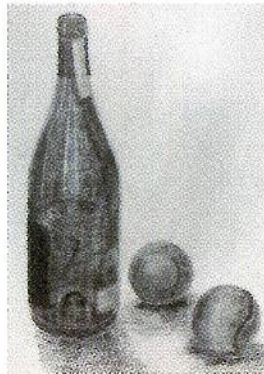
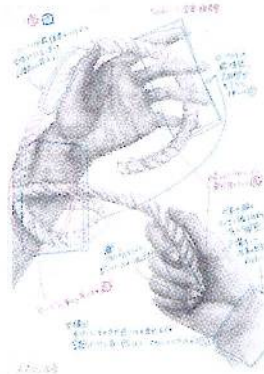


分科会C 研究発表 札幌市立新陵中学校 市川 雅基先生

子どもの作品④



分科会D 研究発表 札幌市立真駒内中学校 伊藤 彩乃先生

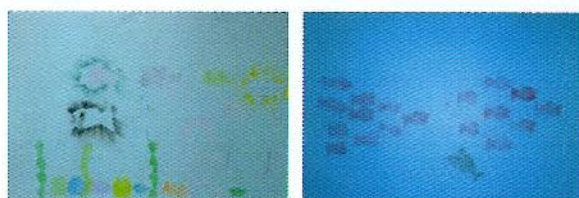
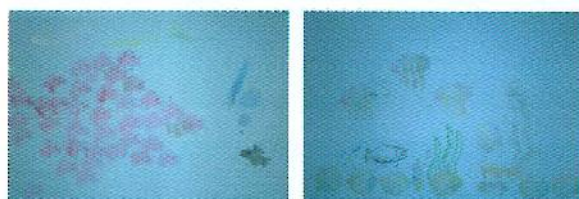
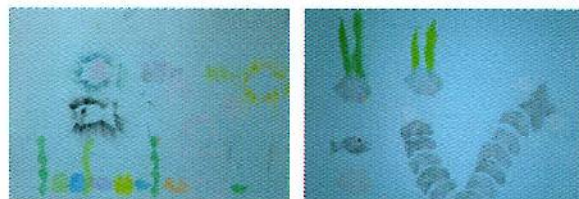


分科会D 研究発表 市立札幌平岸高等学校 千葉 有造先生

子どもの作品⑤



分科会 A 提言発表 北海道名寄市立
名寄西小学校 栗林 友恵先生



分科会 B 提言発表 北海道千歳市立
北陽小学校 若林 朗子先生



分科会 A 提言発表 神奈川県横浜市立
南太田小学校 永縄 啓太先生



分科会 B 提言発表 愛知県名古屋市立
豊岡小学校 大須賀章人先生

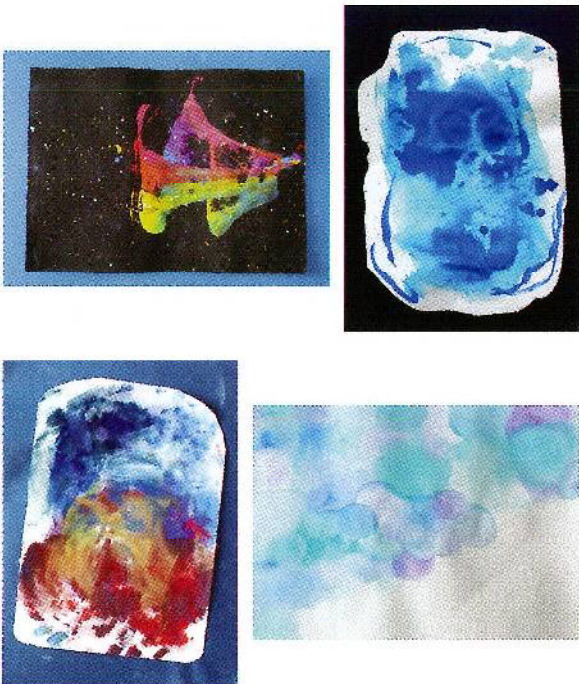
子どもの作品⑥



分科会C 提言発表 北海道函館市立
巴中学校 櫻井 純先生



分科会D 提言発表 北海道教育大学附属
釧路義務教育学校 更科 結希先生



分科会C 提言発表 千葉県市原市立
千種中学校 大和田具志先生



分科会D 提言発表 長野県松川町立
松川中学校 水野 恭子先生

大会風景②



講演講師紹介



基地局 第二会場（分科会会場）の様子



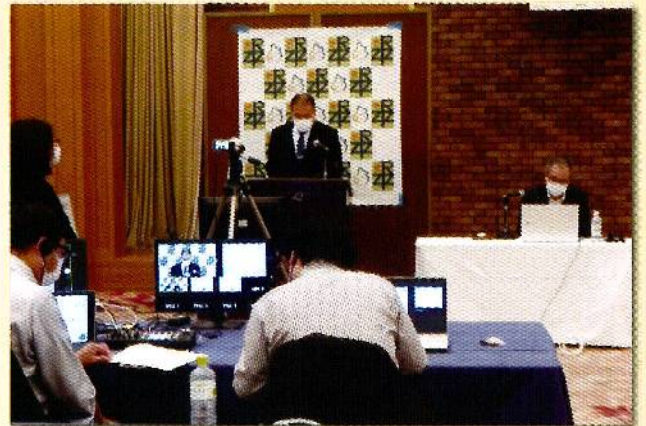
長野県美術教育研究会 会長 村松 哲史様によるご挨拶



基地局 第一会場（本部）の様子



次期 長野大会大会長 高山 顕光様によるご挨拶



東 尚典 大会副事務局長による大会宣言



勝田 真塩 大会実行委員長による挨拶



鶴内 秀一 全国造形教育連盟事務局長による大会終了後の挨拶

分科会 A

研究発表

札幌わかくさ幼稚園 鳥海 利織
北海道教育大学附属札幌小学校
三浦真奈美

提言発表

名寄市立名寄西小学校 栗林 友恵
横浜市立南太田小学校 永縄 啓太

助 言

札幌大学女子短期大学部 阿部 宏行

1. 研究発表概要	発表者
幼稚園 成長を支える 子ども理解と関わり	札幌わかさ幼稚園 鳥海 利織

絵の活動になると不安から手が進まない子どもの心が動き、「もっとかきたい！」と変容していく過程に、どのような保育者の関わりがあったのか。子ども理解と評価についての発表。

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【子どもの思い】 園外活動・体験農園での栽培体験・長期休暇の思い出などを、思い思いに絵に表す。

【五感の働き】 実際の感触や色の鮮やかさ、形の不思議さなど、五感に強く焼き付いた思い出によって、表したいものを生む。

【思い出に浸る】 心に残ったことをのびのびと表現し、絵を通してもう一度思い出に浸ることを目指す。

集団・年齢別活動

- 健康領域
- ことば遊び領域
- 音楽・音楽身体表現領域
- モンテッソーリ教育

園外活動（一例）

【お出かけ】 自然の中で、五感・直感・感性を育む。

【体験農園】 りんご園での観察・わかさ農園でジャガイモ栽培。





【年長児小学校交流】

近隣の小学校1年生との交流。校内探検・給食体験などを通して、就学に対する意欲を高める。

○絵画・製作領域

表現

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫
<p>絵にも「この子」自身にも笑顔が見られない。 友達と関わる様子も見られず、不安の色が強い。</p> 	<p>○それぞれの思い出や一番心に残ったことを発表する。</p> <p>○表したい意欲を十分に引き出し活動に入る。また、表しながら表現方法を広げていけるよう用具や描画材を工夫した。</p> 	<p>【受け止め】 共感的に寄り添う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に活動 ・「この子」目線で活動構成を見直していく。 <p>心の動きを読む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困っていることや、やってみたいことを伝える一歩をサポート。 
<p>一緒に活動し、不安の要素や歩み出そうとする心の動きをつかむ。「あのね、大きなくちばしで、黄色い色だった！」「先生にも教えてあげるね。」</p>	<p>視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り</p>	<p>【関わり・手立て】 発想を引き出す声掛け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対話から「この子」の表したいことや思いを引き出していく。 <p>表現に関連付けていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・形や色と結び付けていく関わりを大切にしたい。
<p>「かきたいことがいっぱいあって、迷うんだよー。」「先生に見せたいな。」 自分らしい表現を楽しむ姿に。</p> 	<p>○自由に鑑賞し合えるように用具や活動の環境を工夫し、互いのよさに気付けるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思い付いたこと ・できたこと ・できそうなこと など。 	

実践を振り返って

- 子どもの心に少しずつ寄り添い、どう表現したいのか、今どのような気持ちなのかをつかむことで、子どもが自分から踏み出す姿が見られた。
- ・子どもの中に気付きや小さな課題が生まれたり、試してみたくなくなったりするような種まきや仕掛けを大切にしていきたい。

2. 研究協議報告書

- ・当日は63名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、視点①と視点④に重点を置いて協議を行った。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】 「もっと！」を生み出す教材化	【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の多様な活動がわかりました。五感、大切ですよ。 ・教師とだけでなく、友達との関わりも生み出せるような場づくり、大切ですね。すてきなと思います。 ・いろいろな活動を通して子どもが成長していることが伝わってきます。このような全人格的な成長は先生と子どもの温かな関係によって支えられているのだと感じました。 ・絵に表すことで、もう一度楽しめるという考え方がとてもしっくりきました。 ・五感を働かせた経験が、イメージを広げ、絵に表わすための豊富な材料になっているのだと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども一人一人のことを顔や姿から丁寧に見取っていることが伝わってきます。私も見習いたいです。 ・体験や環境、子ども自身が選んだ活動からいろいろな感性を得ている様子がよく分かります。保育者の「こぼさず見取る力」がすばらしいなと思いました。 ・子どものメッセージに「寄り添う」「かかせる」ではなく「支援する」のは、小学校の先生が学ばなければならないところですね。 ・困っているような姿を見るとすぐに声を掛けてしまいがちですが、表情やつぶやきを見取り、様子を少し見守るといった関わり方は小学校でも大切だなと思いました。子どものもっている力、乗り越える力をまず教師が信じる、ということなのでしょう。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・五感を働かせた園の取組が子どもたちのよりよい成長につながっている。その取組を活動だけで終わらせるのではなく、絵に表すことで楽しかった思い出を経験からイメージへとつなげ、子どもの意欲や関心の高まりが見られる。
- ・子どもたち一人一人を見取ることで、何に困り感を感じているかを把握し、画一的な指導から個々への指導をすることができた。

イ. 課題

- ・幼稚園の発達段階で子どもに対する効果的な指導、支援について学ぶべき点が多かった。画一的な指導に陥ってしまいがちな小学校の指導についても「適切な支援」や「待つ姿勢」について学んでいかなければならない。

(3) 今後の授業改善に向けて

- ・園の取組から、視点①の教材化について、子どもの思いを十分に引き出すために経験が重要であると分かった。小学校では、思いを引き出すために子どもの関心・意欲が高まる教材化、学習の導入を工夫していく。その際には、題材は同じであったとしても子どもの思いを大切にし、その子が表したいものを表せるように困り感を見取りながら指導していく。
- ・教師の価値観や作品の完成度に目を向けるのではなく、子どもの表現への満足度を一番に考え、教材化、題材構成をしていく。
- ・視点④にも関わり、題材の途中で子どもに適切な評価をしていく。表したいものは何か、次にどうしたいのか、その子と「同じ歩み」で指導にあたっていく。題材の終わりにはその子の表現のよさを十分に価値付け、意欲的に表現に取り組めるように評価していく。

1. 研究発表概要	発表者
小5 この子が主体的に感じる＝考える＝表す 『気持ちの形・色』（絵に表す）	北海道教育大学附属札幌小学校 三浦真奈美

ふわとろ絵の具に触れて感じたことや形・色、自分の気持ちを基にどのように主題を表すか考え絵に表す題材。

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【ふわとろ絵の具】 液体粘土と水彩絵の具を混ぜ合わせたもの。手指で扱い感触から行為や気持ちを引き出す。支持体上で混色したり凹凸を付けたりするとそのまま固まるので形や色の工夫を引き出すことができる。

【卵パック】 指で混ぜて感触を味わうことができる。1度に10色作ることができる。密閉して再利用できる。

【白板段ボール】 最初の1枚は教師が15cm四方にカット。以降は表したいことに合わせて子どもがカット。丈夫なので、ふわとろ絵の具を載せて混ぜ合わせ、形や色の工夫を引き出すことが可能。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
描画材を手指で扱う感覚や行為を通して、その立体感や可塑性が生み出す形や色について理解している。また、材料・用具や手指の動きなどに対する知識や経験を生かし工夫して表している。	感じたことや自分の気持ちや形・色を基にイメージをもち、材料・用具の特徴や手指の動きと結び付けながらどのように主題を表すかについて考えている。	主体的に材料や用具に関わったり、感じたことや自分の気持ちや形・色を基にイメージしたりして学習に取り組もうとしている。

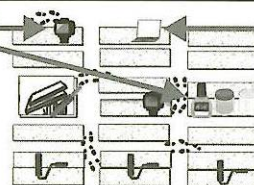
活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> ・（この子）手のひらでふわとろ絵の具を混ぜ合わせ混色を試す。「板段ボールでなく、自分の手を作品にしたい。」「このまま帰って家族に見せたい。」 ・（教師）受け入れる。 ・（友達）「これどうやったの？」 ・（この子）「全部の色を入れて混ぜるのさ。」と教える。その後「そうだ！今度は茶色と緑と…」と色の使い方に意図が生まれた。 ・（この子）「平面でなく立体にして接着したい。」 ・（教師）「考えがあるんだね。」線接着の方法が書かれた掲示物を示す。 ・（この子）立体にして接着し「向きを決めなくなかった。」と考えを教師に伝えた。 	<p>活動Ⅰ（1時間）思いのままに</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卵パックに液体粘土と水彩絵の具を入れて指で混ぜ、ふわとろ絵の具をつくる。 ・指や手のひらで感触を味わいながら白板段ボールの上で思いのままに表す。ふわとろ絵の具の特徴や形・色に興味をもち、活動への意欲をもち始める。 <p>活動Ⅱ（1時間）見合い話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時の自分の表現に題名を付ける。 ・教師によって抽出された3人の表現を見る。題名を予想したり本人の思いを聞いたりしながら、どのように気持ちを表すかについての問題意識をもち、気持ちを表現することへの意欲をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の表現を撮影し、題名や表現に込めた思いを書き添えることで、感じたり考えたりしたことを自覚することができる。 ・撮影した画像、題名や思いをGoogleスライドに挿入し、学級の共有ドライブに保存することで、いつでも自他の表現を見ることができる。
	<p>活動Ⅲ（Ⅲ・Ⅳ合わせて6時間）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手のひらサイズ程の板段ボールにふわとろ絵の具を使ってどのように気持ちを表すか考え、表す。 ・用具を自由に選択できるようにすることで、主題と工夫の往還を保障する。 	<p>活動Ⅳ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成の美しさや感じを考えながら、これまでの表現の組合せ方や背景の形・色を工夫して主題を表す。 ・新しく90×60cmの板段ボール、ローラー、接着剤を提示する。

実践を振り返って

○材料に興味をもって関わったり、問題意識をもって活動したりすることで、形や色、材料に浸りながら、表したいことを見付け、工夫して表すことができた。

△活動ⅢとⅣを同時に進行したため、構成の感じを考えることへの見通しをもてない子どももいた。先の見通しをもてるような手だてが必要である。



2. 研究協議報告書

- ・当日は63名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、視点①と視点②と視点④に重点を置いて協議を行った。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】 「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】 「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・液体粘土・絵の具からつくったふわとろ絵の具を、高学年の「気持ちの形・色」の表現に活用できていたと思いました。普段から使い慣れている材ではないので、より表現の多様性を引き出すことができたのではと感じました。 ・ふわとろ絵の具の表現が、削ったり、ぼかしたりと多様になっていて、さすが高学年ですね。過去の豊かな経験が「もっと！」を加速させていることが分かりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いのままに表現したものを、構成する活動を取り入れることで、表現したままで終わらず、改めて自分の表現を振り返り、考えがより深まってくことを感じました。 ・子どもの思い・発想を支える教師の努力に頭が下がります。その努力や準備の舞台が広げれば広いほど、子どもは安心して自由に表現していけるのだと考えることができました。 ・見通しは、活動に安心感が得られるものの、詳細になりすぎるとわくわくドキドキが失せてしまうことがあると思います。バランスが難しいと思います。
<p>【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの活動を認めるということは、子どもの発展的な思考を認めるということにもつながること、子どもの人格を認めるということに大変共感しました。 ・手のひらパレットなどの意味の大切さを保護者にも理解してもらい、図工の本当の理解者を学校の外にも増やしていくことが重要だと思います。 ・児童の表現を嬉しい気持ちで受け止め、その意味や価値を教師が読み解いていくと言った教師の評価に学ばせていただきました。 	

(2) 成果と課題

ア. 成果
<ul style="list-style-type: none"> ・題材を通して形や色、材料に浸ることで、主体的に自分の主題と向き合い、どのように表すか工夫することができた。 ・学校内で造形活動を終えるのではなく、学校外や生活の中にもつなげていくことで、そのよさをより実感することができた。
イ. 課題
<ul style="list-style-type: none"> ・活動に見通しをもてると、安心感が生まれるが、子どもの主体的な活動を遮りかねない。教師が、子どもたちにどのような資質・能力を発揮してほしいと願うかをもとに、バランスを考えることが大切だ。ただし、活動の見通しをもてない子に対して、教師がいくつかの手だてを用意しておく必要があった。

(3) 今後の授業改善に向けて



<ul style="list-style-type: none"> ・今回の授業から、高学年でも、自分の触った感じから思いを十分に広げられるということが分かった。大人の既成概念にとらわれず、子どもの関心・意欲が高まり、「もっと！」が生まれる教材化を行っていく。また、活動の見通しをもつことと、子ども主体で活動を行っていくことのバランスを考えて活動構成をしていく。教師のこうなってほしいという願いをもとに、子どもの様子を見ながら考えることが望ましい。 ・図画工作であっても言葉をよりどころにしながら、他者評価を行っていく。自分の思いを表したものを、他者から認められることで、子どもの自由な表現や、自己肯定感につながると考える。

1. 提言発表概要		発表者
小 2	造形的な見方・考え方を広げる合科的な学習の在り方 『音づくりフレンズ』+『いい音見つけて』（小2・工作に表す）	名寄市立名寄西小学校 栗林 友恵
身近な材料で音を出す仕組みをつくり、いろいろな形や色、触った感じなどを捉えながらイメージした飾りを付け、鳴らして楽しむ題材。		
視点①「もっと！」を生み出す教材化 【空き箱、空き缶などの材料】 身近にあり、叩いたり、擦ったりして様々な音を出して試すことができる。 【音楽教材】 『森のたんけんたい』の歌詞から森の様子や動物をイメージできるようにする。 【材料のコーナー】 輪ゴム、多様なテープ類、布、色紙など様々な材料を並べ、子どもたちの創作意欲を膨らませる。		

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 音が鳴る材料や仕組みから、思い付いたものをつくる時の感覚や行為を通して、いろいろな形や色、触った感じなどに気付いている。 はさみ、木工用接着剤、テープなどに十分に慣れるとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、表し方を工夫している。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のイメージをもちながら材料を鳴らして感じたこと、想像したことから、表したいことを見付けている。 音を鳴らして自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さについて考え、見方や感じ方を広げている。 	<ul style="list-style-type: none"> つくりだす喜びを味わい、楽しく音が鳴る材料や仕組みから、思い付いた物をつくる学習活動に主体的に取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> 体を動かしながら、楽しく歌うことができた。3番の歌詞の「妖精」の動きを積極的に考えていた。 空き缶を使って音を出そうと試行錯誤を繰り返す。どのような楽器をつくるか、なかなかイメージがまとまらない様子。  <p>振って音を出すことにこだわっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ギターのような形にもしてみたいし、たいこもつくってみたいと迷う様子。歌を流して、もう一度体を動かしてみると… 「妖精」の動きで手をひらひらさせた時に音が鳴る、でんでんたいこにしよう。  <p>友達に楽器の仕組みを話して、拍手をもらっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 歌を歌いながら楽しく発表できた。 	<p>1時間目 【『森のたんけんたい』を歌って、歌に合う楽器の音を考えよう（音楽）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 歌には、誰が出てきたかな？ 歌詞の意味を考えながら、動きを付けて歌おう。 <p>2時間目 【いろいろな材料を使ってどんな音がなるのか試そう（図工）】</p> <ul style="list-style-type: none"> どんな音の出し方があるかな。 「叩く（コンコン）」「擦る（ジリジリ）」 「振る」（シャカシャカ）「弾く（ビョーン）」 いろいろな材料で試してみよう。 <p>3・4時間目 【楽しいと感じた材料を使って楽器を組み立てよう（図工）】</p> <p>「輪ゴムを使って、ギターのようにしようかな。」</p> <p>「たいこを作って、歌に出てくるためきにしようかな。」</p> <p>「妖精はどうやってつくろうかな。」</p> <p>5・6時間目 【音に合うように、楽器を飾ろう（図工）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 楽器を森の中にいる生き物のように飾り付けよう。 「妖精の動きを生かして、音が鳴るようにしたよ。」 「でんでんたいこの先は、妖精らしくポンポンで飾ったよ。」 「歌に合わせて、演奏したいな。」 <p>7時間目 【歌に合わせて演奏しよう（図工・音楽）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 楽器を鳴らしながら、友達の作品の面白いところを見付けよう。 	<p>視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り</p> <p>【「できた」ら立ち歩き交流】</p> <p>「見付けた」、「ここまでできた」と思ったら、席を立てて友達と作品について「話す」よう促した。「こんなふうにしたら楽しいよ。」と会話を弾ませる中で、自然に自他のよさに気付くようにした。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>【個別の言葉掛け（よさを共感する）】</p> <p>「すてきな音を生かしているね。」など、子ども本人も自信をもっているであろうことを言語化して、共感することで、学習意欲を高める評価につなげるようにした。</p> <p>【めあての再確認】</p> <p>「どんな音から想像したのかな。」「どんな生き物になるように飾り付けをしているのかな。」など、本時のめあてに立ち返って、子どもたちが作品をつくっている意図について聞き出すように努めた。</p>

実践を振り返って

- 音楽と図工の学習を合科的に行うことで、子どもたちが明確な目的意識をもって学習に臨むことができた。
- △音ではなく、材料の形や色からイメージした楽器をつくらうと考えていた も見られた。
- ・合科的な学習を上手に取り入れることで、子どもたちの関心をより引き出しながら学習を構成することができる。

2. 提言協議報告書

- ・当日は63名の参会を得て協議を行った
- ・本提言協議では、視点①と視点②に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・森の音が発想を生む手だてになっていると思います。しかし、反対に自由な発想を制限することになってしまっていないでしょうか。 ・音楽と図工の教科の相乗効果が生まれたと思った。音によって子どものイメージを広げることができたと思います。 ・小学校の教育課程で一旦分離された感覚を再び統合、総合させる学びがある時間になっていることに大変興味があります。中学校でも音から形・色をつくり出す実践が見られるが、形・色から音を作ることはできるのかなと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・この題材は、ともすると鳴らしたい方が優先して、たいこやマラカスばかりになることがあり、楽器の発想を広げる工夫が必要だと感じていました。子どもの発想を広げるためにどのような声かけをしたのでしょうか。 ・他教科や行事等と関連させることで、子どもが資質・能力をより効果的に働かせることができます。このような実践が学校内や他校と共有させる仕組み作りも進めたいです。 ・材料からどんな音が生まれるか、試し、浸る時間が最初にしっかりあること、その中で音のよさに共感し合う姿が、その後の活動にもつながっていることを感じました。子どもたちに丁寧に寄り添う教師のまなざしがすてきだと思いました。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・音楽の時間に学習した曲や、材料の音からつくるものを考えることは、発想することが難しい子どもにとっては有効だった。
- ・「中間発表をしたい」という子どもの声から、どのような楽器になってきたかを全体の場で見せ合う活動をした。また、「おもしろいものができた！」と心が動いたときや、「ここからどうしようかな。」と困ったときに、自由に交流をさせた。このような友達との対話がイメージを広げることにつながった。

イ. 課題

- ・音楽で学習した曲をもとに楽器を製作していくよう題材を構成し、子どもにもその見通しをもたせたことで、自由な発想を制限してしまった可能性もある。楽器を動物に限定せず、様々な考えを子どもたちから引き出した方がよかった。
- ・楽器をつくる際に、「音」から発想を促す傾向が強かった。学習指導要領の共通事項にもあるように、材料の「形や色」にもっと目を向けさせるような声掛けの工夫も必要だった。

(3) 今後の授業改善に向けて

- ・図工と音楽で横断的な学習を計画することによって、子どもの学習意欲を高め、「もっと！」を生み出す教材をつくることができた。これからも、題材構成を行う際には、教科横断的な学習を行うことによって、子どもの学習意欲を高める効果があるかどうか検討していきたい。
- ・一方で、横断的に学習することにより、子どもの発想を制限することにつながらないように、学習の進め方や、子どもへの声掛けを慎重に行う必要がある。あくまで子どもの立場に立った学習構成になるように配慮していく。
- ・子どもの発想を広げる手だてとして、技法やつくったものを学級内で自由に交流させたことが有効であった。今回の協議で、改めて「形や色」に着目させる大切さに気付いた。「形や色」から子どもが発想を広げられるよう、教師が積極的に声を掛けたり、子どもの活動を価値付けたりすることが必要だと考えた。
- ・子どもが、他者の考えに共感したり、価値付けたりすることの大切さについて改めて考えた。これからも、子ども同士がよさを認め合えるような風土づくりに努めていきたい。

1. 提言発表概要	発表者
小6 子どもの「あそび」から「まなび」へ 『感じて 見つけた マイワールド』(小6・鑑賞)	横浜市立南太田小学校 永縄 啓太



鏡と画用紙を用いて、鏡に反映された画用紙の形や色をとらえながら自分のイメージした世界を鑑賞する題材。
万華鏡のように偶然発生的に表れた美しさ・おもしろさを感じるだけでなく、自分自身が意図的に画用紙を配置したり、組み合わせたりすることで、よさや美しさを鑑賞し、鏡の中に、不思議な世界(自分だけの世界)を見付ける試みでもある。


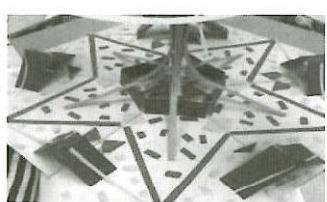
視点①「もっと！」を生み出す教材化

子どもたちも、一度は万華鏡の変化していく形や色の世界を、楽しみ遊んだ経験があるに違いない。しかし、万華鏡の中の世界を「見た」ことはあっても、自分の手で、形や色を自在に変化させて楽しんだ経験はおそらくないのではないだろうか。「変わりゆく形や色の世界を、その様相を感じながら味わい楽しみ(鑑賞)、その変化を自分の手の中で変容させること(表現)はできないだろうか。」そんな問いから題材化を目指した。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
鏡の中に映る形や色を捉える感覚や行為を通して、形の美しさ、奥行き・バランス・色の鮮やかさなどを理解している。	自分や他者が見つけた形や色の造形的な特徴を基に、自分のイメージをもち、よさや美しさを感じ取ったり、考えたりして、自分の見方や感じ方を深めている。	主体的に鏡の中に映る形や色から、よさや美しさを見付けたり、感じ取ったりしようとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
初めての題材に、楽しみながら、材料に触れていたAさん。  変化していく形や色を楽しみながらも、なかなか、これがいいという形や色が見付からない様子だったが、  友達の様子を見たり、試行錯誤を重ねたりする中で自分のお気に入りが見付かっていった様子であった。	○学習内容や安全事項などについて知る。 鏡に映る画用紙の形や色から、不思議な世界を見付けよう。 ☆材料用具に慣れ親しむため、鏡の特徴に気が付いたり、紙に触れたりする時間を保障する。 【個と材】 ○鏡に映った画用紙からイメージを広げて、配置したり、並べ替えたりしながら、よさや美しさを感じる。 ☆画用紙の並べ方や鏡の角度を変えるなど、感じたことを試そうとしている行為や言葉を価値付ける ○友達はどんなワンダーランドを見つけたか共有する。【個と個】【個と集団】 ☆互いに表していることのよさを受け止め合ったり、価値を見付けたりしている児童を価値付ける。	【自分のタイミングで撮影】 本題材は、作品化を目指すものではなく、鏡の中で、変わり続けていく形や色を捉え続ける鑑賞の活動である。撮影は授業の終わりではなく、変わっていく過程を撮影することとしたい。「作品」として捉えるのではなく、「変容」と捉える。 視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫 感じたことの言語化を無理には図らない。 本題材で大切にしたい心情の一つとして、「なんとなく、これがいい。」がある。感じたことを、「なぜだか分からないが…」とすぐには言語化できない場合もある。子どもが、「なんだか、いいな。」の「なんだか」から、感性を育てていきたい。

実践を振り返って

○材料で遊ぶ時間を保障したことで、その後も何度も試したり、友達と意見を交換しながら変容させたりと、活動を進めていく姿につながったのではないか。

2. 提言協議報告書

- ・当日は63名の参会を得て協議を行った。
- ・本提言協議では、視点①と視点②に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」を生み出す活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・遊ぶように学ぶ姿ですね。こういった子どもの姿に造形教育ならではの学びが見えますね。学校現場にいと、遊びは休み時間、学びは授業時間のように捉えられている様子も散見しますが、遊ぶように学ぶよう、教育活動を展開することが大事だと改めて感じました。 ・いろいろと試す活動をすることで、いろいろな発見をしていく様子が伝わってきました。「遊び」とは「試し」にも近い感覚なのかもしれませんね。 ・図工の学びは、子どもの遊びやその子の生活そのものと直結していることがあることを強く感じました。やっぱり図工、大事ですね。 ・大変おもしろく、興味深い題材だと思いました。様々な形の色画用紙を動かしながら並べるという活動は、何度も試したくなり、発展的に考えたいなと思いました。 ・遊んでいる最中も学びが子どもの中に存在しているがそれは無自覚である。学びとなるのは、そこに資質・能力に関わる目標が子どもの中に生まれたときなのだと感じました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品ではなく心が動いた瞬間という捉えであれば、何度も写真に収められていいですね！作品がゴールではないところも共感できました。 ・子どもたちが、試しながら現れる形や色に感動しながら取り組んでいる様子がよく分かります。動かしながら表現している子どもが見受けられるので、子ども同士が動画で見合えるといいなと思いました。 ・子どもの造形的な実験精神がよく発揮できるような題材の構成と先生の関わりがすてきですね。遊びの中から、造形的な視点を整理することも大事だと思いました。 ・児童の思考が連続しているだけでなく、再構成され続けていますね。場の設定によって、自然な鑑賞が起こることも非常に効果的だと感じます。遊ぶことを学ぶこと、学ぶことを遊ぶことと捉えておられるからこそその手だてだと感じました。 ・何度も試行錯誤している様子から、しっかりと思考されている様子が見られてよいと思います。タブレットを活用することで消えてしまう遊びも残せるところがよいと思います。

(2) 成果と課題

ア. 成果

本題材は、「遊び」から「学び」に行きつ戻りつする子どもの姿から、資質・能力の育みへとつながる学習の在り方を問うた試みであった。

子どもの手の動きや表情、または、これまでの学習履歴を鑑みながらの見取りから、抽出した児童を紹介した提案であったが、児童の変容について、多くの方々にご賛同頂けたことを考えると、「遊び」と「学び」という視点が、学校の学習という枠組の中で、位置付けていく可能性を示すことができたと考える。

イ. 課題

本題材の実施については、分散登校中に行なうこととなった。人数も半分であったり、関わり方を制限されたりと、本来のあるべき学級の姿ではなかった。本題材と、そこにある遊びと学びの題材化という視点が、汎用性を帯びるためには、十分な環境設定ではなかった。通常での学習環境の中で、改めて考える必要があるだろう。

(3) 今後の授業改善に向けて

題材と題材をつないでいくカリキュラムの構成

本題材は2時間の学習展開で実施した。この一つ前の題材は絵を描き、この後の題材は工作を行なった。例えば、この後の題材が工作ではなく、造形遊びであったなら、子どもの姿は、どのような有り様になっただろうか。子どもにとって、働いている資質・能力は同じではあるのだが、題材や扱う材料・用具によっては、先の題材での学びをより直感的に活かせることもあるだろう。資質・能力の育みは、一朝一夕にはいかず、長い線上にあることを思うと、長いスパンで題材配列を考えていく必要がある。子どもにとって、「今」、目の前の学びが、彼らの過去と未来の「間」にあり、つながっていることが、大切なのだと感じている。

今後もそのような学びを子どもとつくっていけるよう研究を続けていきたい。

1. 助言講評記録

研究発表(1) 鳥海先生

①: 先生の支援について

絵の実践だけでなく、五感を総動員した体験の中にも、先生方の陰にある支援というものを感じた。ファシリテーターとして子どもの活動をどうやったら促進できるのか考え支援し、コーディネーターとして活動を調整し、クリエイターとして題材や次の設定をつくりだしていく。この三つの役割が潤滑に行われて保育の質が高まっていく。

②: 「作品になる」ということについて

小学校低学年ぐらいまでの子どもは「作品にする」ではなく、「作品になる」という考え方をする。子どもたちは楽しかった「もの」ではなく、楽しかった「こと」を表したいと思う。これを大人の目線で考えてしまうと、支援のギャップが生まれてしまう。

③: 学習評価について

一人一人の子どもの思いの受け取りが評価だというように考え声を掛けると、子どもたちは自分が認められたと感じる。まずは子どもの思いを受け取り、大人の常識ではなく、子どもの世界の子どもの表現の仕方の支援を用意してあげることが大切である。もっと、子ども一人一人に合った表現の仕方があるっていいはずと考える。

研究発表(2) 三浦先生

①: 先生の勇気について

先生の「作品にする」という概念が強すぎると、子どもを見失ってしまう。今回の授業では、あえてまずはやってみて、どういう終わり方をしたらいいか子どもたちと考えた。授業で大事にされていたのは、「～しながら」。今回の学習指導要領では、題材のまとまりの中で子どもたちの資質能力が発揮されるという考え方をしている。今回の授業は、「やりながらいろんなことを発見し、発見したものを次の表現に生かしていく」という活動構成だった。資質能力を発揮していったプロセスの果てに結果として作品になっていると考えると、いろいろな表現を認めることができる。

②: 表現の幅について

表現に選択の幅があると、子どもは自分の思いを表すことができる。先生は表したいことを工夫して表すという技能に評価規準をもち、子どもの資質能力を認めていた。

③: 言語活動について

図画工作でも、言葉にすることは、相手に伝え理解し合うという点で大切である。今回の授業では、ICTを使って子どもが他者評価し、表現のよさや可能性を確認することができた。また、先生は子どもの題名にこだわりをもっていた。題名には、子どもが何を感じて何を表そうとしたのか、子どもの言葉で出てくるもの。先生は、題名を見て、その子の表現を理解することができる。

提言発表(1) 栗林先生

「音を形や色で表す」活動であれば、名前にならない楽器が出てきてもよかったのではないかと。先生の都合で合科すると、どちらの教科の目標も達成できないことがある。図工は、共通事項である形や色を通して造形活動を行っているかどうか、極めて大切。授業改善の方向性の一つとして、共通事項に基づいているかどうかを確認することが大切となる。

提言発表(2) 永縄先生

子どもたちの遊びの中から生まれる造形活動を教材化している。また、「遊び」から〈遊び〉へそのままつなげるのではなく、「間」をもって子ども同士をつなげ、材料を遠くに置いて動線を確認するなどを行うことで、学びになっている。評価規準がCの子に対し、先生が見守り、子ども同士の関わりの中から次の段階の指導をすることも含め、子どもにとって学びの場になっていると感じる。私たちが「～ならねばならない」と思っていることが、授業の目標と一致すると子どもを見失うのではないかと、という先生の指摘はその通りだと感じる。子どもの世界ではどうなのかを考え、子どもから学ぶべきであると考え。

分科会 B

研究発表

札幌市立柴西小学校

黒川 友理

札幌市立円山小学校

菊地 惟史

提言発表

千歳市立北陽小学校

若林 朗子

名古屋市立豊岡小学校

大須賀章人

助 言

北海道教育大学函館校


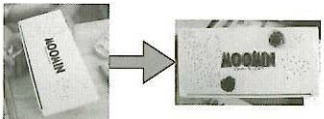
橋本 忠和

1. 研究発表概要		発表者
小5	「もっと！」が生まれる、「いい！」を育む 『差しこんだ光から』（立体に表す）	札幌市立栄西小学校 黒川 友理
穴を開けた箱に差し込む光の様子から、光と材料、光と形や色の組合せから表したいことを見つけて、工夫して立体に表す題材。		
視点①「もっと！」を生み出す教材化 【ミニチュアの自分】 ミニチュアの自分を入れることで、箱の中をのぞきたいという思いを生み、箱の中の世界を構成し、広げる手助けをする。		

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
箱に穴を開けて差し込む光を見ながら思い付いたことを表すときの感じ方や行為を通して、光と材料、光の強弱や色彩、箱の中の奥行やバランスなどについて理解し、表したいことに合わせて材料を組み合わせて工夫して表している。	光の差し込む自分のイメージをもちながら、光について感じたこと、想像したこと、見たことから表したいことを思い付いたり、光との組合せを考えながらどのように主題に表すか考えたりしている。	主体的に材料と関わり、差し込む光を見ながら、思い付いたことを立体に表す活動に、主体的に取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> 光＝「まぶしい。」 光と場所、材料の組合せで「月と太陽みたい！」 箱の中をのぞくと「真っ暗。」だったが、隙間からもれる光から「朝と夜の世界にしたい。」と考えた。  <p>箱の中の仕切りを活用して</p> <ul style="list-style-type: none"> 「光が当たったり当たらなかつたりする…」 →仕切りの向きや角度を調整 ・「光の量を変えたい。」 →光の穴の数を増やしたり、入ささを変えたりして、明暗のバランスを工夫。 	<p>第1次【光と場所のハーモニー】 光の「いいね！」を見付けよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 人工の光と身近材を使った造形遊び。 暗い場所での光の感じ方、認識を広げる。 光の強弱、濃淡、形や色、影に注目。 <p>第2次【差しこんだ光から】 箱の中をのぞいて、差し込む光から想像した世界をつくろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> 真っ暗な箱をのぞく。 ⇨光が一筋差し込んだ箱をのぞく。 「光が一筋差すだけで印象が変わる。」 「もっと光が欲しい。」 「もっと中を工夫したい。」 <p>第3次【のぞいてみると】 光を生かした世界にしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 何度ものぞいているうちに、「もっとこうしたい！」 自分の作品を見てほしくなってきた、友達の箱の中をのぞいてみたくなってきた。 「ここ見てほしい。」…カメラで撮影 「友達のここがいいね！」…グッド付箋 <p>光への認識の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> 「光だけでも楽しめる。」 「光は無敵でおもしろい。」 「光にはいろいろな当て方があった。」 「光には種類があって、形や色が違う。」 	<p>【ワークシートでの振り返り】 学習ごとに「のぞいてみて、一言！」を設定することで、積極的に箱の中をのぞくようにした。</p> <p>【すぐのぞける環境設定】 すぐのぞける大きな窓の近くに作品置き場や、材料置き場を作ることで、「のぞきたい。」「のぞいてほしい。」と意欲を高めるようにした。</p> <p>【友達からのグッド付箋】 友達のいい！を見つけたら、書いて箱に直接貼り付けた。発想した世界や色と光の組合せについて書くようにした。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>個別の言葉掛け 「どうなるの？」 「思い通りになった？」 漠然としていた「もっとこうしたい！」の気持ちを具体化するための声掛けをした。また、太陽の光でのぞいたり、友達の作品を見たりするよう促した。</p>

実践を振り返って

- 造形遊びでの体験が、多様で豊かな表現を生み「もっと！」を生むことができた。
- 「のぞく」に焦点を当てた活動をすることで、光について考え、認識を広げることができた。
- △子どもの造形的な言葉をもっと増やせる工夫や手だてがあるとよかった。

2. 研究協議報告書

- ・当日は88名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、視点②と視点③と視点④に重点を置いて協議を行った。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

<p>【視点②】 「もっと！」が連続する活動構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めは光を感覚でとらえていたのが、関わりの中で「もっと！」が生まれ、光の見方を広げ、造形活動につなげていく構成がよいと感じました。 ・「もっと！」が連続する活動構成の工夫について大変勉強になりました。 	<p>【視点③】 「もっと！」をつなげるための自他の要容を捉える振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちがたくさん活動できるための環境づくりがすばらしいと思いました！自然に子どもたち同士が関わる環境、自然に光と材料の関わりを確かめられる環境、なるほどと思いました。 ・ここからのぞかないと見えない、ということが、友達の作品を見てみたいという気持ちを更に高めているのだと思いました。
<p>【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉に表すことで、人間は経験とつなげて認識し、知識としていくので、図工・美術でも言語活動は重要と考えます。このスキルを高めるには、対話が重要であり、特に教師が気づき、価値付けして伝える言葉が有効なのだと考えます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「のぞく」という鑑賞活動と表現との活動の往還が造形的な見方・感じ方を働かせることにつながったすばらしい実践だと思えます。題材が資質・能力からとらえられていることが分かりました。

(2) 成果と課題

ア. 成果

【視点②】 について

- ・活動構成は、意欲を引き出すだけでなく、子どもの認識の広がりや深まりを促しやすい流れになっていた。
- ・第1次の造形遊びの体験から光の特徴を感じ取ったことで、光の見方を広げることができた。その光の明暗や色合いは、子どもが「のぞく」という視点をもつことで調整できるものであった。

【視点③】 について

- ・光が当たる場所に材料置き場や製作途中の作品を置くことで、自然に子ども同士が関わることもできた。光と材料との関わりを自然に確かめられる環境設定が「もっと！」を生んでいた。

【視点④】 について

- ・「もっと！」を生むために、太陽の光でのぞく、友達に楽しんでもらう、という新たな視点を与えたことが効果的だった。

イ. 課題

- ・造形的な言葉を増やす手だてを具体的にすること。
- ・箱以外の材料は提示するタイミングや方法について吟味する必要があった。

(3) 今後の授業改善に向けて

【今後、同題材を行うために】

- ・「もっと！」を生むために、箱の中に使う材料の種類、提示の工夫ができたと感じている。例えば、材料を子どもたちと一緒にカテゴリーしたり（光が透けるもの・透けないもの等）、担任が用意したものをを使うのではなく子どもたちの要望に近いものを一緒に探したりすることができる。
- ・評価規準における具体的な姿も必要だと考える。子どもの光についての認識がどの程度変容するかなど、子どもの姿で想定しておくことで活動構成もすっきりし、材料の選定にもつながると考える。

【これからの図画工作科において】

- ・造形的な言葉を増やしていくことについては、子どもと対話して言葉に表わすようにすること、それを繰り返して使っていくことで使いこなすことができるようになって感じている。また、これからも、漠然としていた「もっとこうしたい！」の気持ちを具体化するための声掛けを続け、子どもが見通しをもつことができるようにしていきたい。
- ・「光」を扱う題材に関わらず、他学年とのつながりを意識して活動構成を考えたり、材料を選定したりすることを大切にしていきたい。その上でどのような資質・能力を身に付けてきたのか、育てたいのかを考えていく必要がある。

1. 研究発表概要	発 表 者
小 3 「もっと！」が生まれる題材を目指して 『これにかいたら…?』（絵に表す）	札幌市立円山小学校 菊地 惟史

プラスチックのCDケースの「透明」「重なる」「変化」といった特徴を生かして、思い付いたことを絵に表す題材。

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【CDケース】「透明」「絵が重なる」「変化が生まれる」といった、魅力のある素材。

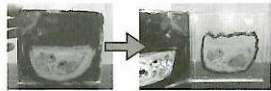

【たくさんのCDケース】思い通りにいかなかったり、新しく思い付いたりしたことを試すことができる。

【共用のコーナー】絵の具やドライヤーなどの共有物を使用する際に交流が生まれる。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
「透明」「重なり」「変化」等のCDケースの特徴から、それらを使った表現のおもしろさを分かっていると同時に、表したいことに合わせてCDケースの特徴の生かし方を工夫して絵に表している。	CDケースにかくことで、どんな表現ができるかを想像し、その特徴を生かして、表したいことを思い付いたり、どのように表すか考えたりしている。	活動を楽しみながら、CDケースの特徴を生かして、思い付いたことを絵に表す活動に、主体的に取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> 独立した2枚の絵の重なりで、紙芝居のように場面の変化を表す。「透明」をうまく生かしていない。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(1・2時間目) 「きんぎょがいえにきた！」</p>  </div> <ul style="list-style-type: none"> 上の絵に透明な部分を残して下の絵が見えるようにしている友達の表し方を見て、「いいこと思い付いた！」 上の絵をカレーのルーだけにすることで、下の絵のライスが見えて、「透明」を生かした表現に。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>(3時間目) 「カレーライス」</p>  </div> <ul style="list-style-type: none"> 「もっと！」を通して、CDケースの特徴を生かした表現に。 	<p>0時間目</p> <ul style="list-style-type: none"> 朝から、目につくところにCDケースを置いておくことで、「何をかこうかな。」という期待感を生む。 <p>1・2時間目</p> <p>【題材と出会い、思い付いたことを表してみよう！】</p> <ul style="list-style-type: none"> CDケースにかいたら、どんなことができるかな？ 「絵が重なる。」「透かせる。」「開いたり閉じたりできる。」「思い付いたことを絵に表してみよう！」「お花」「蝶が幼虫から成虫に。」「バナナの皮がむけるようにできないかな。」 <p>3時間目</p> <p>【前時の活動や友達の表現から、「もっと！」表してみよう】</p> <ul style="list-style-type: none"> 前の時間の友達の作品を見てみよう！ 今日は、どんなことをするのか？ 「思い付いた他のことを試してみたい。」「完成度を高めたいな。」「見た人にもっと伝わるようにしたいな。」 <p>4時間目</p> <p>【作品が一番合う場所で、写真を撮ろう！】</p> <ul style="list-style-type: none"> 作品にぴったりの場所を見つけて、写真を撮ろう！ 「虹をかいたから、背景に空を透かしてみたよ。」「雪だるまをかいたから、冬景色だったらよかったな。」「バナナの作品、かごに入れてみたらどうかな。」 	<p>【共用コーナーでの交流】</p> <p>自分の表現について話すことで、自他の表現のよさに気付くことができるようにした。</p> <p>【作品に合う場所での撮影】</p> <p>改めて自分の作品に浸ることで、おもしろさや美しさに気付くことができるようにした。また、グループでカメラを共有することで、友達の表現のよさにも目を向けることができるようにした。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>【個別の言葉掛け「どんな感じ?」「どうなったの?】</p> <p>かくことに没頭している子どもが、ケースを開いたり閉じたり、表現について話したりする姿から評価した。</p> <p>【表現のよさを言語化】</p> <p>子どもが自身の表現について話したことを、「この〇〇を生かしたんだね。」と、言語化することで、子どもの中で使える言葉となるようにした。</p>

実践を振り返って

- CDケースに材料としての魅力があり、教材化によって子どもの「もっと！」を生むことができた。
- △CDケースの特徴を生かした表現の仕方について、「知識」としての共有の仕方を工夫できるとよかった。
- ・教材化の仕方によっては、CDケースを低・高学年の題材や造形遊びの題材にも応用できる可能性がある。

2. 研究協議報告書

- ・当日は88名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、視点①と視点②と視点④に重点を置いて協議を行った。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】 「もっと！」を生み出す教材化

・透明だからこそのおもしろさがたくさん詰まった魅力的な題材だと思いました。ケースを閉じたり開いたりすることで、場面が展開したり、空間が広がったり、きっと子どもたちは表したいことがどんどん見付かって、夢中で取り組んでいたのだらうと思います。失敗しても、消してかき直せるというケースの特性や、いくつもの作品をつくれるように大量にケースを用意していたのが、自由に発想を広げるために効果的だったと感じます。つくり変えていく活動と、どこに飾ろうかと考える活動も合わせて、鑑賞の力もたくさん発揮される題材だと思いました。

【視点②】 「もっと！」が連続する活動構成

・透明な素材から想いが広がるすてきな題材だと感じました。最後写真を撮ることが分かっていれば全て塗りつぶすことがないのではないかと思います。透明な素材2枚を生かすこと、背景にあった絵をかくことは活動が変わりそうだと感じました。

【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫

・愛犬とのお散歩の絵をかいた子が、この題材で思いのままに表現を楽しんでいる様子を伝えていただき、この子にとってとても価値の高い授業だったとことが確認できました。うれしかったです。他にもこの題材で変容した子が大勢いたと思います。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・視点①について、本題材のねらい通り、子どもの「もっと！」を生み出す教材化となっていたという意見を多く頂戴した。
- ・所謂「上手さ」に囚われがちになってしまうという実態に対して、それ以上にわくわくし、抵抗なく取り組むことのできる素材であったことや、様々なことを試してみたいくなるような環境の構成であったことが、子どもたちの「もっと！」という姿につながった。

イ. 課題

- ・視点②についての改善点が明らかとなった。写真撮影の活動を、終末場面のまとめとして考え、表現活動が一段落した終盤に提案した。しかし、それを題材の序盤に伝えておくことによって、写真撮影も見越した表現になり、より「透明」を生かす表現が生まれていた可能性も考えられる。題材の序盤に伝えることで、子どもたちにとって考えることが多くなりすぎてしまうことを危惧したが、「まとめのためのまとめ」にするのではなく、まとめも「もっと！」を生む一要因と捉えられることが題材構成を設定する上で必要だったのではないかと考えられる。

(3) 今後の授業改善に向けて

- ・本題材では、CDケースの“透明・重なり・変化”という「題材の魅力」、友達との交流や何度も試すことができる「環境の構成」、ケースの特徴を生かすような「教師の関わり」によって、子どもたちの「もっと、よくしたい!」「もっと、ほかのことも表現したい!」といった「もっと！」を生むことができた。しかし、さらに「もっと！」があふれるために、下記のような授業改善の可能性が考えられる。

【視点①】 油性ペン等他の描画材やセロハン等他の素材を組み合わせて使うことができるようにする。

【視点②】 まとめや振り返りの、題材の中での効果的な位置付け。

【視点③】 図工の時間外にも交流ができるような環境や時間の設定

【視点④】 板書を活用した「知識」の共有
本研究の視点はいずれも、授業づくりの根幹となるものである。いずれの点が欠けても子どもたちが十分にその資質・能力を発揮することができない学習となる可能性がある。

子どもたちの実態から4つの視点について十分に考慮し、それらが有機的につながる題材・授業づくりを目指していきたい。

1. 提言発表概要	発表者
小2 「もっと！」を自ら追究しようとする題材構成の工夫 『たのしく うつして』(小2・絵に表す)	千歳市立北陽小学校 若林 朗子

画用紙をはさみやカッターで切り取ってつくった型紙の「陰」と「陽」を生かしたり、繰り返し使えるものを探したり、クレヨンの色や擦り方を工夫したりしながら絵に表す題材

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【題材配列の工夫】切り抜く活動のある題材を事前に実施しておくことで、道具のよさを実感しながら選んで使うことができる。

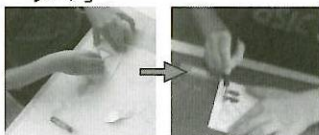

【国語とのつながり】児童全員が国語で読み深めた「スイミー」を表すことで、よりイメージを膨らませることができる。

【クレヨンでステンシル！】既習の画材を使った新しい技法を知ること、興味や意欲をもって取り組むことができる。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
つくった型紙を使ったクレヨンステンシルを擦る活動を通して、新しい技法でいろいろな形や色を表すことのよさに気付くとともに、手の感覚を働かせながらクレヨンの色を擦る加減を工夫し、表したいことを基に表している。	色や形を擦って感じたことやイメージしたこと、表したいことを見付け、表し方を選んでいる。自分たちの作品のよさやおもしろさについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げている。	カッター、クレヨンなどの道具の特長やよさを実感したり、その可能性を追究したりしながら、楽しく安全に活動に取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<p>・魚を表そうとするが、はさみではうまく魚の形に「切り抜く」ことができない。 「先生、はさみはしんどい！」 「カッターを使っちゃダメ？」</p>  <p>・クラゲを表すために、はじめは「クラゲの形」をクレヨンで縁取り外側に擦っていた。 「先生、足がもげちゃった！」 その後、外側の形を使い、内側に擦りはじめた。 「こっちの方が、クラゲらしい！」 「でも、にじいろにならない。」</p>  <p>・色が混ざらないように、ティッシュをこまめに取り替えながら擦り始めた。</p>	<p>1時間目 【題材と出会い、思い付いたことを表してみよう！】 ・画用紙をはさみで自由に切り抜いた型紙で、クレヨンステンシルをしよう。 「クレヨンで表したように見えないくらいきれい。」 「色を何色も使ってみたいな。」 「擦る方向を変えたら、違う感じになるよ。」 「紙を半分に折ってから切ると形だけを切り抜くことができるよ。」 「形を切り取った外側の形も使えそうだね。」 「星形を切るにはどうすればいいかなあ。」 「左右対称じゃない形を切りたけれど、(中側の形か外側の形の) どちらかが使えなくなるのはいやだな。」</p> <p>2・3時間目 【前時の活動を生かして、「もっと!」「スイミー」を表してみよう】 ・スイミーのどの場面を表したい? スイミーの挿絵も、型紙を使っていそがしかったよね。 ・カッターを使って型紙をつくっていいよ。 「にじいろのゼリーのようなクラゲを表したいな。」 「カッターを使えば、クラゲの足もうまく切れたよ。」 「せっかくカラフルにしたいのに、クレヨンの色が混ざって、汚くなっちゃったよ。ティッシュが原因? それとも擦る方向?」 「スイミーの赤い魚の兄弟たちを一気に表せて楽しい!」 「この型紙、1回しか使わないのはもったいないかも…」</p> <p>4時間目 【「2年1組作:スイミー」お話の順番に並べて貼ろう】 ・みんなの作品を並べて、スイミーの挿絵にしよう。 「〇〇さんは、教科書にはない場面を表しているね。」 「あれ、大きな魚になったときの向きが私と違う…。たくさん泳いでいると向きが変わることもあるから、まあいいか…」 「あまり人気のない場面もあるね。教科書の挿絵も必要だね。」</p>	<p>【試す活動の保障から】 テーマを設定せず、「技法(クレヨンステンシル)」「道具(はさみやカッター、クレヨン)」と自由に向き合う経験を十分に保障したことで、「できること」「できそうなこと」を取り出しながら、見通しをもって表そうとすることができるようにした。 【形や色を振り返りの視点に】 表したい形や色にするためにどのような工夫をしたのかを活動中もどんどん発表させたことで、友達が使った技法や表現に目を向け、自らの作品に取り入れようとすることができるようになった。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫 【イメージを具体化する言葉掛け「どんな場面を表したの?」「そこにはどんなものがあつたの?」】 表したい場面のイメージを言語化することで、何を表せば場面がより伝わるようになるか工夫したり、付け加えたりしようとする姿から評価した。 【技法を「〇〇作戦」で!】 いい「加減」でクレヨンステンシルを擦った活動を評価するため、どんな風に擦ったかを「たいよう作戦(内側から外側に向かってシュッシュッと擦る)」「ませませ作戦(何色も使って、擦りながら混色させる)」などと命名させ、それを取り上げ共通の言語にした。</p>

実践を振り返って

○最初にはさみを使わせて「表したいものが表しづらい」経験をさせたことで、児童は自ずとカッターを使った場合との比較をし、「表したいものを表すために(安全に)使いたい!」という必要感を高めることができた。カッターで誰一人ケガをすることなく、満足のいく作品を完成させられたこともよかった。

△昨今の事情から「共用」を避けたい意図もあり児童がそれぞれ所有している画材を使ったが、口ウ素材の「クレヨン」よりもオイル素材の「クレパス」を使った作品の方が発色はよかった。そのため活動のよさに見合った仕上がりにならなかった作品もあった。ただし、大人目線でのこと。児童は満足していた。

2. 提言協議報告書

- ・当日は88名の参会を得て協議を行った。
- ・本提言協議では、視点①と視点②に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・既習の技法を積み重ねることで、失敗も含めて素材や道具の使い方に慣れ親しみ、自信をもって、のびのびと表現する姿が見られました。知識や思考力を高めたことで、発想も広がっていったのだと考えます。 ・「同じ形を繰り返すことができる」という、版で表すよさを子どもたちが十分に感じることができたと思います。 ・初めから先生が全部の材料や道具を用意しない方が、子どもたちが体験を通して必要なものを考えたり「もっとやってみよう！」が生まれやすくなる授業になるのですね。 ・個人用クレヨンで色の出方に違いが出てしまったとありましたが、色が出なくて悩む子にはオイルタイプを渡したり、両方試させたりはしましたか？ ・絵の具のスタンピング版画として表現を結び付けた方がストレートな気も。「これは同じ形なんじゃないかな？」という子どものつぶやきに、「どうやったと思う？」という視点から、技法の視点も与えてもよかった気がします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語の物語を表現するための資料にすることで、表し方に絞って思考力を働かせることができたのではないかと思います。子どもたちに合わせた「調整」の大切さを感じられました。 ・子どもの「こうしたい！」が生まれる工夫をたくさんされていて、カッターの必要感をうまく生み出せていると思います。「版のよさ」を子どもたちが実感することが、今後の版の題材にもつながり、低学年のうちを知っておくことが大切だと感じました。 ・言葉からイメージを広げ表す力を付けたいのか？繰り返し使えるステンシルの特徴を生かす力を付けたいのか？2つを求めたために子どもの発想を制限していなかったのかと疑問をもちました。 ・話の中にない場面を自分で空想して表した子どもが印象的でした。スイミーの世界とステンシルが合っていると思います。「お話の挿し絵を表そう。」ではなく、投げ掛けの言葉を工夫すると、より、豊かな発想を引き出せそうな気がします。「お話を読んで空想を広げて表そう。」とか。

(2) 成果と課題

ア. 成果

教科書題材として取り上げられていない技法であったが、身近な材料を使い、低学年からでも版表現のよさを生かしながら表現しやすい技法であることから、更なる教材の可能性を感じることができた。

試す活動を十分に保障したことで、表したいと思うことを「自分ができる技法」を使いながら思い思いに表す児童の姿を見ていただくことができた。

イ. 課題

コロナ禍により、画材を共用せずにできる教材を開発する意図もあったが、児童の作品を実際に見ていただくと「クレヨン」と「クレパス」の発色の違いは顕著だった。表しやすい画材を学校で準備するなどして統一する必要があるのかもしれない。

(3) 今後の授業改善に向けて

図工専科ではなく、学級担任として全ての教科を指導しているからこそ実践できた題材だった。国語の時間に十分お話の世界のイメージを膨らませることができたからこそ、図工の時間ではその世界を「表現」することに特化させることができた。また、道具の扱いについても、カッターは生活科でも使う機会があることから、図工の時間だけが道具に慣れ親しむ場ではないと考える。

学年が上がっていくにつれ時数の問題も生じてくることから、児童に身に付けさせたい力を明確にした上で、今後も題材構成を合科的に検討していく必要があると考える。児童にとって図工が「思い」や「考え」、「学び」を形にする場となり、有効に機能させていくことができるよう、教育課程を俯瞰的に捉えていくことが大事である。

1. 提言発表概要	発表者
小6 表現と鑑賞を往還することで、つくりだす喜びを味わう造形活動 「叫び」～今のわたし～（小6・絵に表す）	名古屋市立豊岡小学校 大須賀章人

自分の「叫び」を体で表現した写真を切り抜き、背景をかくことで、形や色、構成、筆使いなどの表したい心情に対する働きや効果を関連付けながら絵に表す題材




視点①「もっと！」を生み出す教材化

【ムンクの「叫び」から発想】子どもに親しみのある作品であり、興味・関心をもちやすい。
 【表現主義的な表現】再現性を重視するのではなく、造形的な要素で気持ちを表す題材なので、意欲的に取り組みやすい。
 【自分の写真を置く】作品の中に自分が入り込んで考えるプロセスにすることで、複数の視点から見つてくることができる。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 自分の感覚や行為を通して、思いが伝わる形や色などの造形的な特徴を理解している。 既習の描画材や用具などについての経験や技能を総合的に生かし、思いに合わせて、表し方を工夫している。 	<ul style="list-style-type: none"> 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもちながら、「叫び」を鑑賞して感じたことや、自分の思いから表したいことを見付け、形や色、構成、筆使いなどの表したい心情に対する働きや効果を考えながら、どのように主題を表すのかを考えている。 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもちながら、自分たちの作品から造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めている。 	<ul style="list-style-type: none"> つくりだす喜びを味わい、主体的に「わたしの『叫び』」を表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<p>《ぎゃー！頭がないやつが来たー！！》 ←後ろに描かれている人物の形（頭がないように見える）と、背景の空の塗り方、色（ぐにやぐにや感と色から恐怖を感じた）から考えた。</p>  <p>《きゃーおおお奥に熊だー逃げろー》 ←人物の恐ろしいものを見るような目、背景の暗い緑がマッチして、怖さを表現できた。</p>  <p>「この写真いい感じ。でも、もっと体を反ったほうが、思いに合うな。」</p> <p>《こんなえぐい量 暗記できないよー》 ←絶望感を出すために暗い色を背景にした。さらに、背景一面に各教科の学習内容を書くことで絶望するほど膨大な量であることを表した。</p> 	<p>1時間目 【あそ美コミュニケーション「名画で一言」で楽しく見方や感じ方を深めよう】 ・ムンクの「叫び」の中心にいる人物がどんなせりふを叫んでいるのか、形や色を根拠に考えてみましょう。 ☆大喜利的な楽しい活動に「もっと！」が生まれた。 【ちょ美っとチャレンジで、思いと形や色との結び付きについて考えよう】 ・「叫び」の中心に描かれた人物を取り出し、背景の色を変えていくことで、自分の思いに合う色を選びましょう。 ☆「もっと！」と試行する中で思いと形や色との結び付きを理解できた。</p> <p>2時間目 【自分の「叫び」をポーズで表そう】 ・自分の叫びたいせりふを体で表現して、友達と写真を撮り合おう。 ☆撮った写真をその場で友達と鑑賞し、再度写真を撮って表現し、また鑑賞する、表現と鑑賞を往還させ、「もっと！」と主体的に活動していた。</p> <p>3～4時間目 【思いが伝わるように表現しよう】 ・あそ美コミュニケーションでの鑑賞や、ちょ美っとチャレンジでの試行で感じたことを思い出して表現しよう。</p> <p>5時間目 【あそ美コミュニケーション「かるたで鑑賞」で見方や感じ方を深めよう】 ・みんなの作品をはがきサイズのオリジナルアートカードにしました。今日はこれを使ってかるたをしながら友達の作品をじっくり見ましょう。 ☆「もっと！」伝えたい、「もっと！」知りたいたい、主体的に見方や感じ方を深めていく姿が見られた。</p>	<p>【あそ美コミュニケーション】 鑑賞にゲーム要素を取り入れた。ゲームの中で自分なりの見方や感じ方で感じ取ったことを、形や色などの造形的な特徴に着目して説明したり、他者と対話する根拠にしたりすることで、対象を捉える造形的な視点について確かな理解をすることができるようになった。 【ちょ美っとチャレンジ】 試行を容易に繰り返すことができるタブレットのよさを生かして、感じ取ったよさを、すぐに本題材に生かすのではなく、まずは表現として試す場を設けることで、見方や感じ方をより確かなものにできるようにした。また、タブレットを活用して効果的に他者の見方や感じ方に触れることで、自分の見方や感じ方を深めることができたようにした。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫 【鑑賞時の視点】 「叫び」の鑑賞や、互いの作品を鑑賞する際、その絵に込められた寓意を正しく読み取ることよりも、一人一人が自分の手がかりで語ることを、それをみんなで認め合うことを重視した。</p>

実践を振り返って

○題材の活動の中に「あそ美コミュニケーション」や「ちょ美っとチャレンジ」を取り入れることで、見方や感じ方の深まりを促進することができた。そして、見方や感じ方の深まりは、表現と鑑賞の往還を充実させ、子どもの「もっと！」を生み出した。
 △「あそ美コミュニケーション」では、楽しむことを優先し、表面的な鑑賞に終始してしまう子どももいた。

2. 提言協議報告書

- ・当日は88名の参会を得て協議を行った。
- ・本提言協議では、視点①と視点②に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・恐らくほとんどの子どもたちにとって、人生という長い目でみれば、表現者であるよりも、鑑賞する側である時間の方が長いのだと思います。鑑賞しながら表現…という流れで作品に向かう経験は、色や形に対して自分なりの意味をもちながら鑑賞するという力を育てるとも大切なものだと感じました。 ・タブレットと鑑賞を関連付けて、名画を「自分らしく鑑賞する」という視点を遊びを通じながら与えていることがすてきだと思いました。名画の鑑賞を子どもたちの発達段階に応じた自由な表現へと転換していく仕掛けが上手い題材だと思います。その後の絵画表現の展開の広がりも、前段階の「表現と鑑賞の往還」体験が生きているように思います。 ・名画から入りタブレットも扱いながらつくりだす喜びを味わえる5時間の題材設定は、6年生に適していたように思います。子どもたちの楽しそうな雰囲気伝わってきました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム自体が目的とならず、後の表現活動の高まりを目的としている点がすばらしいと思います。前段で鑑賞があることで表現における形・色・イメージの高まりにつながったであろうし、表現場面においても鑑賞の力の深まりも発揮されていたのではないかと思います。 ・鑑賞を生かして表現、というのはよく見られますが、更に作品を使った鑑賞カードをつくって交流するということにびっくりしました。友達の作品を詳しく見る手だてにつながっていました。 ・導入の鑑賞活動があるから、表現の過程でも個々の子どもなりの鑑賞場面が生かされたのだと思います。子どもにとっての「問い」をどのようにもたせるのか、どのような問いを想定するのかが授業者として大切なことなのだと思います。

(2) 成果と課題

<p>ア. 成果</p> <p>ムンクの「叫び」の鑑賞を通して、形や色の与える効果について理解し、それを生かして表現する姿、つまり表現と鑑賞を往還している姿が多く見られた。また、タブレット端末を活用して試行し、それを基に対話をしたことにより、見方や感じ方を深めたり、表現に生かしたりする姿が多く見られた。</p>
<p>イ. 課題</p> <p>ゲーム要素をもたせた鑑賞においては、達成する楽しみを優先し、表面的な鑑賞に終始してしまう子どもも見られた。また、ICTを活用した鑑賞コミュニケーションについては、試行を終えてから発表し、感想をもらうという本実践の流れでは、そこで得た気づきを生かして、更に試行することが十分にできなかった。</p>

(3) 今後の授業改善に向けて

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが題材を通した問いをもつことができるような活動を設定する。活動の中で、常にその問いに立ち返り、自身や他者の表現を鑑賞することで、対象を捉える造形的な視点についてより深く理解し、その後の表現に生かすことができるようにするとよい。 ・個人で試行してから他者とコミュニケーションするという流れではなく、試行と鑑賞コミュニケーションが同時に行われるような流れを設定する。そうすることで、表現と鑑賞の往還が単発で終わらず、繰り返され、見方や感じ方を深めることができるようにしていくとよい。
--

1. 助言講評記録

研究発表(1) 黒川先生

○本実践にたどり着くまで、各学年の発達段階が考慮された取組がなされている。

2年生→光の向こうの景色を取り込む。4年生→アイヌの文様を窓に貼り、後ろの自然とリンクさせる。
5年生（本実践）→閉じられた空間。一定方向の光。光をコントロールすることにおもしろみのある教材。
コントロールできる光だからこそ発想することが「もっと！」と子どもの意欲と思いを引き出せるので、その発想を認め、励まし、引き出すようにしたい。

○今回はクラウドでの発表なので、先生の視点がより一層際立つ、発表となっている。

プレゼンの中で紹介された子の様子からは、先生がどの視点で見たかがよく読み取れた。例えば、映像では、先生も子どもと共に作品でつくった「かげ」を見ており、その眼差しの共有がよい作品を生み出していた。

○振り返る視点を躓きと共に止まって考える余裕とスペースをコロナ禍においてもつくりだせている。

研究発表(2) 菊地先生

○机の上に重ねていたり、作品を積んでいたりしていたのがおもしろい。学級の全体で並べたら、鑑賞の視点も広がる可能性がある。

○振り返りが形だけの「なんちゃってリフレクション」にならないように、子どもの感情とか望みが、自分の造形活動への説明の言葉に入ってくるようにするとよい。

○かく前から「これがかこう」「こんな世界をつくろう！」もよいが、絵の具を指に付けて、垂らしてみた、その偶然の形状から発想してもよい。

○CDのケースの造形には、例えば「何を入れたい？何が入っているの？成長の記録かな？」等のCDの中身への子どもの「望み」や「感情」を引き出す、テーマ設定があるとよい。

○乾かす時間に留意してかき足したり、絵の具の「かすれ」を生かしているのがおもしろい。

○開くと、リンゴの中身が透けて見えるようにしている子どもの発想がすばらしい。

子どもたちは、絵の具の特性を生かしており、そこから次の考え方や見方、やりたいことを見付けていた。

○「開く」「重ねる」「透ける」素材の特性を生かすことで子どもの「想い」を引き出せる題材である。

提言発表(1) 若林先生

○2年生が全員、縦にカッターナイフを引いており、カッターを使う知識・技能がしっかり指導できていた。
→テーマがよいので技能に対して身に付けたいという必要感が生まれ、スキルの習得につながっていた。

○多様な、違う素材の紙だったら、どのような表現の広がりになったのか、それも試すとおもしろい。
バックの彩色は、コンテは水で溶かすと透明水彩絵の具になるので、背景にすることができる。

○子どもたちの作品から、「もっと、こうしたい！」という表現活動への意欲がよく出ていた。

提言発表(2) 大須賀先生

○大地の芸術祭での作品では、有名作品（「最後の晚餐」、「叫び」など）の構図を真似て、写真を撮るものがあつた。その作品に通じるように本実践でも「叫び」を参照に、感情や気持ちを色の組合せで描画を子どもに考えさせていたのがすばらしかった。色に加えて、構図から作品を考えさせてはどうか。例えば、校内で、「叫び」が撮影できる場所を探して、撮影してはどうだろう。すなわち、「色の組合せ+構図」で、どのような実践ができるか、本実践の発展系の取組としてやってみてほしい。

コルトハーヘン
「永山モデル」

行動
思考
感情
望み

分科会 C

研究発表

札幌市立あいの里東中学校

久蔵美和子

札幌市立新陵中学校

市川 雅基

提言発表

函館市立巴中学校

櫻井 純

市原市立千種中学校

大和田具志

助 言

札幌市教育委員会


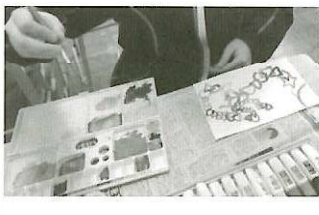
森岡 香子

1. 研究発表概要		発 表 者
中 学	「もっと！」があふれる 感じる=考える=表す 造形活動 『音の絵』音楽を聴いて・特別支援学級の取組	札幌市立あいの里東中学校 久蔵美和子
「音楽」という目に見えないものを表現することで、自分らしい感性で表現する力を付ける題材。		
視点①「もっと！」を生み出す教材化 【材料・用具や場所の選択】「きらめきカード」きらめく表現を生み出す。 【表現の方法の選択】水彩画の技法から選ぶ・形や線を工夫する。		

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
【知】 ・水彩画の技法を理解している。 ・音を形や色彩として捉える造形的な視点について理解している。 【技】 ・自分の表現にあったものを選び工夫している。 ・自分なりに捉えた音の形や色彩の自分なりの表現方法を追求し、創造的に表している。	【発】 音楽を基に自分のイメージを形や色彩、線に置き換えたことを基に主題を生み出し、全体と部分との関係を考え創造的な構成を工夫し、心豊かに表現をする構想を練っている。 【鑑】 自分や友達の表現の造形的なよさや美しさを感じ取り表現の意図と工夫について考え、見方や感じ方を広げている。	【態表】 音を形や色彩に表す創造活動の喜びを味わい学習活動に取り組もうとしている。 【態鑑】 造形的なよさやおもしろさ、美しさを感じ取り、自分の見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
 <p>曲を聴いて、音や楽器を表したい。水彩画の技法や線や形を「もっと！」試したいな…。</p>  <p>Aさんの描いた形を参考にして、「もっと！」自分の思い描く形を描きたい。</p>	1時間目 「音を表現する 波の音・風の音」 ・音楽と絵画のつながりを考えながら、風や波の音を聴いて音を形や色彩に表す楽しさを味わうようにする。 2・3時間目【発・鑑】「曲を聴いて表現する」 ・クラシックの曲（曲名不詳、エリックカールの「うたがみえるよ きこえるよ」より）を鑑賞し、自分なりの形や色彩を探る。 ・「きらめきカード」（様々な形や大きさの画用紙）を準備する。 ・点描、グラデーション、にじみ、ドライブラシなどの様々な表現方法を伝えることで自分に合った表現方法を考えるようにする。 4時間目【知・技】 「表したいことに向かって表現する」 ・表したいことのイメージをもったり、広げたりしながら、自分らしい「音の絵」の表し方を楽しみながら工夫する。 5時間目【知・技】【態表・態鑑】 「自分の『音の絵』を完成させる」 【発・鑑】「完成した絵の鑑賞」 ・自分が表現したいことに合わせて、形や色彩の組み合わせを考えコラボする。 ・自分や友達の表現を見合い、それぞれの表現のよさや楽しさを味わう。	『鑑賞の工夫』 【自分自身の振り返り】 ・「どうしてこうしたの？」という教師の問い掛けで、生徒が言語化することにより、自分自身の振り返りをする。 【自他の振り返り】 ・波と風の表現をした作品から技法に注目し一部分をトリミングした。ポイントも分かりやすく表示し、授業中いつでも見ることができるようにした。 ・授業中に他の班の作品を見合う時間（1分程度）を設けた。 ・ホワイトボードに「きらめきカード」を貼り、いつでも鑑賞できるようにした。

実践を振り返って

- 水彩画の技法を確認し、自分の表現にあったものを選び、工夫することができた。自他の振り返りを通して、「もっとこうしたい」という思いが強くなる生徒が多かった。
- △友達の表現のよさや美しさを感じ取り言語化する時間が少なかった。

2. 研究協議報告書

- ・当日は77名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、全ての視点について協議を行った。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級は学年や発達の段階が多種多様。それぞれが生きていく授業の組立てがしっかりと考えられ素晴らしい実践だと感じた。また、子どもたちがそれぞれ影響し合うことで、この授業の中での育ちが見られた。 ・きらめきカードがすてきだった。ネーミングのわくわく感もあり、型にはまらない発想の広がりがあった。 ・曲から感じたことを基にしていることで、子どもたちが、やってみたい表現につながっていると感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・きらめきカードについて、アイデアスケッチなどをそれ自体掲示したり、作品にしたりするという発想はなかった。気軽に制作に取り組み、生徒の発想が広がっていく様子が伝わってきた。 ・音から広がるイメージを様々な技法を使って表現しようとする姿と、友達の作品のよさを自分の作品に生かそうとする姿が見られるすてきな授業だった。（視点①と関連）
【視点③】「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り	【視点④】「もっと！」を高めるための学習評価の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・アウトプットとインプットの過程をバランスよく指導され自他の変容の振り返りにつながられていることがとても参考となった。 ・きらめきカードを用いて意欲を引き出す方法がよいと思った。発達段階を踏まえた上での教育課程として取り組まれているところが素晴らしいと感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが安心感をもって制作・発表・交流ができるように、表現や感想の意図などについて、子どもから引き出す言葉掛けを行っていた。 ・鑑賞タイムを1時間に3回程度とすることで、お互いの制作の経過を理解しながら相互評価を行い、より自らの発想を広げることができていた。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・視点②について、きらめきカードは、アイデアを描き留めるだけでなく、子どもの「もっと！」を引き出し、作品となって形に表現出来るのが良かった。絵による表現が苦手な生徒も、スモールステップでアプローチすることは、生徒の自信の積み重ねにつながるよい取組だった。
- ・視点②・④について、教える事を明確に設定し、それが表現に生きている、それをフィードバックすることで自信を付ける、という流れが出来ていた。

イ. 課題

- ・視点①について、今回の題材は、教師が様々な情景が思い浮かぶものを設定したが、子どもがどう感じるか、題材のねらいは何なのかという曲選びを行うことが必要。
- ・視点①・②について、今回は既習のコラージュを取り入れていたが、「必ず〇〇しなければ。」とならないように、技法や手法の示し方については注意が必要。

(3) 今後の授業改善に向けて

- ・制作途中で自分のタイミングで表現と鑑賞の活動を行き来できることは、子どもたちの新たな発見につながる。主体的に学習活動を進める点からも効果があり、今後も継続する。
- ・視点③・④における、活動途中での言葉掛け（評価と指導）については、他の題材でも取り入れていくことで、子どもたちの「もっと！」を、更に高めることにつなげていきたい。
- ・視点②について、今回であればコラージュの扱いについて、その子のよさを生かすために必要な手法なのかを精選・整理し、場合によっては自分の表現に必要なかどうか、子どもたちが選択できるようにする。
- ・きらめきカード自体が表現であり、少しの時間だけでも交流の場を設け、対話場面の充実を図る方法も考えられる。

1. 研究発表概要	発表者
中 1 絵に表現する活動を通して自分の生き方を考える授業の研究 『〇〇を表す私の手』	札幌市立新陵中学校 市川 雅基

透明水彩を使って自分の手を絵に表現する活動を通して、中学校の3年間の自分を生き方や目標について考え、自分なりの主題を生み出し、心豊かに表現する題材。

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【ビジョン・目的】 3年間の目標と自分の生き方について考え、主題を生み出し創造的に表現する授業展開の工夫。

【基礎となる資質・能力】 スケッチについての基礎的技能、作品の見方や感じ方考え方を学ぶ教材化の工夫。

【道具の工夫】 透明水彩を使用し図工から美術への抵抗感を少なくするとともに、自らの技術の向上を実感することができる工夫。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
<p>【知】 形や色彩などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを基に、全体のバランスや構造、造形的な特徴などを全体のイメージで捉えることを理解している。</p> <p>【技】 水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。</p>	<p>【発】 自分の手を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、自分自身の生き方などについて想像したことなどを基に主題を生み出し、画面全体と手や詩との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。</p> <p>【鑑】 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。</p>	<p>【態表】 美術の表現活動の喜びを味わい楽しく手の特徴や自分自身の生き方など想像したことを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする表現の学習活動に取り組もうとしている。</p> <p>【態鑑】 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどの見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<p>【態表】 3年間の中学校生活を想像しながら自分自身の生き方について考え主題を生み出そうとする。</p> <p>【態表】 主題を基に画面全体と手との関係を考え、構成を工夫し構想を練る。</p> <p>【態表】 楽しく表現活動に取り組み、主題をよりよく表そうとする。</p> <p>【鑑表】 作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなど見方や感じ方を広げ、鑑賞の活動に取り組もうとする。</p>	<p>1時間目【知・鑑】 「手が伝える心のイメージを感じ合おう」 ・手を表現した著名な作品の鑑賞を通して作者の意図や表現の工夫について見方を広げる。</p> <p>2・3時間目【発・鑑】 「なりたい自分を想像しよう」</p> <p>【学習課題】 「中学校3年間でありたい自分の姿とはどのような姿だろうか」(相互交流+自己内対話)</p> <p>・3年間の自分の夢や目標について思いを巡らせ自分なりの主題を生み出し構想を練る。</p> <p>4・5時間目【知・技】 「かたちを捉えよう」「透明水彩で表現しよう」 ・スケッチでの表現の方法や透明水彩の技法など基礎的・基本的な内容について学び、自分の意図に合わせて工夫して表現活動に生かす。</p> <p>6時間目【知・技】「思いを詩に込めて」 ・作品に込めた思いを詩に込めて表現する。 ・筆ペンの特徴を生かし工夫して表現する。</p> <p>7時間目【鑑・態鑑】 「作品を見つめてみよう」「活動を振り返ろう」 ・相互鑑賞 意図や工夫など見方や感じ方を広げる。 ・自己評価 造形的な視点をもとに自己の変容を感じ取る。</p>	<p>【相互鑑賞】 ・作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして見方や感じ方を広げている。 ・造形的な視点をもとに作品を鑑賞し表現のよさや工夫などについて考えるなど見方や感じ方を広げている。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>【一瞬をとらえる】 ・夢や目標を達成した時の場面や心情について想像を広げ一瞬の手の動きを考える。</p> <p>【構図の工夫】 ・自分の生き方や伝えたい瞬間が伝わるようにポーズや構図の演出を想像力豊かに考える。</p> <p>【表現技法の工夫】 ・道具の特徴を生かしながら工夫して表現する。</p>

実践を振り返って

○作品制作を通して、中学校3年間における自分自身の生き方や目標について考えることができた。

△主題決定の場面で意見交流を入れたことで自分にとって表現したい場面を主題として決定するのではなく作品を見る側（他者）にとって分かりやすい内容を優先的に選び主題とした可能性があり、再考の余地がある。

2. 研究協議報告書

- ・当日は77名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、全ての視点について協議を行った。

(1) 研究協議記録 (参会者コメントより一部抜粋)

【視点①】 「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】 「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・「なりたい自分」というテーマについて、手の具体的なイメージを考えることを通して、主題を生み出しやすい題材だと思います。また、作品を絵で表す他、詩で作品のイメージを表すことで造形活動と言語活動が一体となった授業だと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の手をよく見つめ、そこから表現を考えるなど、人生につながるところが子どもたちにとってよい時間になると感じました。 ・重色やぼかしなど基本となる技法をしっかりと理解させた上で多様な表現につなげており、よく考えられた指導計画だと思います。
【視点③】 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り	【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・1年生の最初に、主題を生み出すことを主眼に置いた題材ですが、テーマを生み出すということにハードルの高さを感じる生徒もいたかと思えます。実際に行った手だてや、声掛け、仕掛けなどあれば教えてください。また、この時期に主題を設定する題材を設ける意図・ねらいがあれば教えてください。 ⇒1年生は新たな生活への期待をもって入学してくる。その時に将来なりたい自分の姿をイメージし、実現のために自分自身を見つめ直しながら、表現を進めることに価値があると考え。子どもたちが楽しみながら「もっと！」をつなげられるように、相互間賞時には、作者の意図を想像しながら作品のポーズを全身で表現し、お互いの感想を交流するなど、意欲を高める工夫をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネガティブな未来を描こうとする生徒はいましたか。その場合、どのような声掛けなどをしましたか。 ⇒制作の過程で他者との交流場面をつくり、生徒が自分を客観的に見つめられるよう工夫している。 ・どうしても浮かばないという生徒はいなかったでしょうか。またこの作品の評価方法について教えてください。 ⇒導入段階で著名な作家の手の作品をいくつか鑑賞し、作者の表現意図について考える時間をもつことで、「表現」と「作者の思い」のイメージがつながるようにした。評価については、授業で学んだ基本的な表現技法を、主題を表現するために効果的に工夫して活用できたかを規準としている。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・視点①については、美術科においても、セルフプロデュースが求められる中で、このように入学まもなく卒業後の姿を想像する設定は、将来への期待感が膨らむとともに、周りへの宣言ともなるので、自己紹介も含んでいて、大変有意義な取組になった。手の表現と関連付けたことに、この題材の意義があると考え。
- ・視点②については、スモールステップを大切にすることで「もっと！」の意識ができていた。試行錯誤が可能な表現も抵抗感を抑える効果があった。

イ. 課題

- ・視点①については、なりたい自分は中学3年間の具体的な姿なのか、将来も含めた自分像を表現していくのか、教材のねらいによって検討が必要。
- ・視点②については、スケッチの指導や、その他の表現技法について再考の余地がある。

(3) 今後の授業改善に向けて

【視点①】 について

- ・自分の目標として「手ではなくて足のほうが表現しやすい。」と考えた生徒は、手以外のパーツも可能など、生徒の思いに寄り添う。
- ・1年生で中学校生活に希望に胸膨らませる題材を行うため、卒業までの間に、今回の題材を踏まえた中学校生活の思い出などの題材も考えられる。

【視点②】 について

- ・水彩画が苦手な生徒など、技法に抵抗感がある生徒が安心して試行できる活動構成や学習環境の改善を図る。
- ・絵や彫刻の題材における相互鑑賞は、主題を生み出す中で、より作者の思いや考えを明確にするための意見交流になるように配慮する必要がある。

1. 提言発表概要	発表者
中 3	函館市立巴中学校 櫻井 純

身近に感じる美術を目指して 「漫画の主人公になろう～点描による自画像～」

漫画の一コマに自分の写真をコラージュしたものを原画とし、漫画特有の表現方法や、イラストと写真の表現の違いを感じながら、点描による自画像を制作する題材。

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【漫画の利用】身近な文化である漫画を利用して、生徒の関心を高める。


【原画で写真を使用】形が取りやすく、苦手意識の強い生徒でも無理なくリアルな表現ができる。

【点描による表現】点のみで表現するため、どんな生徒でも取り組みやすい。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
漫画特有の表現方法を理解するとともに、点描の特性を生かして自分の内面を効果的に表している。	自分の内面やイメージをもとに、漫画の構図や表情の効果を考え、作品制作の構想を練ったり、見方や感じ方を深めたりしている。	自分と向き合い、自画像で表すことに関心をもち、意欲的に取り組んでいる。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> 「普段なら恥ずかしいけど、漫画の登場人物になりきってるだけだから！」 	<p>1時間目「点描による自画像って？」</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分と向き合うことの意義 今後の見通しについて <p>2時間目「漫画の主人公になろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が選んできた漫画の主人公になりきって写真撮影 表情、アングルの工夫 <p>3時間目「点描による明暗表現」</p> <ul style="list-style-type: none"> 点の密度と明暗の関係性 点描 <p>4時間目～「イラストと写真の違いは？」</p> <ul style="list-style-type: none"> リアルな表現にするには、どんなことを意識すればよいか。 イラストと写真の違いを出すために、点の打ち方をどのように工夫するか。 <p>8時間目「自分ってどんな人？」</p> <ul style="list-style-type: none"> 作品制作を通して、自分と向き合ってみて感じたことやわかったこと。 級友との交流から、表現の意図や自分との違いに気付くか。 	<p>【級友との交流】</p> <p>お互いの作品を鑑賞し合うことで、自分の作品を振り返ることができるようにした。</p> <p>【ワークシートの活用】</p> <p>気が付いたことや分かったことを、今後にどのようにつなげていくのかを振り返ることで、常にねらいを意識させるようにした。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>【級友からの評価】</p> <p>級友との交流から、自分のよさを再認識し、自己肯定感を高めるようにした。</p> <p>【自分との対話】</p> <p>自画像の制作を通して、自分と向き合い、今の状況や自分の気持ちを整理するように意識させた。</p>

実践を振り返って

- 苦手な生徒でも取り組みやすい題材であり、仕上がりに達成感や満足感を感じている生徒が多かった。
- △似ている、似ていないといった再現性だけにこだわることのないように、注意する必要がある。
- ・他教科や進路とつなげていくことで、より考え方を深められるか。

2. 提言協議報告書

- ・当日は77名の参会を得て協議を行った。
- ・本提言協議では、主に視点①と視点③に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化

- ・透明なシートの下に原画を敷いて点描することで、子どもにとってずいぶんハードルが下がるように感じました。また、タブレットの導入により、写真の管理や原画との組み合わせがより容易になると思います。
- ・「表したい自分」が自画像の主題かと思えますが、実際に制作している場面では、生徒はどのように主題を追求していましたか。
⇒漫画を選ぶ段階で、それぞれが主題を設定していたが、制作しているうちに、「背景を変えたい。」「効果線を変えたい。」「セリフを変えたい。」など、より表現したい自分に近づくよう、工夫していた。
- ・どんな自分を選ぶ生徒が多いですか。今の自分か、自分の意外性か、これからの自分か。ベースに元になる漫画があるので、共感できるものを選ぶのかなとも思いますが、午前中も自分でテーマや主題を選ぶことの苦労についての話がありましたが、そういった場面もありましたか。
⇒理想の自分を選ぶ生徒が多いように思った。写真撮影後に変更を申し出る生徒もいて、「本来こうありたい」自分を選んでいたように思う。
- ・漫画の要素の一つとして、現実ではありえない表現（空を飛んだりなど）ができる点があります。そういった視点について触れながら、相互鑑賞をすることで、より深まると感じた。

【視点③】「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り

- ・制作の意味や価値は、個々の生徒で違った意味をもってくるすばらしい実践だと感じました。学びの前と後でどんな生徒がどのように変化したのか、教えていただけると嬉しいです。
⇒「表現したい」という意欲が高まったように見える。毎時間、交流する時間を設定したが、表現の工夫を貪欲に吸収し、自分の制作に生かしていた。また、普段見せない姿を表現している生徒は、間接的に自己開示したことが、授業以外の場面にもつながっていったように思う。

(2) 成果と課題

ア. 成果

自画像制作を通して、進路について本格的になっていく中、これからの自分と向き合い、自分のことを前向きに考えるきっかけになった生徒も多かった。また、「自分でもリアルな表現ができた！」と達成感を感じる生徒が多く、それが自己肯定感を高めたり、3年間学んできたことに対する自信へと、つながっていったりしたように感じる。

イ. 課題

技術面で納得のいく作品をつくるだけでなく、表したい自分や自分の気持ちを効果的に伝える工夫がされているのか、ということを常に意識させるようにしていかなければならないと感じた。また、毎時間の授業内容が単調になりやすいため、授業展開に工夫が必要であった。

(3) 今後の授業改善に向けて

今回は、生活の中の美術に気が付く3年間の取組を発表し、中でも3年生が取り組んだ漫画を利用した自画像についての発表を行った。身近な漫画を利用することや、表現方法で点描を用いることで、取り組みやすい題材であると思ったが、「中学3年生の題材としては内容が幼い」との指摘もいただき、今後、主題の追究や授業展開などを改善していかなければならないと感じた。





中学3年間で学びを生活に結び付け、自分の生活を豊かにするための工夫が出来るようになることが大切であるため、まずは苦手意識をもたせないことや、自己肯定感を高める教科として、今後も努力していきたい。

1. 提言発表概要	発表者
中 1	市原市立千種中学校 大和田具志
<p align="center">[私たち生活を豊かにさせる造形活動] ~観る人を〇〇な気持ちにさせる作品制作『色は怖くない』~ (中1・絵や彫刻など)</p>	
<p>色の原理の基本を学びながら、観る人の心情に働きかけるような色彩構成を、柔軟な発想で行う。</p>	
<p>視点①「もっと！」を生み出す教材化 【色の三属性・色料の三原色について学ぶ】全ての絵の具が「色」ではないということを知り、混色などの楽しさに気付くようにする。 【汚く見える色はあっても、汚い色はない】色と色との比較で、見え方感じ方が変わることを発見するようにする。 【自由なタッチ、濃淡等で気持ちを表し、観る人の心情に働きかける】例えばただの汚れとと思っていた色料の表情などが、見る人へのメッセージへと変化することを発見し、楽しみながら色彩構成をしようすることを旨とする。 【地域との交流】自分の生活圏にいる人たちへ作品を発表し、交流を通じて自己有用感や地域との親和性を高めようとする事ができる。また、一連の制作活動が、我々の生活を豊かに彩ることについて関心をもつようにする。</p>	

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
色料の混色の法則性とポスターカラーの基本的な使い方を理解し、自分の意図に応じて濃さやタッチなどを柔軟に工夫して活用している。	各々の色から感じた自分のイメージを大切にし、重ね方や組み合わせを独自に考え、作品のテーマをまとめ、観る人の心情に働きかけようとしている。	色の変化に関心をもち、素直な視点から色材の表情と向き合っている。また、現れた表情からテーマを見付けようとし、観る人に向けて作品を発表しようとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> 色料の三原色と混色の基本を理解し、彩色できた。 制作に移ると、白い紙を前にフリーズ… そして慎重にタッチを重ね始めた。すると…   <p>【「もっとないですか?」】</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な用具を試してみたい、自分のイメージをもっと確かに等々、様々な「もっと！」が連鎖して完成へ。 作品を地域の治療院・デイケア施設で展示。感想を受け取ると、次は違う作品を「もっとつくりたい!」という意欲が芽生えた。  	<p>1時間目【色の基本と仕組みについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の目の前で混色の実例を見せる <p>「もっと知りたい!」</p> <p>2~3時間目【混色と彩色の基本】</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学校での経験を前向きに振り返りながら、丁寧な制作を心掛けよう。 <p>「もっとできるかも!」</p> <ul style="list-style-type: none"> 色から感じ取る様々な「イメージ」を膨らませてみよう(まずは「味」から)。 色の組み合わせで、同じ色でも「イメージ」は変わる。濃さやぬり方にも工夫をすることで「イメージ」が変わるだろうか? <p>「もっと試したい!」</p> <p>4~6時間目</p> <p>【色は怖くないことを知り、いろいろな色の使い方にチャレンジし、「観る人の気持ちを〇〇にさせる作品」制作しよう】</p> <ul style="list-style-type: none"> 汚く見える色はあっても汚い色はない。 暖かく感じる色、ひんやりと感じる色…色のイメージは組合せ方も含め無限。 <p>「もっと描きたい・もっと工夫したい!」</p> <p>観る人の心へ「もっと働きかけたい!」</p> <p>7時間目【鑑賞】「地域の中の作品たち」</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の診療所、デイケア施設に展示された作品と、観てくださった方々の感想に触れ、自分たちにできたこととは何かについて振り返る。 <p>「もっとつくりたい!」 「もっと関わりたい!」 「もっと必要とされたい!」</p>	<p>【まずは「味」を色で表す】</p> <p>例えば同じ「苦い」でも、微妙な違いが表れ、多様性の大切さを知るきっかけとなるよう設定した。</p> <p>【観る人の気持ちを〇〇にさせる色彩ってどんなもの?】</p> <p>自分の感情の表現という視点ではなく、色彩のイメージから自身のテーマをもち、「観る人の心情」に働きかけるという題材設定によって、自分の考えをもって他者と関わろうとする意欲を高められるよう内容を設定した。また、生活を豊かに彩ることの楽しさについて考えるきっかけとなるよう心掛け、感想の交換を通じて、自己有用感や、地域の一員としての帰属意識を高められるよう心掛けた。</p> <p>視点④</p> <p>【「もっと！」を高めるための学習評価の工夫】</p> <p>【楽しみながら色(色彩)を扱い、テーマをもって表現する】</p> <ul style="list-style-type: none"> 混色の基本を理解し、それを土台に柔軟な発想でテーマに基づき色彩構成をすることができた。 <p>【地域との交流から得た感想も含めた制作活動の言語化】</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様な感性の違いやよさを大切に、制作を通じた様々な交流活動から「その人」らしさを大切にできた。

実践を振り返って

- 混色の法則性や、題材設定の内容等から、生徒の様々な「もっと！」を生むことができた。
- △具象的イメージが先行する生徒もあり、発達段階をより考慮し、柔軟な題材設定の工夫ができるようになった。
- ・「私たちの生活を豊かにさせる」というテーマは、市内中学校美術部会共通のテーマの一つとなっており、今回の実践については、題材の動機付け等再検討すべきところはあるが、今後の市内各校の実践の一つのきっかけになったのではないかと考える。

2. 提言協議報告書

- ・当日は77名の参会を得て協議を行った。
- ・本提言協議では、主に視点①と視点②について協議を行った。後、視点③についても協議が広がった。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく試行錯誤し伸び伸びと表現できている生徒の作品、その制作に取り組んでいる生徒の姿は本当にすばらしいですね。地域に広げ、社会との関わりを意識できるすばらしい授業だと思います。 ・鑑賞者を意識することで、より自分の表したいものがはっきりとし、「もっと表したい！」となるのだと感じました。 ・色に関してよく研究されて、先入観がなくなる授業だと思いました。「見る人の心情」をテーマに、どのように作品を見てもらいたいかを具体的に考え、主題を生成することができていました。 ・人が本来的にもっている感性を引き出すすてきな題材だと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域と関わり、感想をもらえるのも生徒の自己肯定感や情操が育ちますね。中学校に通いながらアーティストになれるなんて、美術が好きになる授業だなと思いました。 ・授業の振り返りを通して、子どもの「もっと！」を引き出し、つくりたいという意欲をもたせることができていたと思います。 ・絵の具の扱いの苦手意識を拭うことにとどまらず、感性を働かせ創意工夫し続けること、表現に必然性をもたせること、表現が誰かの心を動かすことに実感をもたせることなど、一つの題材が様々な学びにつながっていると思いました。
【視点③】「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り	
<ul style="list-style-type: none"> ・作品を通して心を育てる美術教育は今、本当に大切にしていけるべき実践だと思っています。子どもたちが他者を理解し思いに寄り添う言葉に心を打たれました。 ・子どもの「思い」、それを鑑賞する人たちの「思い」を大切にしたいすてきな題材でした。 ・美術教育の重要性を発信できる素晴らしい活動だと思います。自己表現だけでなく、自分の作品が誰かの力や支えになっていることが制作意欲になっていき、実感できたのではないかと思います。「もっと！」が大きく広がった活動だと感じました。 	

(2) 成果と課題

ア. 成果
<p>「観る人」の心情や「地域」へ働きかける作品制作によって、生徒たちの素直な創作意欲を高め、自己有用感や情操を育むことができた。</p> <p>色彩に対する苦手意識を軽減し、生徒一人一人が自ら設定した目標に向けて楽しみながら学習を重ねることができた。</p>
イ. 課題
<p>具象的な着想が安心するという生徒の意見もあり、より丁寧に発達段階に応じた題材の設定や、支援・指導の工夫の必要性があった。</p> <p>展示協力先をどのように増やしていくか、今後も地域からの理解を得て、信頼関係をより高めていくことが求められている。</p>

(3) 今後の授業改善に向けて

<p>「～観る人を〇〇な気持ちにさせる作品制作～」というテーマで、これからも多様な題材を設定できるように、更に工夫を重ねたい。</p>
<p>生徒の自己有用感を高められるよう、これからも地域との連携を継続し発展させていきたい。</p>
<p>市内での校務支援システムを活用し、生徒たちの作品を相互に鑑賞できるよう、環境を整えたい。</p>
<p>私たちの生活を豊かにする美術活動というテーマについても、今後も継続して市内で協議を重ね、題材の設定等工夫を行いたい。</p>

1. 助言講評記録

研究発表(1) 久蔵先生

- ・「きらめきカード」は、それ自体が表現でもあり、自分の表現を振り返るのに欠かせないツールにもなっていた。ネーミングがとてもよい。
- ・他の生徒の制作途中の作品が常に目に入る環境作りもよい。表現と鑑賞の活動を行き来できるのは、理想的な活動の形である。
- ・生徒の様子を一人一人見取って、評価や声かけを授業の中で小まめに行っていたことが、視点③の「もっと！」をつなげるための関わりになっていた。
- ・視点③に関わる他者との対話的な振り返りの活動の位置付けについては適切だった。短時間での交流会も効果的だった。振り返りは制作途中に行った方が、続きの制作に生かせる。きらめきカードが非常にすてきだったので、短時間でもきらめきカードを使った交流の場を設け、対話の場面が充実させてもよい。

研究発表(2) 市川先生

- ・1時間目の作品鑑賞は、自分でポーズをとって、どのようなポーズからどのようなイメージが伝わるのかを実際に確かめることは大事なプロセスだった。導入の時間で生徒の意欲が高まり、発想が膨らんだ。
- ・主題を生み出すことを強く意識して、子どもたちが生み出した主題を追究して表現することをとても大事にした実践だった。
- ・この題材には、様々な要素が含まれており、1年生にはボリュームのある題材。扱う要素を題材の中で減らすなどして、ねらいとするとところにじっくり時間を使えるようにするのもよい。
- ・本実践は、今大会の研究主題にもなっている「この子が 感じる＝考える＝表す 造形活動」というのが、活動構成の中にしっかりと息づいていた。美術を通して自分と向き合ってほしいという、市川先生の熱い思いが伝わるすばらしい実践であった。

提言発表(1) 櫻井先生

- ・技能面について不安を抱えている生徒が多い場合には、必要な技能が身に付くように指導することと、多くの生徒が興味・関心を抱くような身近な題材の設定の両方のバランスが大切である。
- ・今回の点描作品については、出来上がった作品を手に満足そうに嬉しそうな表情で浮かべている生徒の様子が目に浮かんだ。札幌市においても「分かる・できる・楽しい授業」ということを大事にしており、「楽しい」ということは、何者にも変えがたい授業の大切な要素である。
- ・3年生における題材としては、創造性が発揮される幅が少ないため、取り組む学年については検討の余地がある。それぞれの学校の生徒の実態に応じて年間計画も考えてほしい。

提言発表(2) 大和田先生

- ・この実践のすてきなところは、地域との交流である。違う世代の方々の言葉による自分の作品の振り返りはとても新鮮であった。同じクラスの友達からの感想も大事だが、それとは違う多様な気付きをもたらすものであった。美術が生活を豊かにする、人の心を豊かにするということを味わえるよい題材であった。
- ・造形的な見方・考え方を働かせ生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力や、心豊かな生活を想像していく態度を育むことを重視している実践だった。
- ・前段の色の学習についての取組やポスターカラーを使った技能を定着させることの扱いについては様々な議論がある。知識・技能は教え込むのではなく、体験をもとに様々な学習活動を通して理解していく、身に付いていくのが理想である。

分科会 D

研究発表

札幌市立真駒内中学校 伊藤 彩乃
市立札幌平岸高等学校 千葉 有造

提言発表

北海道教育大学附属釧路義務教育学校後期課程
更科 結希
松川町立松川中学校 水野 恭子

助 言

北海道教育大学釧路校 佐々木 宰

1. 研究発表概要	発表者
中 1 形や色彩のイメージを膨らませる彫刻題材の研究 ～抽象表現によるイメージの広がりから「もっと！」を引き出す～ 『未来に向かう自分～抽象的に表現しよう～』	札幌市立真駒内中学校 伊藤 彩乃

抽象表現に親しみ、形や色彩そのものがもつイメージを豊かに膨らませながら自己の心情を主体的に表現する。

視点①「もっと！」を生み出す教材化

【扱いやすい素材】 水彩絵の具や紙粘土といった既習を生かせる素材を用いる。

【新たな知識】 抽象表現に出会いその面白さを味わうことで形や色彩に主体的に関わろうとする態度を引き出す。

【生活との関わり】 自己の内面から主題を生み出したり他者の作品のよさを味わったりする中で、日常生活と美術の関わりを構築し3年間の学習につなげられるようにする。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
<p>【知】 抽象表現を理解し、形や色彩がもつイメージによる表現のおもしろさを理解している。</p> <p>【技】 主題に合わせて、粘土の特徴を生かしたり道具の使い方を工夫したりして、彫刻に表している。</p>	<p>【発】 自己の内面を見つめて主題を生み出し、形や色彩のイメージを膨らませながら、表し方を考えている。</p> <p>【鑑】 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫について想像力豊かに感じ取り、見方や感じ方を広げている。</p>	<p>【態表】 美術と自分の生活との関係を考え、形や色彩のイメージを膨らませることに表現活動の喜びを感じて、楽しく学習活動に取り組もうとしている。</p> <p>【態鑑】 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫について感じ取る活動に、楽しく取り組もうとしている。</p>

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<p>○抽象表現を理解しおもしろさを見つけて取り組む様子 「もっとやってみよう！」</p> <p>○自己の内面に向き合い彫刻表現に向けて気持ちを高める様子 「この気持ちを表現してみたい。」 「こんな形はどうだろう。」</p> <p>○粘土での造形を楽しみながら、主題の表現に迫ろうとする様子 「おもしろい表現を思い付いた！」 「イメージした形、色彩に近づきたい。」</p> <p>○自分と他者の作品のよさを味わい、造形活動の喜びを感じる様子 「イメージがこんなふうになった。」 「この表現おもしろい！」</p>	<p>1・2時間目【知・技】 「抽象表現を理解しよう・抽象的に表現しよう」 ・水彩絵の具の抽象絵画に挑戦し、想像したことを形や色彩のイメージにつなげられるようにする。</p> <p>3時間目【発・鑑】 「表したいことをイメージしてみよう」 ・「未来に向かう自分」を共通のテーマとして、自分が頑張っていることやその時の気持ちを思い起こしながら主題を生み出し、造形的なイメージにつなげて構想を練る。</p> <p>4・5時間目【技・鑑】 「イメージに合わせて形や色彩を工夫しよう」 ・粘土の感触に親しみながら素材の特徴をつかみ工夫して表現する。 ・新たに湧き上がってくるイメージを人切にしながら主題の表現に生かす。</p> <p>6・7時間目【鑑・態鑑】 「制作のまとめ～作品のよさを見付け味わおう～」 ・自分の制作過程や作品のよさをまとめる。 ・他者の作品のよさを味わったり、意図を想像したりして鑑賞する。</p>	<p>【鑑賞の交流】 ・鑑賞の発表場面では“作者はどう考えたか”と“他者からどう見えたか”を互いに交流できるようにする。発言を引用しながら教師が「表したいことと作品の表現の工夫の関連」に評価を加え新たな視点を獲得できるように働きかける。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>【つくる⇄振り返る】 ・作品の形が見えてきた段階で「自分のイメージにぴったりかな。」と問い掛け、更に一歩深まった表現を促す。</p> <p>【作品完成後の振り返り】 ・作品カードに自分の制作過程や作品のよさをまとめ、学びを自己認識する。</p>

実践を振り返って

○抽象表現のおもしろさを味わい、形や色彩そのもののイメージに意味をもたせながら、主題の表現に主体的に取り組む姿があった。

△主題の表現に留まらず、作品の美しさやよさを考えながら活動できる生徒が増えるような働きかけを考えたい。

2. 研究協議報告書

- ・当日は50名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、全ての視点について協議を行った。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】 「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】 「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・1年生の中学校生活へわくわく感がある時期に、さらに未来へ期待を感じるようなすてきな題材です。 ・小学校から中学校への接続において、とても貴重な授業実践でした。 ・まだまだ生徒の中には「美術」＝「上手に絵を描く」という印象があるので、1年生の初期段階でこのような授業を行うのは、とても有意義だと思いました。 ・小中の校種間でのつながりのある授業づくりや生徒のイメージを抽象表現へつなげていくプロセスが勉強になりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・即興的な表現を平面・立体と、連続で行う活動を1年生で行うのはとても楽しいと思います。発想を広げたり色々な表現を試行したりするきっかけとなって効果的でした。 ・イメージを膨らませるためにドローイングから入り、抽象立体にいったのは生徒にとって自然で取り組みやすかったと思います。 ・抽象表現を理解させる取組が参考になりました。クラスでテーマを決めて平面で表現するという部分が、これだけでも抽象作品の制作になると思いました。また、テーマの設定も抽象を考えるために適切だと思いました。
【視点③】 「もっと！」をつなげるための振り返り	【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りの場面では、これで自身のイメージにぴったりなのか、見つめ直すことができるような工夫がされていました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞のワークシートに三つの視点を作り、異なる視点に考えるよう工夫されていました。 ・「ICTを活用した他者との対話」、「鑑賞活動による自己の振り返りと他者の見方からの新たな気づきや再発見」など勉強になるところがたくさんありました。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・常に自分の感性を頼りにしながら表現に迫ったり、自他の作品のよさを味わったりする姿が見られた。また、自他の作品の造形的な美しさに着目する活動を取り入れることで、美術表現としてのよさを、より深く感じ取れるようになった。
- ・中学校1年生の初めに、この題材に取り組み、「形や色によって様々な印象を与えることができる」ということを発見したことで、次の題材でも、自分のイメージを先行させて表現する姿が見られた。

イ. 課題

- ・主題の表現に終始したため、自分なりの形というよりは、(初めに全体交流で出されたような)単純な色彩と形の工夫に留まってしまう生徒もいた。そういった生徒たちが、「自分なりの形や色を追っていくおもしろさ」に気付いていくことができるような手だてが必要であった。

(3) 今後の授業改善に向けて

- ・小学校で身に付けたことを生かしながら活動することができる教材を、今後も研究していくことが大切である。小学校での体験を生かしつつ、「表現行為」そのものや、「素材との出会い」「素材とのふれあい」を楽しむことができる内容を考えていきたい。
- ・抽象表現における、形や色彩の見方・考え方が次の題材につながり、更に自分自身の生活の豊かさにもつながっていくように、小学校6年間と中学校3年間の見通しをもちながら授業づくりに取り組んでいきたい。
- ・ワークシートの内容は常に検討し、生徒の思考に合ったものにしていく必要がある。また、理解・表現することが難しい生徒に対し、教師が「主題に関する問い掛け」をすることも、場面によっては必要である。生徒たちが次に向かっていくことができるような声掛けをしていきたい。

1. 研究発表概要		発表者
高 2	「クリエイティブマネジメント・表現と言語化」 普通科デザインアートコース専門科目・「素描」の授業実践から	市立札幌平岸高等学校 千葉 有造
<p>通年で静物モチーフを中心にデッサンに取り組み、専門的な技法の理解に留まらない表現を模索する。見たものをそのまま描くだけでなく、自分自身の目標・課題を設定しながら連続性のある制作を目指す。</p>		
<p>視点①「もっと！」を生み出す教材化 鉛筆各種、木炭やチャコールペンシル、マーメイド紙など初めて使用する画材を豊富に用意。モチーフ描写題材で、それぞれの子が独自に工夫できる題材であることを意識した。</p>		

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
<p>【知】 素描に適した表現材料の特性を理解している。</p> <p>【技】 対象を深く観察したことを基に、表現を工夫して的確に表している。</p>	<p>【発】 対象のイメージや空間を把握し、創造的な表現の構想を練っている。</p> <p>【鑑】 作品の主題や表現の意図、形体や色彩、材料感などの描き方の工夫や表現材料の活用を考察し、見方や感じ方を深めている。</p>	<p>【態表】 主体的に対象を見つめ、考察を深めたり、表現材料などを研究し、取り入れたりしようとしている。</p> <p>【態鑑】 スケッチのもつ記録性や伝達性等、生活や社会との関わりについて理解し、鑑賞の活動に取り組もうとしている。</p>

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> 前半は複数の生徒の学習概況と、振り返りシートのバリエーションを中心に、対象授業全体の中での変化を考察する。 Aさん・Bさんの実際の制作を通年の作品と振り返りシートを辿りながら紹介する。 技術的な成長も顕著であるが、今回はそれぞれの振り返りシートを中心に、造形用語の習熟と分析能力の伸長にスポットを当てていく。 表現と言語化が密接に関係しながら課題解決を模索する姿、対象を深く観察するという行為の美術的な価値や自身の美術制作、高校生特有の進路意識との関係性にも注目したい。 	<p>【課題1】 「ボックスティッシュ・スプレー」 B4画用紙 鉛筆 * 構図、遠近法</p> <p>【課題2】 「ワインボトル・テニスボール」 A3画用紙 鉛筆 * 明暗（陰影・投影）モチーフの構造</p> <p>【課題3】 「両腕・ロープ」 B3画用紙 鉛筆 * 構成力、空間表現、骨格の理解</p> <p>【課題4】 「石膏像（アリアス模写）」 木炭紙 木炭 * 木炭の描画特性、諧調</p> <p>【課題5】 「自画像」 木大画マーメイド紙（グレー） 鉛筆・黒チャコ・白チャコ * 自画像に込める精神性、用具の工夫</p>	<p>【振り返りシート】 ①感想シート ②グループミーティング ③付箋による相互評価 ④作品コピーへの相互添削 ⑤レーダーチャート自己分析 ⑥他者評価を参考に自己評価より専門的な造形用語を学習し、作品への理解と分析を進めていくことで自身の課題と目標を明らかにしていく。 漠然とした「よい・悪い」ではなく、自分自身で制作をマネジメントできるよう課題設定の成長を期待する。</p> <p>視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫</p> <p>【一人一人への声掛け】 初期段階では技術的アドバイスを中心に声掛けを行い、徐々に個別の課題意識喚起を目的にした問い掛けを心掛ける。</p>

実践を振り返って

- 具体的な「できた・できなかった」を専門的な用語を使用して理解することで、次の作品への課題と目標が明確になった。
- △技巧主体の指導を避けているため、通年での習熟差を埋めていくのが難しい。
- ・デッサン力の向上が美術作品制作の質を高めていくという関連性を、カリキュラム全体の中で感じられるよう配慮することが不可欠。

2. 研究協議報告書

- ・当日は50名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、視点①について協議した後、視点③及び視点④についても協議が広がった。

(1) 研究協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】 「もっと！」を生み出す教材化	【視点④】 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・高校の学習指導要領上でデッサンは、どのように位置付けられているのでしょうか。 ・中学3年生で自画像を授業で行う際、自画像を描くことに強い拒絶感を示す生徒が一定数いるので、生徒たちが「もっと！」を追求できるよう、課題意識、目標をもてるような工夫をしていきたいと感じました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・千葉先生は生徒に対して生徒目線で、寄り添う形で授業中頻りに声を掛けていました。 ・「全員が一年間でステップアップできていることを感じさせてあげたい。」という千葉先生の言葉に日々の授業の取組が感じられ、感動しました。
【視点③】 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り	
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の振り返り文がすごく成長していていますね。授業中生徒に対して、具体的にどのように教えたり、声を掛けていらっしゃるのでしょうか。 ・認識することで表現があり、その表現から新たな認識が生まれ、また新たな表現につながる。その具現化のためには言語化が効果的であるということ学びました。 ・ワークシートで具体的にモチーフのポイント・工夫点・習得できたことは何かを振り返りシートとは別に記述させることでより詳しく自身の状況把握ができるので取り入れていきたいです。 ・素描における制作の自己分析を言語化し、自分自身の課題と目標を明らかにしていくことでしたが、素描だけに限定されるだけでなく、絵画、デザイン、彫刻などでも作品の質が高まっていくと感じました。また、鑑賞の授業でも、作品理解の質が高まっていくのではないかと思います。 	

(2) 成果と課題

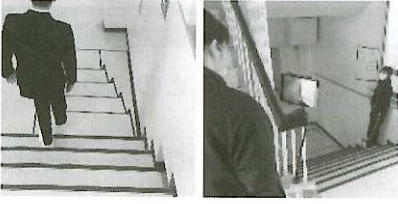

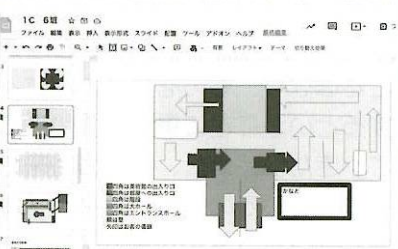

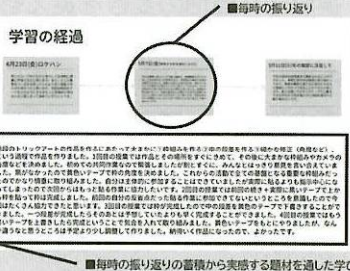

ア. 成果
<ul style="list-style-type: none"> ・視点③「自他の変容を捉える振り返り」のポイントは「自己評価・自己分析」と「自己変容の自覚」の二つが挙げられる。 ・高校生にとっても自らの表現を客観視することや発信すること、他者を理解することや、共有すること、これらの能力の育成に語彙力の充実が欠かせないことを再確認することができた。また、自己評価ができるということは、次のスタートラインが見え、自分自身で目標を持つことでクリエイティブマネジメントの質を高める足掛かりとなるということが分かった。
イ. 課題
<ul style="list-style-type: none"> ・自発性・自主性を優先しているため、課題毎の技術的習熟度の差を埋める指導が難しいと感じる。

(3) 今後の授業改善に向けて

<ul style="list-style-type: none"> ・（普通科ではあるが大半が美術系大学の受験を希望する、専門的な美術の学習をするコースだが）その題材が苦手な子、好きではない子が置いていかれるような授業ではいけない。全員が少なくとも自分の中でステップアップしていることを、一年間を通して感じられるような題材設定をこれからもしていきたい。デッサンは高校の学習指導要領の中で素描という科目として位置付けられているが、デッサンの能力が上がっていくことが、「上手く描くことができること」ということではなく、ものを自分の目でよく見る、理解するというところに重点を置いてこれからも育てていきたい。また、生徒の将来の事を考えると社会人としてのセルフマネジメント、更にその先にはソーシャルマネジメントへの参画にもつながるかもしれない。一人でも多くの生徒が教育環境下での美的経験を新たな社会に還元できるよう指導したい。
--

1. 提言発表概要	提言者
中学校 「協働的な学び」がもたらす「わたしの更新」を目指した授業のあり方について	北海道教育大学附属釧路 義務教育学校後期課程 更科 結希
協働的な学びによって表現できる活動を取り入れるために工夫してきたことや複数名で取り組む活動において「振り返り」が新たな気づきや自他のよさを見つめるきっかけになった事例を紹介する。	
視点②「もっと！」が連続する活動構成 視点③「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り	

活動構成

事例①	視 点	事例②
<p>中3「Visual Illusion2021」</p>  <p>場所の選定 テーマ 錯覚の種類 見る人の視点に立ち表現 TLでの記録 人×校舎×仕掛け 撮影 毎時の振り返り 題材を通した振り返り</p> <p>●「もっと！」が連続する活動構成</p>  <p>●グループで使用した共有スライド（テーマ決め）</p>  <p>●グループで使用した共有スライド（展示室内構想）</p>	<p>②「もっと！」が連続する活動構成</p> <p>①生徒の実態を把握し、題材を通した学習課題を設定する。 ②「協働」での学びが必要となる学習の内容とする。（分担ではなく、様々なアイデアを持ち寄り練り上げていけるもの） ③互いの意見を共有できる場面や方法（ICTの活用）を用意する。</p> <p>③「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り</p> <p>①本時の学習内容や学級で共有した学習事項を踏まえ、振り返りを行う。（②-③との運動） ②前時の振り返りを見直し、本時の活動が行えるようにする。 ③毎時の振り返りを連続して見直し、題材を通した学びについて考える時間を確保する。（題材を通した自己の変容を自覚する時間）</p>	<p>中1「フチュウブル美術館」</p>  <p>海外研修 Google Arts&Culture 学習課題～コントラストの視点～ 鑑賞 作品の選定 展示テーマの立案 展示室内の計画と配色 組み立て 題材を通した振り返り 毎時の振り返り計画の蓄積</p> <p>●「もっと！」が連続する活動構成</p>  <p>●毎時の振り返りと題材を通しての振り返り</p> 

実践から見出したこと

- 学習課題の解決のために、グループの中でテーマを設定し、計画立案を経験させ、表現につなげていくことによって、「もっと！」が連続する題材になっていくこと。
- △協働における表現活動における、表現の追求にどのような教師の関わりが最適か探る必要がある。
- ・実践してきた題材に、ICTを取り入れることにより効率よく共有や協働が図られるため、様々な事例で挑戦していきたいと考える。

2. 提言協議報告書

- ・当日は50名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究協議では、視点②と視点③に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点②】 「もっと！」が連続する活動構成	【視点③】 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
<ul style="list-style-type: none"> ・3人1グループ、みんな役割がはっきりさせることで、活動構成がスムーズにつながったと感じました。校舎全体を使ったイリュージョンに、ぜひ挑戦してみたいと思います。 ・個人に自由度をもたせていたことで、それぞれの「もっと！」が生まれていたと思います。 ・スモールステップを活用した授業構成で、子どもたちの自由度を保障し統制的ではない、やわらかな配慮が行き届いていたと感じました。 ・これからGoogleスライドを活用してみたいと考えていますが、どこまでをこちらで準備して、どこからを生徒たちに委ねるかが悩ましいと感じました。 ・この他、(1)教師の事前準備について、(2)テーマを構想する際になかなか案が決められない生徒、考えるのが難しいと感じる生徒への働きかけについて、(3)美術館の取り組みをどの程度リアルさを求めるかなどについて協議した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTによるログの取り方は、とても参考になりました。タイムラプスの活用はよいと思います。 ⇒一定の間隔で撮影した何枚もの静止画を連続で表示する撮影方法。低速度撮影や微速度撮影と呼ばれる。グループ活動の学習の経過を蓄積していくためには効果的であると考え、事例で紹介した授業で展開した。 ・制作過程や思考の蓄積方法など、参考にさせていただきたいと思います。 ⇒教師側が生徒の変容を即時的または、長期的なスパンで見取るためには、ICTの活用は不可欠となる。これまでのワークシート形式のよさもあるが、最も重要なのは、生徒が学習を経ていく中での内面に起こる変容であると考えるのであれば、積極的な活用が求められるであろう。 ・ICT活用した具体的な取組が参考になった。その際、生徒の活動を保障するためのさじ加減が難しいと感じました。

(2) 成果と課題

ア. 成果

「協働」での学びが必要となる学習の内容とする（分担ではなく、様々なアイデアを持ち寄り練り上げていけるもの）。また、そうした活動を円滑にするためにICTを活用することの有用性があるのではないかとのご意見を頂いた。

毎時の振り返りを連続して見直し、題材を通した学びについて考える時間を確保する。（題材を通した自己の変容を自覚する時間）

イ. 課題

視点③について、毎時間の振り返りの蓄積を行い、変容を見取ることが重要であると考え。学習経過を蓄積していく方法や、経過を見取るための視点の在り方については、今後検討が必要である。単なる振り返りではなく、視点に沿った蓄積を行うことで、学習経過とリンクした学びについて明らかにすることができるのではないかと考える。

(3) 今後の授業改善に向けて

本提言では、2つの事例を基に視点②・③に関わる内容で行った。授業改善のためには、下記のような視点が考えられる。

【視点②】

- ・「もっと！」を生み出すためには、学習課題の内容を精査していくことで、発想や構想でつまづく生徒は少なくなっていく。そのために、生徒の実態を適切に判断し、生徒の内面をくすぐるような内容での学習を展開していく必要がある。

【視点③】

- ・振り返りの視点を明確にし、生徒が自信の学習の経過を振り返った上での学びについてまとめていく時間が重要であること。
- ・短時間で振り返りを行うために、ICTを効果的に活用していくこと。（方法についてはいくつか考えられるため、検証していく必要はある）

1. 提言発表概要		発表者
中 3	自分のあらわしたい思いを明確にしなが、友と伝え合う中で、表現力を伸ばす指導のあり方 「私のかたち・いろ 広がれ！」	長野県 松川町立松川中学校 水野 恭子

今の自分の心の中を見つめ、なりたい未来の自分を思いながら生み出した主題を基に、彫り方を工夫したり、凹部と凸部の配色や全体のバランスなどを考えたりしながらローラーなどで着色して、一枚の板上に自分の「思い」を表す。





視点①「もっと！」を生み出す教材化

- ・自分の心という形のないものを抽象表現にすることで、誰かと比べたり、技術的な差を感じて意欲を失ったりすることなく「自分らしさ」を追究できる。
- ・紙より堅牢なベニヤ板を支持体にするこでやり直しがきき、失敗を恐れず色を追究できる。
- ・ローラーを使うことで、表現の幅が広がり、絵の具への抵抗を低くして色の美しさを追究できる。

評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
①形や色彩などの性質、それらが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを理解している。 ②彫刻刀を使った彫り方やローラー等の使い方などを身に付け、表現の意図に応じて工夫し、制作の順序や表現の効果などを考えながら表している。	③表したいイメージなどを基に主題を生み出し、凹部の深さや太さ、凸部の配色やローラー等による着色の仕方、凹部と凸部とのバランスなど全体の構成を考えている。 ④造形的なよさを感じ取り、作者の心情や表現の意図、創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。	⑤創造活動の喜びを味わい、凹部の彫り方やローラー等による凸部の着色など、表現の意図に応じて表現方法を工夫しながら取り組もうとしている。

活動構成

「この子」	視点② 「もっと！」が連続する活動構成	視点③ 「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返り
いろいろと悲しいことがある今の自分の上から明るい光が降り注ぐ未来をイメージしてスケッチを描いた。この構図でいいかまだ迷っている。 	①自分の今の気持ちや性格から、今の自分のかたちを考え抽象的な形で表現する。 ・示範作品を見て、思いを明確にする。 ②全体鑑賞の場を設け、お互いの作品のよさを見合う。 ③今の自分のかたちからスタートして、未来に向けてなりたい自分の姿をイメージしながら変化し広がっていく形を考える。 ④完成したスケッチを松中スタンダードで鑑賞しあい、よさを見つけたり、アドバイスをし合ったりし、自分の制作に生かす。	【松中スタンダード】 学校全体で取り組んでいる松中スタンダード（4人グループでの活動）を基本に制作に取り組んでいくことで、友達のよさから学んだり、自分の思いを友達に語る中で、更に思いが明確になったりして、追究が深まるようにした。
悲しい出来事を下に並べて上から涙のような雫が落ちてきているように構図を変えた。 	⑤完成したスケッチを彫りであらわすことを伝え、完成までの手順について知る。（示範作品や動画を視聴して理解する） ⑥彫りの特徴や技法について学び、実際に彫る練習をしながら、自分の思いに合った彫りを模索する。 ⑦どの彫りで表すかイメージしながら、ベニヤ板に下描きをする。最初に描いたスケッチにとらわれず、自分の思いを表す。 ⑧思いが表せるように工夫しながら、彫り進める。	視点④ 「もっと！」を高めるための学習評価の工夫 【教師の問い返し】 教師からの問い返しを行うことで、思いや完成イメージが明確になる場面をつくる。「どうしてその色を選んだの?」「どんな思いをあらわしたいの?」という問い返しは、全体の場でも、個別指導の場でも有効になるよう意識して使うようにした。
明るい未来は、グラデーションで表したい。筆で丁寧にグラデーションに塗り込んでいった。 	⑨色の効果を考え着色計画を立てた後、彫った凹部を着色する。示範作品を見ながら、どのような色にするかイメージしながら色を塗る。 ⑩彫っていない面をローラーで着色する。「思い」が伝わるように工夫して表す。思いに近付かないところはもう一度彫って色を塗り直す。	
 下の部分も下に行くほど悲しみが深くなるようにローラーを使ってグラデーションに塗った。	⑪完成作品を「思い」と表現の関連に着目しながら鑑賞する。	

実践を振り返って

- 自分を表現する対象としたこと、抽象表現であったこと、板を使うことで絵の具（材料）を楽しむことができる題材であったことが「思い」を明確にし、「もっと」につながった。
- △どこまで描きこんだら完成か？線引きが難しい。本人が終わりと言えば終わりになる？見極めに難しさを感じた。
- ・自己肯定感、自尊感情を高める題材としてとてもよかった。自分の心を見つめ、他者との比較ではない「自分らしさ」を楽しむ授業になっていた。

2. 提言協議報告書

- ・当日は50名の参会を得て協議を行った。
- ・本研究会では、視点①と視点②に重点を置いて協議を行った。

(1) 提言協議記録（参会者コメントより一部抜粋）

【視点①】「もっと！」を生み出す教材化	【視点②】「もっと！」が連続する活動構成
<ul style="list-style-type: none"> ・新鮮な題材で自分自身やってみたくなりました。 ・彫刻することで、線や面がはっきりと表され、形への意識が高いことを感じました。 ・ローラーをかける前と後の印象の変化がおもしろく、完成が楽しみになる作品であるように感じました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・完成品をイメージして組み立てていくため、計画性をもって進めていく学習にもなっていました。逆に思ったのと違う雰囲気になっても発見につながって楽しそうです。 ・「思い」を表現するための「用具の使い方」や「技法」についての説明が映像でされているのはとても分かりやすかったです。 ・作品が進むごとに作品が違って見えてくる、毎回新鮮さを感じられる題材ですてきでした。

(2) 成果と課題

ア. 成果

- ・絵が苦手と思っている生徒でも、新しい表現に意欲的に取り組める題材になった。
- ・彫刻刀で彫ることで、形への意識が高まり、線や面にも「思い」と結び付けて考える生徒が多かった。
- ・ローラーを使うことで、印象が大きく変わり、完成に向けて生徒たちの「思い」に近付けたいという気持ちがより高まっていくことを感じた。
- ・制作行程を用具の使い方や技法も含めて動画で伝えることで、完成までのイメージがより具体的に生徒に伝わっていることを感じた。

イ. 課題

- ・どこまで描きこんだら完成なのか？線引きが難しい。本人が終わりと言えれば終わりになるのか？そのあたりの見極めに難しさを感じた。
- ・鑑賞の方法については、制作者の「思い」をもとに生徒たちの自由な交流を人切にすることは意識していたが、「思い」と表現を関連させて鑑賞させることが曖昧になってしまった。

(3) 今後の授業改善に向けて

- ・板に穴をあける、板の形自体を変える、コラージュする、版画にする等の自由な発想も、これから認めていくことで、「もっと！」を生み出す原動力になり、より自分らしい表現を追究する姿が生まれてくる可能性がある。しかしあまり広げてしまうと、「思い」よりも素材や技法のおもしろさに走ってしまう可能性もあるので、ある程度絞った中で追究ができるようにしたい。
- ・グループでの中間鑑賞や自由に友達の表現を見に行つてよい雰囲気をつくることで、よさを取り込んだり、友達と語る中で表現が広がる場面も見られたが、もう終わったと思っても友達からの刺激を受けて更に追究したいという思いに導けるような中間鑑賞ができるようにしたい。
- ・学習カードで常に「思い」に返りながら制作を進めることで、作品と「思い」の関連に意識を向け、最後の鑑賞に結び付けるようにしていきたい。

1. 助言講評記録

研究発表(1) 伊藤先生

一つ目に変化と包括性、総合性が小学校から中学校への橋渡しの題材として「もっと！」という感覚を沸かせるとてもよいアイデアだった。二次元から三次元へ制作の方法の変化、それに伴って子どもたちが体験する感触、感覚がどんどん変化していくことが「もっと！」というところを刺激していくのではないかと。また、そっくりにかけない・つくれないことに対して劣等感をもつ時期だが、それとは違う価値観をもつ、どんどん変化していき、色々なものが認められるという価値観をもつのによい題材だった。二つ目に抽象の扱いに対して具体的なテーマを与えて抽象に向かわせた発想、あえて色や形に還元してイメージとして表すところがおもしろかった。三つ目には、子どもたちが立体として仕上げることの意味や素材を使った感触を含めた物質性を、どう受け止めているのかもっと聞きたかった。

研究発表(2) 千葉先生

今回の発表は、単に技術を進歩させるということではなく、技術の進歩の過程の中に含まれる様々な要素に着目しながら、それを基にして「もっと！」をつくっている。結果ではなく過程を重視するとよく言われるが、そのためには過程の中で何が起きているのかきちんと把握する必要がある。今回発表ではこの過程の中でどんなことが起きているのか、生徒の認識とどうなっているのか、あるいはそれを改めてどう認識させるかをきちんと把握した上で、「上手くなる」「技術が進歩する」ということを捉えている。また、デッサン、素描という技術の習得をあくまでも多様な表現方法の一つだと捉えさせている。今回の発表は、一つの学習を終えた先の「もっと！」を見据えた授業、カリキュラムや題材のつくり方であった。小中学校はこの技術という言葉にかなり抵抗を覚えているかもしれないが、子どもたちだけでは到達できないところにどうやって達成させるか、上手くなるという技能を身に付けるという過程の中にどんな要素があるのかを参考にするのは有効だと考える。

提言発表(1) 更科先生

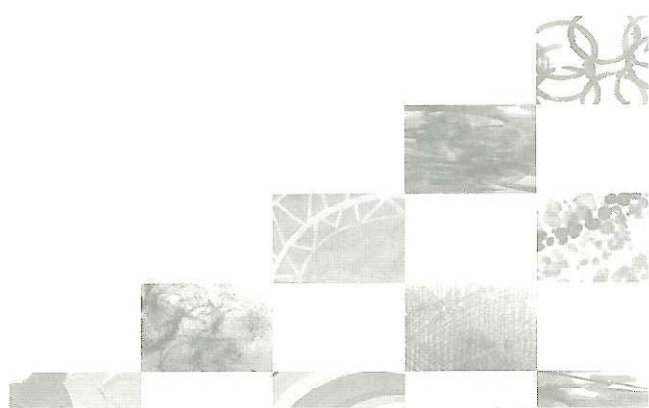
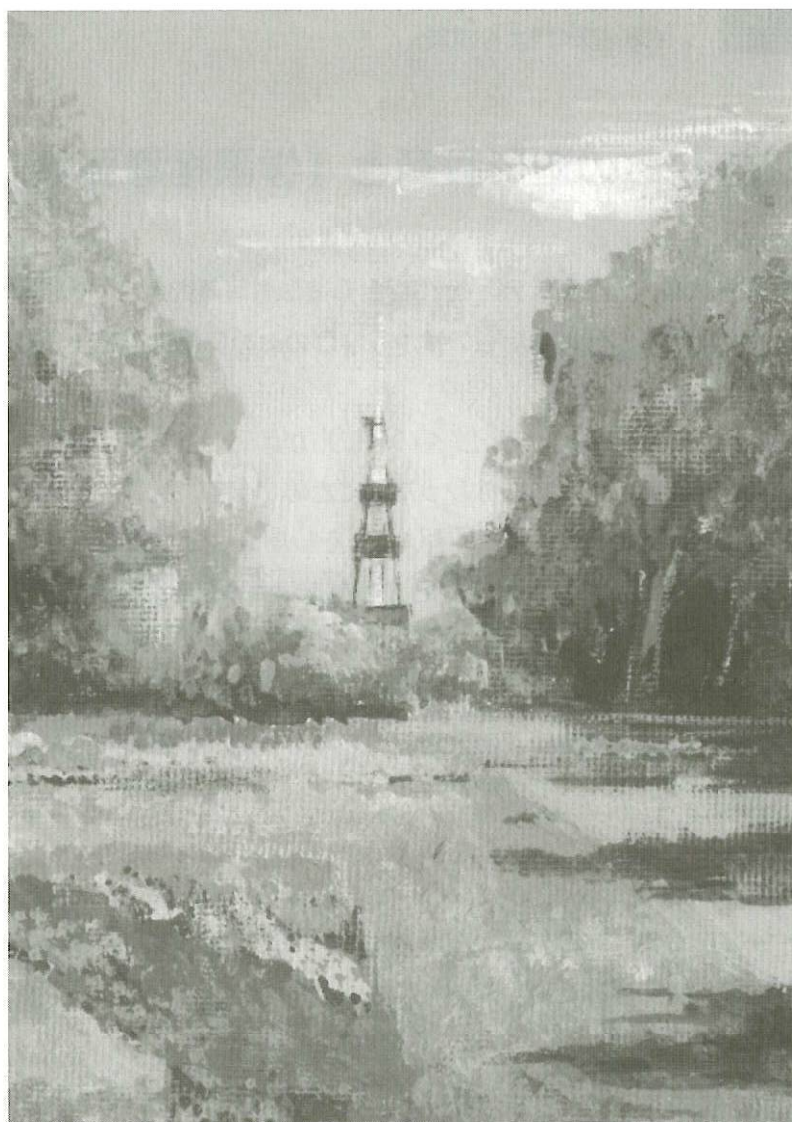
イリュージョンのような絵をかくということと美術館をつくる、キュレーションをするという内容で共通するのは空間である。今回の提言の中心は「協働する場面をつくっていく」ことだったが空間がテーマになっている。このテーマがイリュージョン的な空間を生み出すことと美術館という空間をキュレーションするという内容にもつながっており、尚且つ生徒たちが協働的に学習を進めていく空間が美術室、美術の授業として確保されていると感じた。生徒たちが自ずと協働的な活動をしていけるような空間づくりがされている。物理的・物質的な空間だけでなく意見を言えるような雰囲気や、必然的に生徒たちが協働的に活動しなければいけないような授業上の仕組みが、題材の中や先生の指導の中に含まれている。

提言発表(2) 水野先生

堅牢であるということ以上に彫るという作業をして、中に色を塗り込んで、上からかけて、また彫るという作り方ができるからベニヤ板なのではないか。今回の題材、「形のない自分の心を抽象的に表す」は難しい。「もっと！」を促すということは、思い通りになるということと同時になかなか思い通りにならないところから一歩先に進める時に、「もっと！」という感覚が生まれるのではないかと。思い通りにならないところもあり、思いがけないような発見もあるおもしろさ、可能性を含んだ題材である。

二人の提言は空間の中で子どもをどのように育てていくか、子どもたちの思いをどうやって引き出していくか。全て自由にするのか、ハードルを物質的に与えるのか、他のテーマとして与えるのか。様々な方法で子どもたちの「もっと！」を促す発表だった。中学生は義務教育段階の最後の美術の機会になる。高等学校で美術を選択しない子もいる。中学校卒業時に「『もっと！』自分の表現を」とか、社会生活の中で絵を描く、彫刻をつくるとはもう少し違う形で、美術というものを感じられるような子どもたちに育てていってあげればありがたいと思う。

記念講演・全体講評





—講師—

文化庁 参事官（芸術文化担当）付 教科調査官
 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官

小林 恭代（こばやし やすよ）氏

〈略 歴〉

平成4年に千葉県公立小学校教諭として赴任。
 平成23年から千葉大学教育学部附属小学校に勤務。
 平成30年から千葉県四街道市立栗山小学校で教頭職を務める。
 令和2年4月より現職。

—演題—

「これからの造形教育と『学習指導要領』」

1. はじめに

第73回全国造形教育研究大会・北海道大会、第70回全道造形教育研究大会・札幌大会の開催おめでとうございます。日頃より学校現場で、子どもたちの豊かな学びのために最善を尽くして下さっている先生方に心より感謝申し上げます。

前例のない中でのオンライン開催に向けて、多くの先生方が御尽力くださいました。困難な中、それでも前へ進もうという情熱が、本日の大会につながったのだと思います。提案、提言をされた先生方、運営に当たられた先生方、参会された先生方、皆が「よい授業をしたい」「子どもたちのために指導の改善をしたい」という思いでここに集われました。改めて、皆で授業を考えることの価値を強く感じました。

学校での学びは、子どもにとってかけがえのないものです。友達と同じ空間で、時間を共に活動することは、お互いの感じ方や考え方などに触れることであり、友達との関わりの中で子どもたちは多くのことを学んでいます。この研究の成果を各学校での実践に生かして、より指導の充実が図られますことを心より願っております。

2. 本大会の研究テーマに寄せて

「わたし」を創る～今を生きる、共に生きる造形教育～」「この子が感じる＝考える＝表す造形活動～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～」これらの研究テーマから、子ども一人一人の姿を、視点を明確にして、丁寧に捉えて研究を進められたことが伝わってきます。

図画工作科の目標では、育成を目指す資質・能力を3つの柱で整理し、それぞれに「創造」を位置付けています。子どもたちが、「自分にとって新しいものやことをつくりだすように、表したいことを見付けたり、どのように表すか考えたりする」、「自分なりに新しい見方や感じ方をつくりだす」、「自分の思いを基に活動を充実させ、自分らしくつくったり表したりする」このような造形的な創造活動を目指していくことが重要であり、子ども一人一人の存在、思いを大切にすることから、本大会のテーマは、学習指導要領の趣旨の実現と意を一にするものだと感じます。

3. 造形的な見方・考え方を働かせて

「造形的な見方・考え方」は、子どもたちが資質・能力を獲得する過程で働かせるものです。学習対象に

どのようにアプローチするか、どのような視点、考え方で学習対象を捉えるのかという、図画工作科を学ぶ本質的な意義の中核をなすものといえます。「造形的な見方・考え方」は、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」と考えられますが、これは学校で学ぶとしても、学校の授業以外の場で学ぶとしても変わらず大切なことです。子どもが家庭、地域、社会など様々な場面で「造形的な見方・考え方」を働かせ、形や色などと豊かに関わることができるようにしていくことが大切です。また、この「造形的な見方・考え方」を子どもが働かせることができるような授業にすることを教師が心掛け、授業改善の視点としていくことが重要です。

4. 指導と評価の一体化

そのためには、目の前の子どもの姿を見つめ、「造形的な見方・考え方」を働かせている子どもの姿を具体的に捉えていくことが欠かせません。子ども一人一人の活動が目の前で展開される図画工作科の授業では、活動に取り組む様子、発話、対話、作品、ワークシートなどから様々な学習状況を捉えることができます。授業のねらいを明確にした上で、今、この子はどんなことを考えているのだろう、どんな力を働かせているのだろう…と子どもの姿を見ていくと、こちらが想像している以上の豊かさをもって学んでいることに驚かされます。子どものよさや可能性を捉え、そのよさを子どもに返ししながら、資質・能力の育成を目指していくことが大切だといえます。評価は、子どもの学習改善につながるものにしていくこと、教師の指導改善につながるものにしていくことが重要ですが、まずは子どもの学びの豊かさを、私たちがしっかりと受け止めていくことが大切なのだと思います。

本日の提案や提言の中では、子どもが創造的に表現や鑑賞の活動に取り組む姿を見ることができました。子どもが実際に見たり触ったりする体験的な活動を大切に、感覚を豊かにしていく姿、友達と関わりながら互いのよさを認め合い、自分自身の存在も確かめる姿、造形的な視点をもって鑑賞したり表現したりする姿、試行錯誤を重ねながら自分らしい表現を追求する姿、自分の表したいことを見付け、どうやって表していこうか考えを巡らす姿、夢中になってつくり、つくりかえ、つくる姿・・・先生方が、このような子ども一人一人がもつよさや可能性を積極的に捉え、どれだけ成長したかという視点を大切にされていることがよく分かりました。

5. 図画工作科の学びを深めるために

一人一台のICT端末についても、先生方が資質・能力の育成と関連付けて、感性や想像力を働かせる場面を大切に活用してくださっていると思います。実際にものに触れたり見たりすることが、図画工作科の資質・能力の育成において重要であることも踏まえて、発達の段階や経験に応じて適切に活用を進めていただければと思います。テクノロジーの発展に伴い、社会の有様も大きく変化していますが、だからこそ、教師と子どもの関わり合いや子ども同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する活動、リアルな体験を通じて学ぶことの重要性は益々高まっていくと指摘されています。デジタルかアナログか、どちらかだけを選ぶのではなく、教育の質の向上のために、どちらのよさも適切に組み合わせ生かしていくことが必要になっていきます。先生方の創意工夫で、今後も実践が積み重ねていかれることを期待しております。最後になりましたが、先生方の御健康と、貴研究会の益々の御発展を、心より祈念申し上げます。本日は、誠にありがとうございました。



—講師—

文化庁 参事官（芸術文化担当）付 教科調査官
 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官

平田 朝一（ひらた ともかず）氏

〈略 歴〉

平成6年に岡山県の公立中学校教諭として赴任。
 平成24年から岡山県総合教育センター教科教育部指導主事を務める。
 令和2年から玉野市立宇野中学校に指導教諭として赴任。
 令和3年4月より現職。

—演題—

「これからの造形教育と『学習指導要領』」**1. はじめに**

この度は、第73回全国造形教育研究大会・北海道大会、第70回全道造形教育研究大会・札幌大会の開催おめでとうございます。本大会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、オンラインでの実施となりましたが、実践発表や研究発表をされた先生方、北海道や札幌市の図画工作や美術の担当の先生方ならびに事務局の方々、この研究会に携われた全ての皆様の「子どもたちのために」という熱い思いと、度重なる話し合いなどの努力があって開催できたこととっております。この場をお借りして感謝の気持ちをお伝えできたらと思います。また、本大会に参加してくださった全国の先生方にも感謝いたします。昨年度からの新型コロナウイルス感染症拡大の中でも、子どもたちの学びを止めまいと、様々な対策や効果的な授業への工夫などの努力をしていただいていると思います。本大会の実践や研究内容が、今後の各地域の小学校図画工作科、中学校美術科、高等学校芸術科（美術、工芸）の教育の発展につながることを祈っています。

2. 研究テーマから

本大会の研究主題については、それぞれの実践研究が丁寧に行われ、新学習指導要領の趣旨を踏まえた内容でありました。北海道造形教育連盟の研究主題は「“わたし”を創る～今を生きる、共に生きる造形教育～」であり、「今、わたしが生きる造形活動の在り方とは」と「わたしが高まる共に生きる造形活動の在り方とは」という二点に着目した研究でした。新しい見方や感じ方、表し方を獲得したり、協働的な学びを進めたりしながら、生徒を自立へと導き「わたしを更新」していくことで未来をよりよく生きる資質・能力の育成を図る内容のものでした。また、札幌市造形教育連盟の研究主題は「この子が 感じる＝考える＝表す 造形活動～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～」であり、目指す子ども像を「形や色などを通して、よりよい生活をつくりだそうとする子ども」とし、その育成のために「もっと！」を生む題材の設定に取り組みされていました。

今回の研究の実践発表や研究発表からは、子どもたちから湧き出てくる「もっと！」を感じる内容が多くありました。そのためには、生徒が題材に対して主体的になると同時に、他者との対話を通して新たな気づきや視点を獲得し、自分の考えをしっかりと振り返り、自分の学びが更新され成長につながるという線

り返しが指導計画の中に準備されていることが大切だと考えます。また、表現や鑑賞の活動において造形的な見方・考え方を働かせるということも大切にされていることが伝わってきました。

3. 新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりについて

私が拝見させていただいた中学校、高等学校、特別支援学級の今回の発表において、先生方が大切にしていたポイントと新学習指導要領と照らし合わせていくつか考えてみたいと思います。

まずは、「主題を大切にする」についてです。生徒が自ら主題を生み出すことができるように、ワークシートなどが工夫されており、発想や構想の段階でしっかり考えられる場が用意されていました。また、完成後に作品の主題とそれをどのように表現したのかといった工夫点を記入させるなどの工夫も見られます。中学校美術科の新学習指導要領の改訂では、「2 内容」の「A表現」(1)イに「主題を生み出すこと」を新たに加えました。主題を生み出すことは、発想や構想を高めるための重要な部分であるので、それぞれの題材で、生徒自らが自分の表したい主題を生み出すように題材や導入を工夫して指導することが大切です。

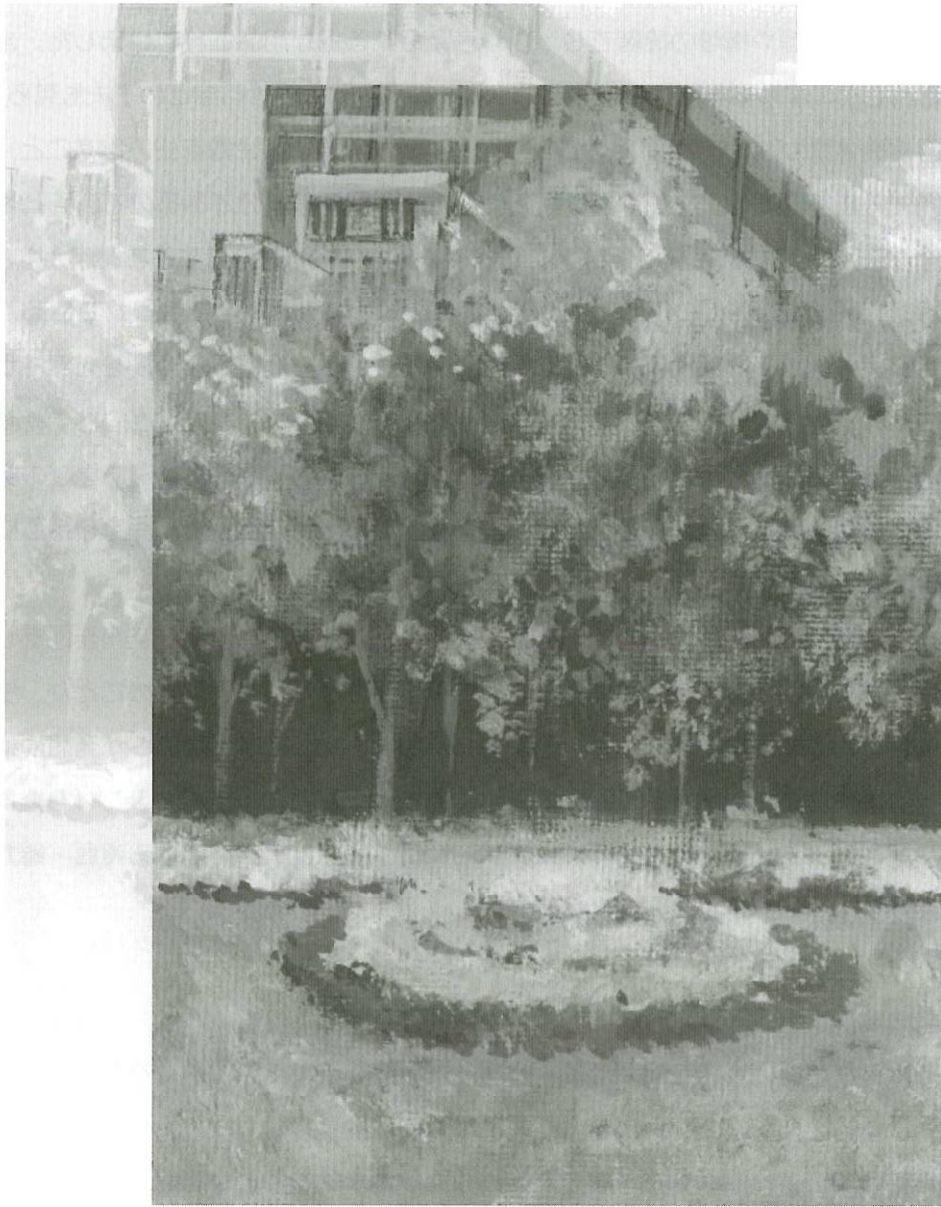
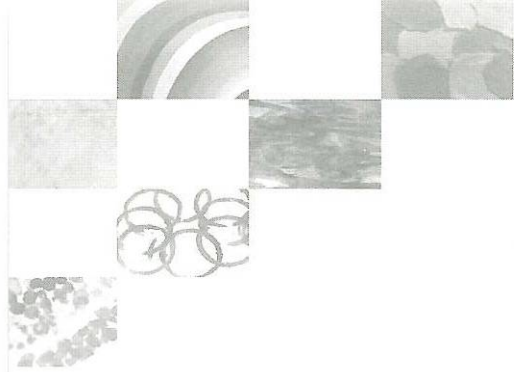
次に「主体的・対話的で深い学び」についてです。題材とどのように効果的な出会いができるか導入場面を工夫したり、アイデアスケッチや完成後の作品を相互に鑑賞し合ったり、振り返りを充実させて自身の変容に気付かせたりする場面を意図的に設定するなどの工夫がありました。題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにし、その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ることが重要です。

最後に「表現と鑑賞の指導の関連を図る」についてです。例えば、導入時の1時間で美術作品をしっかり鑑賞し、作者の心情や表現の意図と工夫を生徒に感じ取ったり考えさせたりする。このことが、生徒が発想や構想する際にも生きるように授業を計画している工夫もありました。鑑賞したことが発想や構想に生きるだけでなく、発想や構想したことが鑑賞に生きることも考えられます。「A表現」及び「B鑑賞」の指導については相互に関連を図って、特に発想や構想に関する資質・能力と鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させて学習が深められるようにすることが大切です。

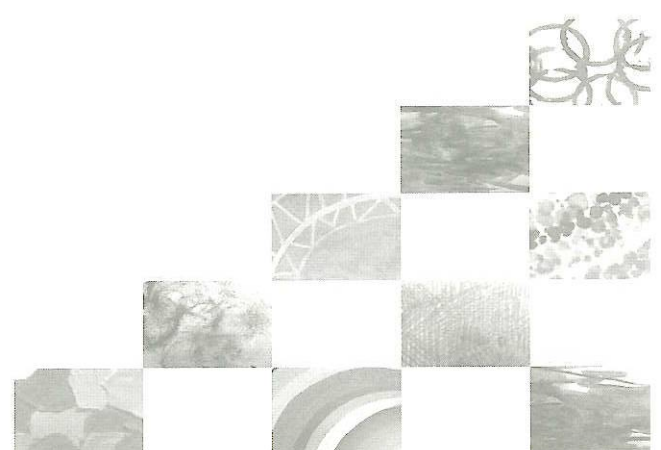
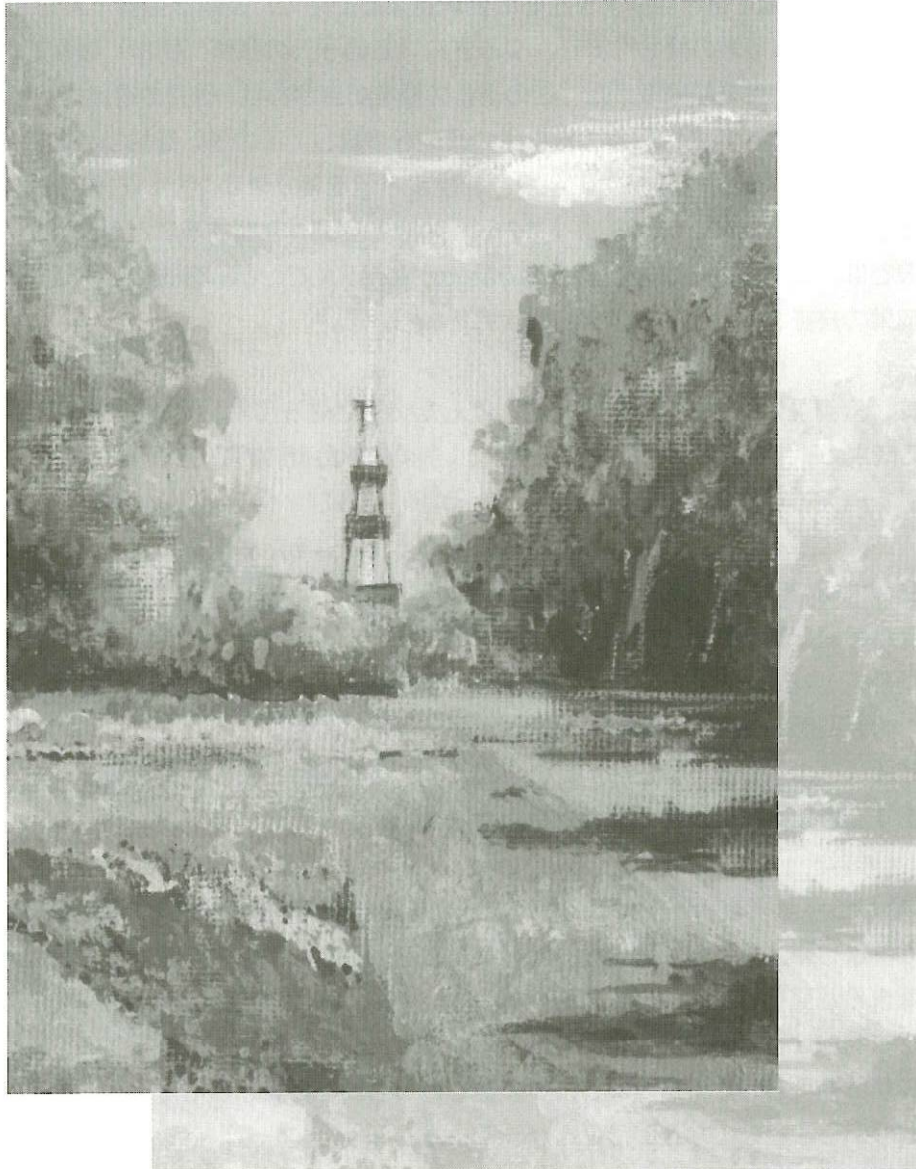
4. おわりに

本大会から、子どもたちが自身の変容を捉えたり、対話から新たな視点に気付いたりして、次の授業への「もっと！」につながっていくといった姿が見えてきたのではないのでしょうか。そのためには、子どもたちが表現や鑑賞の活動の中で造形的な見方・考え方をしっかり働かせることができるように、教師が授業を計画していくことが考えられます。そして、目の前の子どもたちの姿をしっかりと見つめて、子どもたちのよさなどを捉えていき、指導と評価の一体化の視点から授業を考えていくことも大切です。

今後は、各地域の伝統工芸や地域の人材なども活用するなどカリキュラムマネジメントの視点も大切にしながら、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指して研究を続けていただきたいと思います。最後になりましたが、先生方のご健康と、研究会の益々のご発展を祈念しております。本当にありがとうございました。



成果と課題



研究のまとめ

1. 研究主題【この子が 感じる=考える=表す 造形活動

～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～】について

北海道では、北海道造形教育連盟が提案する【“わたし”を創る～今を生きる、共に生きる造形教育～】の具現化に向けて、各地区サークルで研究主題を設定している。そこで、札幌市造形教育連盟では、【この子が 感じる=考える=表す 造形活動 ～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～】を研究主題とし、よりよい造形活動を目指し、授業実践や研修などを行ってきた。

研究授業では、研究主題で目指す子どもの姿を捉えるために、授業参加者一人一人が授業での「この子」を見つめ、0分目から授業の終わりまで、つぶさに「この子」の製作（制作）過程での変容を見取った。その後の分科会では、参加者が見取った「この子」の姿を紡ぎ合わせ、研究の視点にそった検証を行ってきた。

本来であれば、今大会でも参加者の方に生の授業を参観し「この子」を見つめていただきたかったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、札幌まで足を運んでいただいていた授業公開が困難となってしまった。そこで、研究発表という形で「この子」の姿を全国へ発信することとなった。

研究発表では、幼稚園から高等学校までの校種の枠を越えて、研究の視点と関連付けた実践と発表を行った。その成果の検証の場として今回の全国大会を振り返る。

はじめに、教師主体ではなく子どもを中心とした造形活動を目指してきた札幌市造形教育連盟にとって、本大会での成果の一つとして「この子」を主張し、多くの参加者の方にその意図が伝わったことが挙げられる。

造形活動を考えるとき「この子だったら、どう感じるかな・何を考えるかな・どうやって表すかな」と、子ども一人一人の顔を思い浮かべながら材料に触れる時間は私たち教師にとって、図工・美術を通して子どもと向き合う大切な時間でもある。世界に一人しかいない「この子」のための造形活動を提案していくことこそが私たちの使命であると考えている。

それと同時に、「この子」が集まった集団としての学びについて、北海道造形教育連盟が提案する「協働的な学びへの必要感の生成」を意識した造形活動を考えてきた。

個としての「この子」と、集団の中での「この子」の両面から造形活動を考えることで、北海道造形教育連盟が目指す造形教育像に迫ることができたと考えている。

次に、「感じる=考える=表す」について、子どもの中で渾然一体となって働くものとして捉え、それらを総合的に働かせるような造形活動を展開したことで、子ども本来の伸び伸びとした表現の追究や、見方や感じ方の深まりが見られた。「まずは感じる時間」、「今は考える時間」、「次は表す時間」といったように活動に合わせて働かせるものではなく、子どもの中では一つの活動の中でも同時に、あるいは即時的に切り替えたりしながら働くものであるという前提の基で造形活動を考えることで、子どもがより主体的に学んでいくことがどういうことなのかということが、明らかとなった。

2. 子どもの「もっと！」を生む題材の構成について

自ら（自律的に）対象に働きかける力を発揮するための表現や活動への欲求を発動させるものを、「もっと！」と設定し、子どもがこの「もっと！」を生むような題材の構成を図った。

「もっと！」には、「今あるもの（こと）を更に追究したい」と「更にたくさんの方法でやってみたい」という二つの側面があり、それらを子どもが自らの表現の欲求に合わせて働かせることができるよう以下の四つの視点から授業を考えることで、主題で目指す姿に迫ることができたと考えている。

(1) 視点①「もっと！」を生み出す教材化について

教材化において、子どもが「もっと！」を生み出すためには、子どもがわくわくするような題材との出会いや、子どもが様々な試しの活動から自分なりの表現方法を選択できること、表現を更に追究できるような発展性のある題材の提案などを行うことが重要であることが明らかとなった。

今後に向けては、目の前の子どもがどのようなことに造形的な興味・関心があるのか、それまでにどのような資質・能力を獲得してきたのかなどの子どもの実態を把握し、造形活動の中で発揮される資質・能力の系統性を踏まえた上で、材料や用具に対する程よい抵抗感や、造形的な行為に対する期待感などをもつような活動の設定、子どもが自己選択を繰り返しながら表現を追究していくような教材化を図ることで、子どもが更に「もっと！」を生み出すと考えられる。

(2) 視点②「もっと！」が連続する活動構成について

活動構成において、子どもの「もっと！」が連続するためには、題材で目指す資質・能力の発揮に向けて、子どもが既習を活用できるような構成にしたり、「どのように感じ・考え・表していくのか」といった学習過程における子どもの変容を想定した活動を設定したりする。また、「もっと！」が個別に起こることを想定するとともに、それらが他者との関わりを通して更なる「もっと！」へと続くように、個と集団との学びを行き来しながら活動するような構成とすることが重要であることが明らかとなった。

今後に向けては、発揮を目指す資質・能力に向けた活動の中で、造形的な行為や材料・用具等に十分浸る場を保障することで、子どもが試行を繰り返しながら、自分なりの表現を追究したり、見方や感じ方を広げたり深めたりするようにする。また、製作（制作）過程や、振り返りのタイミングなどといった活動の見通しの共有により、振り返りによって更に「もっと！」が連続するような活動構成を行うことで、子どもが更に「もっと！」を連続させると考えられる。

(3) 視点③「もっと！」をつなげるための自他の変容を捉える振り返りについて

自他の変容を捉える振り返りにおいて、子どもが「もっと！」をつなげるためには、まずは子どもが必要感をもった上で振り返りを行うようにすることが重要であると分かった。振り返りの方法については、自分の表現で変わってきたことについて自己内対話を通して捉えたり、ICTを活用した写真による記録や、アプリケーションソフトを使って活動の節目で自分が感じたことや考えたこと、工夫して表したことなどのコメントを作品の画像に付けたりするなど、子どもの発達段階に合わせた取組が有効であった。

他者との対話的なやり取りを通した振り返りでは、形や色などの造形的な言語を用いながら、自他の表現について新たな視点でよさや美しさなどを感じ取ることが重要であることが明らかとなった。

今後に向けては、子どもの活動に合わせた個別または全体での振り返りのよりよいタイミングの精査や、変容を捉えるためにICTを活用した製作（制作）過程の記録や共有を行っていく。また、造形的な言語を普通の授業から教師も子どもも使っていくようにすることで語彙を蓄え、より効果的な振り返りができるようにする。その際には、形式的なものにならないように、振り返りをする中で、その後の活動にどのようなよさがあるのかを子ども自身が感じられるようにすることを大切にしていく。

また、自他の変容を捉えようとする姿は、授業の時間以外にも起こりうることを想定し、子どもが必要に応じて交流ができるような環境を整えていくことで、子どもが更に「もっと！」をつなげると考えられる。

(4) 視点④「もっと！」を高めるための学習評価の工夫について

学習評価において、子どもが「もっと！」を高めるためには、子どもが表したり感じ取ったりする姿や、活動の中でのつぶやきや友達との会話などに教師が共感的に寄り添いながら、子どもの変容の過程や、題材の終末などで適宜評価することで、自分の表現をさらに追究するようにしたり、次への活動への意欲を高めたりすることが重要であることが明らかとなった。

今後に向けては、子どもがどのような資質・能力を発揮することが題材の目標につながるのかを精査し、そのためにどのような造形的な言語を用いて評価すれば、資質・能力の更なる発揮を促すことができるのかを考えていく。

また、子どもが表している過程を写真に撮り全体で交流したり、製作（制作）途中や完成した作品を掲示したものを全体の中で評価したりして、形や色などに対する知識を共有することで、子どもが更に「もっと！」を高めると考えられる。

さらに、題材間の資質・能力のつながりを意識することで、題材と題材の間で「もっと！」を高めていくことの大切さも確認された。

3. これからの造形活動に向けて

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、今まで当たり前だと思っていたものが非日常と化した今、改めて造形教育のもつ力の大きさを考えさせられる。特に、子ども同士が顔を突き合わせ、お互いの表現や見方・感じ方などについて「ねえねえ、いいこと考えたよ。」「すごい！とってもきれいだね。」などと、対話をしながら学ぶことが子どものよさや可能性を更に高めたり、広げたりすることに大きく作用することに気付かされた。これから先、どのような未来がやって来るのかは誰にも予測できない。しかし、私たちはそのような中でも、形や色を通して、自ら“わたし”を創る子どもの姿を目指した造形教育の具現化に向けて尽力していく。

身の回りに溢れている形や色が、自分のよりよい生き方にどのように関わっているのかを、普段の生活の中で意識することは少ないかもしれない。それでも、使っていると楽しい気持ちになるお気に入りのペンの形であったり、ふとした瞬間に見上げた空の美しい青色であったりと、何気ない日常にも自分の生活を豊かに感じさせる形や色がある。そのことに気づき、自ら関わろうとする子どもの育成を目指しこれからも造形活動に向き合っていきたい。

最後に、本大会は子どもの豊かさから多くを学ぶことができた大会であったと振り返る。大会に携わった全ての方に心から感謝を申し上げたい。本当に、ありがとうございました。

各地区サークル活動報告





札幌市造形教育連盟

この子が 感じる=考える=表す造形活動

この年、4つのチームに分かれて授業づくりをしました

【2019年度】【オータムジャンプ・ウインタージャンプ（研究全体会）】

- ・ 10/28 明園中学校 藤森 渚先生「自分を表す あいうえお」中1
- ・ 11/18 あいの里東小学校 植松 賢治先生「見たこともない アニマルワールド」小2
- ・ 11/26 拓北小学校 渡邊 千晴先生「にここにこ ともだちハウス」小2
- ・ 12/19 稲穂中学校 久蔵美和子先生「音の絵」特別支援

【2020年度】【2021年度】【全国大会（オンライン開催）にむけて】

2019年度から全国・全道大会の開催に向けて準備を進めていましたが、新型コロナウイルスの影響で、2021年度にオンラインによる開催に変更をし、経験したことのない形での大会に向けて取組を始めました。

検討はZOOMによるものを中心とし、オンラインでの研究実践発表を4回行うことで、「この子が 感じる=考える=表す造形活動」を具現化していきました。

大会当日は、それまでの取組を生かし、全国・全道の協力を得ながら大会運営をすることができました。



石狩造形教育連盟

子どもが自分の「よさ」や「できる」に出会う授業づくり



石狩管内教育研究会 図工美術部会の活動

～「考え」「つくる」を行き来し、子どもたちの個性と向き合う～

2021年度の重点「子どもが創造的な発想・構想をもつために

(A) 創造的な発想・構想が生まれる授業づくり

●2年ぶりに「二次研究協議会」が開催（密を避けるため、小中分散開催）10月15日(金)

◆小学校

江別市立対雁小学校
2年「はさみのあーと」
授業者 鈴木 愛 教諭

◆中学校

江別市立江別第三中学校
3年「プラスチック工芸」
授業者 佐藤 哲 教諭 他

●「理論研修会」も実施の予定！講師はなんと……

11月16日(火)
夢プラザ（北広島市）

「中学校美術・小学校図画工作科の新しい「評価」について」
講師 村上 尚徳 氏（IPU環太平洋大学 副学長）



空知美術教育研究会

～まなざしを共有し おもいをつなげる造形教育

研究キーワード

おも
さぐ
つな
がる
つな
げる

全空知子どもの作品を語る会 2年延期しています



2021年も集まることが難しい状況にありましたが、深川アートホール東洲館で「空美会員展」を開催することができました。

コロナ禍に、大人も子どもも、表現活動・鑑賞を通し、文化芸術に心が支えられることも多くあったと思います。これからも子どもの思いと表現を受け止める私たちでまた、再会できますように。

第56回全空知子どもの作品を語る会は、2019年の赤平赤間小大会の後、2020年と2021年の大会、夏の美術教育を熱く語る会、新春ゼミと残念ながら延期をしています。

会員同士、会えない・語り合えない日々が続いていますが、それぞれが、子どもの隣で、おもいをつなげていることと思います。



上川造形教育研究会

2020年度の活動 コロナ禍でもできることを

2021年度もオンラインで元気に活動中！
広大な上川管内。オンラインとの相性がよかったようで、どんどん進化中。

2020年度は密を避けるために対面での活動ができない日が続きました。しかし、会員の「やれることをやっぺいこう！」という声で動き始め、オンライン（Zoom）を使った様々な学習の機会を作ることができました。

その取組を紹介します。

○交流会 11月7日 13名参加

新指導要領が実施されている小学校の困り感から話題が始まりました。「3観点って評価がしにくい」「教科書が変わって使い勝手が変わった」「学校ICT環境の情報交換」交流会開催で、「オンラインで深めることができる」を確信した交流会でした。

○ロイロノートスクール実技研修会 12月12日 10名参加

ロイロノートスクールを先行的に取り組んでいる東先生（比布中）の実践を紹介してもらいました。研修用アカウントで実際に先生方も体験。シンキングツールとしての利用、ポートフォリオとしての利用など参考になることがたくさんありました。

○オンライン授業研 1月23日 13名参加

吉野先生（東川中）の授業動画を事前視聴し、授業研をオンラインで実施。鑑賞の授業で、授業の進め方、生徒の思考の深まり方がわかる授業でした。協議では、授業内容に加え、オンライン授業研の可能性について深めることができました。

○新学習指導要領オンライン学習会 2月6日 26名参加

名達英詔氏（十文字学園女子大教授）を講師に新学習指導要領を解説していただきました。「『指導と評価の一体化』のための学習評価に～」（国立教育政策研究所）を参考に、即実践で生かすべき考えを教えてくださいました。

○作品を語る会 2月20日 11名参加

油粘土、彫り進み版画、パッケージデザイン、樹脂粘土などの作品の写真から、質疑を通して授業者の題材に対する考え方を深めたり、見せてもらった題材を実践するための展開の工夫を聞いたり、参加者の授業力向上につながりました。



旭川市教育研究会図工・美術部

「わたし」を映す

旭川市教育研究会図工・美術部は、「広げる」研究と「深める」研究の2本の柱で年間事業を進めています。

2019年に全道造形教育研究大会（道北ブロック大会）を終え、安心したのもつかの間、旭川市もコロナ禍の影響を強く受けてしまいました。その後、各種事業の計画は立てるものの、思うような活動ができていません。特に、2020年度は長い停滞期に入ってしまった。

現在は、工夫してできるところから、活動を再開させているところです。

そんな中、パートナーでもある上川造形教育研究会には、主催のオンライン授業研、学習会等に参加させていただいて、大変元気を頂いています。今後更に連携を図ってまいります。

～広げる～ 彫刻出前授業



地域連携アートプロジェクトの一環で、旭川市彫刻美術館との共同で実施している彫刻巡回出前授業です。昨年度はやむを得ず中止しましたが、今年度、旭川市の希望する小中学校を対象に再開しました。

旭教研図工・美術部の部員が出向き、対話型鑑賞と体感型鑑賞を行います。子どもたちは彫刻のよさを身近に感じることができます。(写真はコロナ禍以前のもので)

～深める～

昨年度、今年度と、市の研究大会が中止となり、授業研究を行うことができませんでした。

オンライン開催についての知識が不足し、交流が進まないのが課題でした。今後のために学習を深めているところです。

毎年、旭川近郊の教職員有志による美術作品展「パレットのなかま展」を開催しています！昨年度も無事開催できました！



留萌地方美術教育研究会

人生を豊かにするワクワクあふれる造形教育

留美研名物！「作品を語る会」会員が作品を持ち寄りざっくばらんに語り合います。



管内の研究大会では、6年生の「あみあみアミーゴ」を公開しました。紙バンドという素材を使ったお気に入りの入れ物をグループで教え合いながら制作しました。



第69回道北ブロック大会「題材屋台」では、留萌管内の地域の特性を生かした海の漂流物を集め、参加者の方に材料の組み合わせを楽しんでもらいました。





宗谷造形教育研究会

“わたし”が生きる造形活動



【2019年度】・4月研究会発足総会・6月実技研修会
・7月全道大会道北ブロック大会参加・11月理論研修会

旭川大会での造形まつり「立体凧」

研究会が発足。7月に旭川市での全道大会に運営協力や造形まつりで参加。11月研修会は道造連から講師を招き新指導要領の資質・能力の捉え、授業づくりの視点など幅広く学びました。

【2020年度】・6月紙面総会・11月道造形連盟70周年記念誌に寄稿

コロナによって管内教育研究発表も中止となり、図工美術に限らず様々な教科研究での交流が難しくなった一年間でした。

【2021年度】・9月オンライン研修会・10月オンライン全道全国造形研への参加

9月に、中学校の教育課程交流のオンライン研修会を実施。個人端末活用で作品制作記録や振り返り等への活用が進みつつあります。また、オンライン研修が遠隔地会場と気軽につながるメリットが大きく、全道・全国大会に複数名参加できました。

宗谷管内は現在小中学校52校。中学校は併置2校を入れて22校ですが、美術免許を持つ教職員はその半数以下と思われます。図工美術は答えが児童生徒自らの中にある学びです。選び・決め・つくることが「楽しく夢のある」ことであることをよく知るのには、造形教育に携わる者です。北海道とのネットワークが、これからも志を結びつけ、絆をカタチにする役割を果たしてほしいと思います。



渡島美術教育研究会

「わたし・夢・つくる」～自らつくり、つながり、ひびきあうとき～

渡島美術教育研究会は、会員数11名の小ぢんまりとしたサークルで、細々と活動しています。

コロナが流行る以前は、「渡島児童生徒美術展」という作品展を開催し、管内の児童生徒の作品を一堂に展示し、各校の児童生徒や保護者、教員をはじめ地域の方々にも見ていただき好評を得ていました。この2年は開催できていませんが、再開できる日が来ることを願っています。

また、実践交流や実技講習を行い、指導力向上を図っています。

児童生徒美術展のようす。約800点の作品が集まります。





函館市美術教育研究会

美の開拓力～未来はぐくむ造形教育～

「美」は、私たちの生活や社会と切り離すことのできないものであり、美術作品のみならず衣服や日用品のデザイン、日常の景色など、常に私たちの身の回りに常に存在します。私たちは「美」に感情を抱き、「美」を社会の様々な場面で活用し、共に生きています。このように「美」を通して感じることや享受することが社会や私たちに与える様々な効果や影響力などを「美の開拓力」と捉えていくことにしました。

○「未来をはぐくむ力」のために

(1)造形教育によってはぐくまれるもの

「こころ」「ちから」「つながり」の3つをキーワードに据えました。

(2)地域・社会生活とつなぐ活動

(3)未来の創り手となるために必要な資質・能力をはぐくむ授業

「何ができるようになるのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」の視点にたった授業づくり、授業改善を目指します。

○研究内容

1 実現したい子どもの姿を3つの造形活動からみつめる。

2 深い学びを目指して～実践より～

3 授業づくり・授業改善のために、視覚的にわかる指導案づくりの工夫

4 地域と連携した指導力向上のための教師の学び



美術館鑑賞研修会



造形教育研究大会への参加



教育大で合同学習会



函館市小中学校児童生徒美術展



檜山造形教育研究会

管内美術教育の充実を目指して

檜山管内には、今年で51年の歴史を誇る児童生徒美術展があります。



今年で51年の歴史を誇る檜山管内児童・生徒美術展。この美術展開催に向けて、檜山造形教育研究会は、各関係団体と連携を密にしながら、研修会等の充実を図り、管内美術教育の充実と高揚に努めております。

例年250点以上の作品応募がある管内美術教育の中核を担う美術展です。



美術展はおよそ1週間開催されますが、児童・生徒のみならず、多くの保護者・地域の方々が会場を訪れ、芸術の理解を深めております。

檜山造形教育研究会は、檜山管内美術教育の充実を目指し、少人数の会員ではありますが、活動の充実を図って参ります。

檜山造形教育研究会では、檜山管内で作る図工サークルの部員と連携を図りながら、絵画に関する研修会も実施しております。

この研修会で学んだことを生かし、管内美術展の審査等にも役立てています。





日高造形教育研究会

図工・美術教育を通して ～子どもを語る～

日高造形教育研究会は、2011年に設立されてから今年で10年目となります。9名という少数精鋭の小さな研究会ですが、実技講習会や研究授業の公開等を実施しています。また、「子どもを語る会」と称して子どもが制作した作品を持ち寄り、作品を通して聞こえる子どもの声を見出し、実践での高め方や生かし方の交流を行うなど、会員の資質向上を図るとともに、日高管内の図工・美術教育の振興に努めています。これからも、「開かれた研究会」「内容の深い研究会」「楽しい研究会」を進めていきたいと存じます。



十勝造形サークル

研究テーマ 「豊かな表現力の育成」

広～い十勝地区の研究会です。今年度のメンバーは25人。例年の主な活動は次のような内容です。

- ・十勝子ども大会の作品審査と展示（十勝町村の小中から約1500点応募、入選作約300点展示）
- ・サークル合同研究会（授業研と討議）・講座講師派遣・公開授業・実践交流・教材研究など。

また次年度は常教研と合同で全道造形研究大会をオンラインで開催する予定です。

ZoomやICTの機器等、まだまだ不慣れなところも多く手探りではありますが、実りある研究大会にすべく、尽力しているところです。それでもまだまだ力不足で、Team Hokkaidoの皆さまにも、いろいろとお知恵をお貸しいただけたらと思っています。ICTを活用した授業、その他について、「どうやってますか～？」とか「何かヒントを～！」と突然電話するかもしれません。その時はどうぞ優しく教えてください。

退職されたOBの先生も戦力として頼っている、また力を借りられる（笑）「アットホーム」で「他力本願」なサークルです。他地区のサークルさんともつながりたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



※写真は昨年の木彫についての勉強会から



釧路造形教育研究会

学びをつなぎ、創造活動の喜びを感じられる児童・生徒の育成
～気づきや思考から造形的な見方・考え方を生かす授業の構築～

コロナ禍ではオンラインを中心にして研究・交流を進めてきましたが、昨年冬あたりから集まって活動することができています。

6月
更科先生による
ICT研修会



5月
芸術館にて鑑賞研修&創造研総会



8月
授業力向上セミナーではZOOMで研究協議



10月
学教研との連携で授業動画公開&研究協議

掲示板アプリ「Padlet」を使って日常の取組をシェアしています。公開研の案内や、授業や掲示のアイデアなど、お宝情報がザクザク！



オホーツク造形教育連盟

「個-創-喜-感」～一人ひとりが創造的な喜びを実現するために～

今まで多くの先生と児童生徒と一緒に造形教育を学んできました。今はなかなか大変な時期。でも、また一緒に創造的な喜びを実現しましょう！



個創喜感

R1：滝上小：クミクミックス（矢野先生）、網走二中：デザイン-工芸（竹内先生）、訓子府中：実技研（小久保先生） R2：知床ウトロ学校：鑑賞（吉田先生） R3：未定（検討中）



根室造形教育連盟

一人ひとりの持ち味を生かした造形教育を目指して

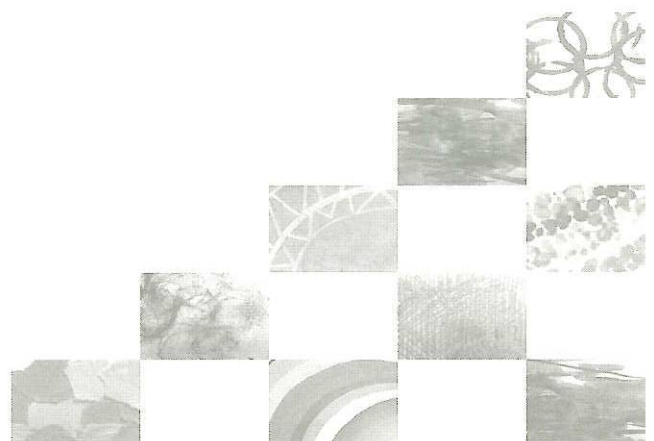
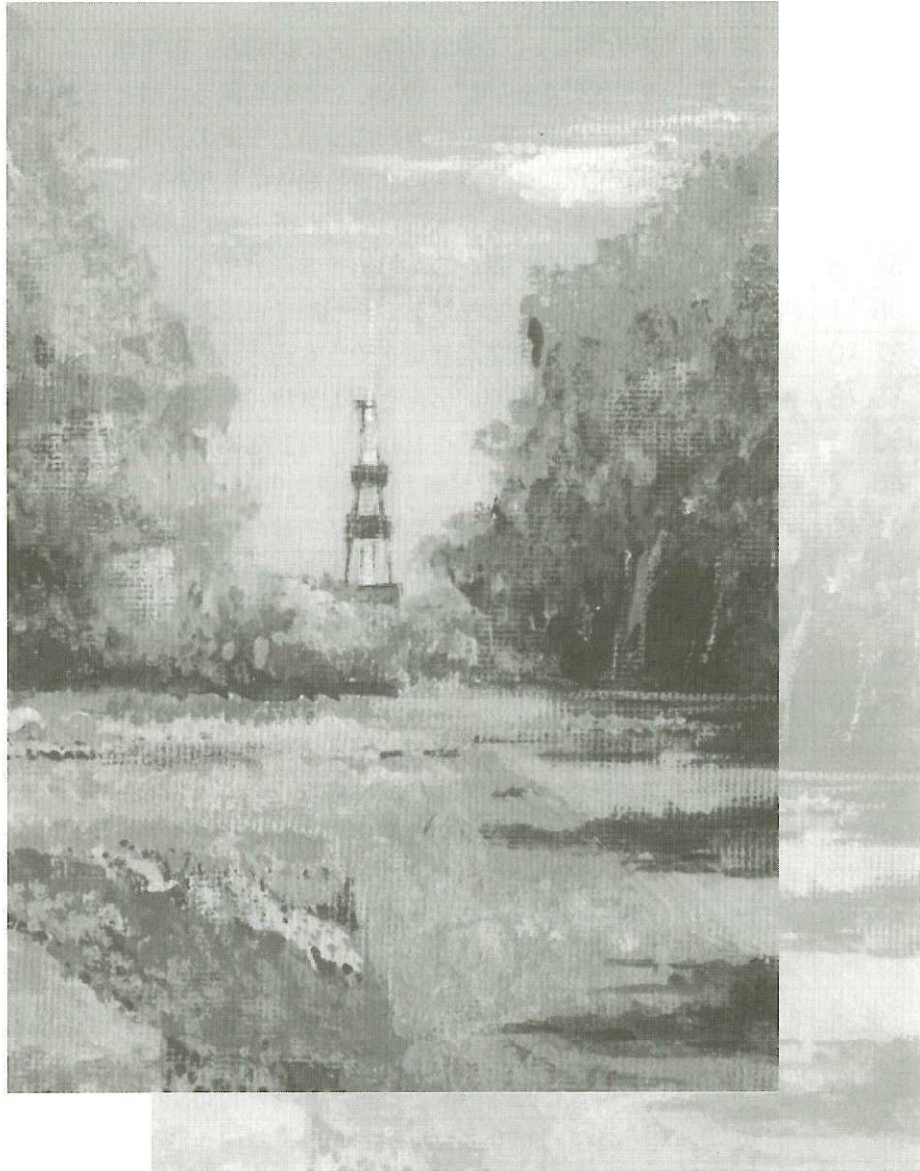
根室教育造形連盟では毎年、1回～2回の研修を行い、互いの作品課題や悩みなどを意見交換しています。今年は、コロナ禍ということで様々な研修が中止される中、R3年の1月に根室教育研究所主催の研修に参加することができました。「こどもの絵を語ろう」という講座を開き、参加者と造形連盟の委員が対話する形でスムーズに終わることができました。この体験から遠隔研修の利点もあると思いましたが、実際にあって作品を作ったり、意見を言ったりしながらの対面の魅力は何物にも代えがたいと再認識しました。

ここ1～2年で時代の流れが急に速まった気がしています。予測が難しいこんな時代だからこそ、想像する力が求められるのだらうと思います。美術の時間や学校生活の中で子どもたちに少しでも造形教育としてできることを、想像していきたいと思います。





資料



全国造形教育研究大会のあゆみ

回	年月	会場	大会主題
1	昭和23.10	一宮市	図画工作教育の根本理念の討議と解明
2	24.10	京都市	図画工作教育振興の具体案如何の協議
3	25. 9	広島市	図画工作における評価の実際
4	26.10	福岡市	鑑賞教育、全国児童図画工作展
5	27.10	金沢市	生活と美術、全国児童生徒図画工作・作品展
6	28.11	大阪市	指導要領の検討
7	29. 8	仙台市	指導要領ならびに指導内容の検討
8	30.11	東京都	現下の図画工作教育を阻むものは何か、改善策
9	31. 8	札幌市	造形教育において、つくりだす力を養うにはどうすればよいのか
10	32.10	松山市	現代日本の図画工作教育の反省と今後の方向
11	33.10	長野市	図画工作科の本質を再検討し今後の対策をたてる
12	34.10	神戸市	図画教育の実情を明らかにし、その新しい建設へ
13	35. 8	神奈川県	生きる喜びの基をつくり出す造形教育
14	36.11	別府市	いきいきとした生活をつくりだす造形教育
15	37.10	富山市	人間づくりの造形教育を確立するために
16	38. 8	東京都	科学と美術教育、伝統と美術教育、原理と方法
17	39.11	宇都宮市	造形教育の実践をとおして、豊かな個性を育てる
18	40. 8	東京都	第17回国際美術教育会議東京大会の内容に包含されておこなわれた
19	41.10	盛岡市	たくましい創造力を育てる造形教育の実践
20	42.10	新潟市	人間形成をめざす造形教育の現実的課題と解決策
21	43. 8	高知市	造形教育の今日的課題を究明し、ゆたかな感性とたくましい表現力を育てよう
22	44. 8	那覇市	造形教育を風土の中でどのようにいかさか
23	45.10	秋田市	ほんとうの美しさをつくりだす授業をもとめて
24	46.10	静岡市	たくましい創造力を育てる造形教育
25	47.11	東京都	未来を指向する美術教育は何か
26	48.10	京都市	わが国の造形教育の今日的課題は何か
27	49.10	和歌山市	子どもと共にあゆむ造形—ゆたかな発想をもとめて—
28	50.10	山形市	ゆたかな心情とたくましい創造力を育てる造形教育
29	51. 6	東京都	緊迫した教育課程改訂にどう対処するか
30	52. 7	札幌市	みずみずしい中身でしなやかな子どもを育てる造形実践
31	53.10	埼玉県	造形教育の本質にせまる実践はどうあるべきか
32	54.10	仙台市	豊かな創造力を育てる造形活動を求めて
33	55. 7	愛知県	自らつくりだす喜びを育てる造形教育
34	56. 6	長岡市	生きているあかしの表現
35	57.11	佐賀県	創り出すよろこびを求めて—日々の実践の中で、今日的課題を探る—
36	58.11	東京都	独自性を見なおす—国際的視野に立った発展する美術教育の今日的課題—
37	59.10	長野県	心おどらせてとりくむ造形
38	60.10	奈良県	明日に生きる創造力の開発をめざして
39	61. 8	旭川市	子どもの心をゆり動かす造形教育—つくる心の拡がりや深まりを求めて—
40	62.10	千葉県	子どもの心を掘り起こす造形教育
41	63.11	愛媛県	心ときめき、ひびきあう美術教育

回	年月	会場	大会主題
42	平成 1. 8	青森県	子どもの心に創るよろこびをひきおこす造形教育 ー豊かな感性と、うるおいのある表現活動を求めてー
43	2.11	熊本県	よろこび・いきいき造形教育ー自己表現に心ふるわせる子どもを求めてー
44	3. 7	東京都	審美教育と英知
45	4.11	京都府	新たな時代をきり拓く造形教育
46	5. 8	沖縄県	21世紀に向けての造形教育
47	6.11	神奈川県	いま、さらに 豊かな感性・創造のよろこびを
48	7.11	長野県	いのちにふれる造形活動ーつくるよろこび自分らしさの表現を求めてー
49	8.10	東京都	人間・表現・環境
50	9. 7	東京都	造形美術教育の再創造
51	10. 8	東京都	人間・造形美術・教育ー造形美術教育の再創造ー
52	11. 8	埼玉県	自分“彩”発見「自分さがしの旅」をしつづける子どもの造形活動
53	12. 8	静岡県	開く造形教育に 生き生き交流
54	13. 9	北海道	<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る
55	14. 8	沖縄県	南風にのせ！ 手・目・心の万人（うまんちゅ）の造形教育
56	15.11	東京都	「人間・造形・成長」ー造形美術教育を問い直すー
57	16. 8	福島県	「ほんとうの空のもと ほんものに出会う瞬間」 ー自分いろいろの造形活動を求めてー
58	17.11	神奈川県	つくり続けるよろこび、それは生きるよろこび ～色と形のメッセージ！からWEから～
59	18.11	長野県	私っていいな！！ “いろ・かたち” 生きあい学びあい
60	19.11	熊本県	夢と勇気と感性とー未来を拓く造形教育の可能性を求めてー
61	20. 8	大阪府	こころの喜びを広げる教育美術のこれから ー変えるもの・変えざるもの・教育原理の再構築へー
62	21.11	千葉県	きらめく感性 ときめく思い うみだせアート
63	22. 8	福島県	「つくる喜び、みる感動!! 子どもの今と未来をつなぐ造形教育」 ～連携を大切にしたいこれからの造形教育を求めて～
64	23. 7	北海道	“わたし” を創るー自立と共生の造形教育をめざしてー
65	24. 8	沖縄県	デーダ ー太陽の島から発信する造形教育ー
66	25.11	東京都	造形美術教育のダイナミズムー成長と連携ー
67	26.10	山梨県	造形100年教育ーわたしを俯瞰して見えるものー
68	27.11	岐阜県	ひとりひとりに「つくる喜び」を～豊かな心と表現力を育てる造形美術教育～
69	28.11	宮城県	よさや美しさ～つながりの中に生まれるものに向かって～
70	29.11	長野県	私っていいな！つながる ひろがる アート “響・同・常”
71	30. 7	秋田県	あきた発 新たな美を拓く～わたしを問い、発信する造形活動～
72	令和 1.11	愛知県	感性豊かに共に生きる
73	2.11	(千葉県)	(新型コロナウイルス流行の影響により中止)
73	3.10	北海道	「わたし」 を創る ～今を生きる、共に生きる造形教育」 「この子が 感じる＝考える＝表す 造形活動 ～造形的な見方・考え方を豊かにする学びを通して～」

全国造形教育連盟規約

- 1 (名称) 本連盟は、全国造形教育連盟と称する。
- 2 (目的) 本連盟は、全国造形教育の振興をはかる。
- 3 (事業) 本連盟は、上の目的を達成するために、次の事業を行う。
 - イ 各加盟団体及び各学校種別部会間の研究の交流、その連絡を行う。
 - ロ 毎年1回大会を開き、研究ならびに必要な決議を行う。
 - ハ 目的を同じくする他の国際的機関および国内的機関団体等との研究の交換、その他の連絡を行う。
 - ニ その他本連盟の目的達成に必要な事業を推進する。
- 4 (組織) 本連盟は、各都道府県の造形教育団体をもって組織する。
- 5 (機関) 本連盟に次の機関をおく。
 - イ 決議機関として代議員会
 - ロ 執行機関として本部役員会
- 6 (代議員会) 代議員会は本部役員ならびに代議員を以て構成し、毎年1回委員長の召集により大会会期中に行う。代議員は各都道府県の代表7名とする。
- 7 (本部役員会) 本部役員会は、委員長1名、副委員長3名程度、事務局長1名、学校種別部長各1名を以て構成し、必要に応じて委員長が召集する。
- 8 (役員の任務) 委員長は本連盟を代表し会務を執行する。副委員長は委員長を補佐する。部長は学校種別に必要な事業を推進する。監査役員は2名とし、会計の監査にあたる。
- 9 (役員の選出任期) 委員長、副委員長、監査委員は代議員の互選により選出し、任期は2ケ年とする。
- 10 (事務局) 委員長のもとに事務局をおく。事務局は事務局長1名と事務局員若干名とし、本連盟の事務及び会計にあたる。
- 11 (経費) 本連盟の経費は、加入団体の負担金ならびに事業収入、その他寄付金をもってまかなう。
 - イ 加盟団体の負担金は、年額1都道府県8,000円（1都道府県内に2以上の加盟団体をつくるときは1団体4,000円）とする。（1998年8月19日、東京大会において負担金額改正）
 - ロ 大会会費は、その都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ大会会費は、その都度決定し参加者の負担とする。部会の経費は必要に応じ、別に徴収することができる。
- 12 (規約の発効) この規約は昭和49年10月30日より発効する。平成18年11月1日改正、同日発効。平成19年11月14日改正、同日発効。

《申し合わせ事項》

- 1 各都道府県団体に各校種別（保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校）が揃っている場合は、それぞれから代表する代議員7名を限度として選出する。各校種が揃っていない場合は、所属する校種から偏りのないよう選出する。毎年5月末日までに連盟本部に連絡する。代議員は単なる代議員会構成員であるだけでなく、連盟本部を通じて全国諸団体との日常的な研究、交流、運動等の情報交換を行う。（1992年11月18日、京都大会において代議員5名を7名に変更）
- 2 当分の間、都道府県の実績によっては、当該都道府県団体の希望があれば、県内地域、あるいは学校種別団体の全造連への直接加盟を認める。この場合は加盟団体毎に負担金を納入し、代議員は学校種数の人数を選出する。
- 3 副委員長は、各都道府県から全造連全国大会開催地の当該年度代表者と次年度代表者、及び委員長が推薦した者の3名とする。

令和3年度 全国造形教育連盟本部役員

役職	氏名	勤務校／所在地	TEL / FAX
委員長	大野 正人	杉並区立杉森中学校 ☎166-0001 東京都杉並区阿佐谷北5-45-24 <ONO-MASATO@city.suginami.lg.jp>	03-3330-3431 03-3310-1540
副委員長	森 長弘美	札幌市立新陵中学校 ☎006-0805 札幌市手稲区新発寒5条4-4-1 <hiromi.morinaga@city.sapporo.jp>	011-684-6333 011-684-6813
副委員長	東 尚典	札幌市立福住小学校 ☎062-0043 札幌市豊平区福住3条5-1-1 <hisanori.azuma@city.sapporo.jp>	011-854-1318 011-854-1428
副委員長	村松 哲史	長野市立信更小学校 ☎381-2353 長野市信更町田野口1082 <tetsushi-muramatsu-02@nagano-ngn.ed.jp>	026-290-3011 026-290-3012
副委員長	久保田 充徳	長野市立犀陵中学校 ☎380-0913 長野市川合新田202-1 <mitsunori-kubota-01@nagano-ngn.ed.jp>	026-221-8686 026-221-1783
副委員長	西村 徳行	東京学芸大学 ☎184-0015 東京都小金井市貫井北町4丁目1-1 <nishimur@u-gakugei.ac.jp>	042-329-7608
会計監査	三浦 秀樹	杉並区立富士見丘中学校 ☎168-0082 杉並区久我山2-20-1 <MIURA-HIDEKI@city.suginami.lg.jp>	03-3333-8928 03-3247-9366
会計監査	平田 耕介	新宿区立津久戸小学校 ☎162-0821 東京都新宿区津久戸町2-2 <jza00372@nifty.com>	03-3266-1601 03-3266-8074
国際局			
事務局長	鶴内 秀一	立川市立第三小学校 ☎190-0022 立川市錦町3-4-1 <zenzoujimukyoku@gmail.com>	042-523-4448 042-529-0850
事務局	加藤 幸子	新宿区立淀橋第四小学校 ☎169-0074 東京都新宿区北新宿3-17-1 <nagaikami_mitsuami5hun@yahoo.co.jp>	03-3227-2105 03-3227-1946
事務局	菅原 亮	八王子市立みなみ野君田小学校 ☎192-0916 東京都八王子市みなみ野4-3-1 <ryosugawara@mac.com>	042-637-6611 042-637-6613
事務局	黒澤 償	世田谷区立経堂小学校 ☎156-0045 東京都世田谷区桜上水1-23-3 <boomer-29788-tsugu@ezweb.ne.jp>	03-3420-3278 03-3420-2903
事務局	中屋 珠美	昭島市立福島中学校 ☎196-0031 昭島市福島町3-20-1	042-541-2940 042-541-6985
事務局	大黒 洋平	小笠原村立母島小中学校 ☎100-2211 小笠原村母島字元地 <y.daikoku@gmail.com>	04998-3-2181 04998-3-2184

令和3年度 全国造形教育連盟 学校種別部長・事務局長

役職	氏名	勤務校／所在地	TEL / FAX
幼稚園・保育園 (部長)	榎 英子	淑徳大学 ☎260-8701 千葉県千葉市中央区大蔵寺町200 <maki216@soc.shukutoku.ac.jp>	043-265-7331 043-265-8310
小学校 (部長)	徳 永和 弘	八王子市立由井第一小学校 ☎192-0911 東京都八王子市打越町348-1 <tokunagaxb3@gmail.com>	042-642-4201 042-646-0347
(事務局長)	菅 原 亮	八王子市立みなみ野君田小学校 ☎192-0916 東京都八王子市みなみ野4-3-1 <ryosugawara@mac.com>	042-637-6611 042-637-6613
中学校 (部長)	山 下 久 也	昭島市立瑞雲中学校 ☎196-0012 昭島市つつじが丘2-2-6 <zuiunt01@city.akishima.ed.jp>	042-544-6511 042-544-2169
(事務局長)	中 屋 珠 美	昭島市立福島中学校 ☎196-0031 昭島市福島町3-20-1 <fukujimat02@city.akishima.ed.jp>	042-541-2940 042-541-6985
高等学校 (部長)	荒 井 篤	都立調布南高等学校 ☎182-0025 東京都調布市多摩川6-2-1 <wasche52@gmail.com>	042-483-0765 042-483-7091
(事務局長)	儀 部 佳 織	都立国分寺高等学校 ☎185-0004 東京都国分寺市新町3-2-5 <natural8abst@gmail.com>	042-323-3371 042-325-9833
大 学 (部長)	三 澤 一 実	武蔵野美術大学教職課程研究室 ☎187-8505 東京都小平市小川町1-736 <kmis@musabi.ac.jp>	042-342-9537 (直通TEL・FAX共通)
(事務局長)	西 村 徳 行	東京学芸大学 ☎184-0015 東京都小金井市貫井北町4丁目1-1 <nishimur@u-gakugei.ac.jp>	042-329-7608
特別支援 (部長)	小 池 巳 世	都立北特別支援学校 ☎114-0033 東京都北区十条台1-1-1	03-3906-2321 03-3909-4795
(事務局長)	大 橋 智	都立北特別支援学校 ☎114-0033 東京都北区十条台1-1-1 <Satoru_Oohashi@member.metro.tokyo.jp>	03-3906-2321 03-3909-4795
美術館 (部長)	三 澤 一 実	武蔵野美術大学教職課程研究室 ☎187-8505 東京都小平市小川町1-736 <kmis@musabi.ac.jp>	042-342-9537 (直通TEL・FAX共通)
(事務局長)	平 谷 美華子	東京富士美術館 ☎192-0016 東京都八王子市谷野町492-1 <hiraya@fujibi.or.jp>	042-691-4826 042-691-4623

全道造形教育研究大会のあゆみ

年	回数	開催地	テーマ	委員長(会長)	備考
1949			(札幌美術連盟組織 全国図画工作教育講習会)		
1951	第1回	札幌	情操教育の一環としての本道図画工作教育の進展を図るため	初代 野村 英夫	北海道美術教育会と改称 第1回全道図画工作教育研究集会
1952	第2回	札幌	図画工作教育の新思想である創造主義美術教育の諸問題について		北海道図画工作連盟創立
1953	第3回	旭川	美術教育の指導とは何か		
1954	第4回	函館	図画工作教育実践上の諸問題について		
1955	第5回	釧路	図画工作教育における学習指導上の問題の解明		
1956	第6回	札幌	造形教育において、つくり出す力を養うにはどうしたらよいか		
1957	第7回	室蘭	のそましい造形教育における具体的諸問題について		
1958	第8回	小樽	図画工作学習によって児童生徒の人間性がどのように培われるか		
1959	第9回	帯広	新段階における造形教育のあり方		北海道造形教育連盟と改称
1960	第10回	網走	本道における造形教育の実践を通して今後のあり方を見出そう		
1961	第11回	滝川	子どもたちの芸術性を育てるために私たちは何を与え何をすべきか		
1962	第12回	名寄	子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか		
1963	第13回	余市	子どもが生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか		
1964	第14回	札幌	子どもの創造能力とは何か	第2代 新妻 清	
1965	第15回	稚内	子どもの創造能力とは何か		
1966	第16回	室蘭	子どもの創造能力とは何か	第3代 赤石 武士	
1967	第17回	函館	指導の構築を具体化する		
1968	第18回	苫小牧	指導の構築を具体化する		
1969	第19回	札幌	造形能力は、どのような指導によって育てられるか	第4代 和田 芳郎	
1970	第20回	旭川	ゆたかに生きる子どもの造形能力をどう育てるか		
1971	第21回	札幌	造形能力は、どのような指導によって育てられるか	第5代 伊東 将夫	
1972	第22回	帯広	未来に生きる子どもの造形教育 (生活に根ざした造形教育をどう高めるか)	第6代 高橋 栄吉	
1973	第23回	室蘭	未来に生きる子どもの造形教育 (たしかな表現力をどのように育てるか)		
1974	第24回	美幌	未来に生きる子どもの造形教育 (ひとりひとりの子どもの表現力をどう高めるか)		第1回教育美術展
1975	第25回	江別	未来に生きる子どもの造形教育 (自ら創り出す力をどう育てるか)		

年	回数	開催地	テーマ	委員長(会長)	備考
1976	第26回	岩見沢	未来に生きる子どもの造形教育 (すべての子どもに造形によるこびを)		第1回立体造形展
1977	第27回	札幌	みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践		
1978	第28回	函館	みずみずしい中味でしなやかな子どもを育てる造形実践 (すべての子どもが生き生きとりくむ学習)	第7代 辻 悦平	
1979	第29回	旭川	生き生きとしたゆとりのある子どもを育てる図工美術教育のあり方		
1980	第30回	苫小牧	ひろがりと深まりの造形教育を求めて		
1981	第31回	釧路	創りだす心をよびおこす造形教育		
1982	第32回	室蘭	見る、知る、感ずる、そして創りあげる喜びを	第8代 遠藤 久男	
1983	第33回	留萌	生活とふれ合い、創る心のひろがり を求める造形活動		
1984	第34回	札幌	知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動 (わきたつ発想・たしかな表現・つくりだす喜び)	第9代 種市誠次郎	
1985	第35回	函館	知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動 (心をこめてつくりだす子どもを育てる)		
1986	第36回	旭川	子どもの心をゆり動かす造形教育 (つくる心のひろがり求めて)	第10代 森川 昭夫	第39回全国造形教育研究大会 を兼ねる
1987	第37回	紋別	子どもの心をゆり動かす造形教育 (表現のよろこびにひたる子どもを育てる)	第11代 松島 輝男	
1988	第38回	滝川	子どもの心をゆり動かす造形教育 (ひたむきに創る心を育てる)		
1989	第39回	帯広	子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実 (君はいま創造のとりこに)	第12代 金井 秀男	
1990	第40回	苫小牧	広がり、深まり、そして感動を！		
1991	第41回	札幌	子どもの個性的表現を授ける造形教育 (子どものつくる喜びをひらく)	第13代 佐々木理温	
1992	第42回	函館	子どもの個性的表現を授ける造形教育の充実 (感動、そして創造する喜びを)		
1993	第43回	旭川	思いをあたため心はずませる創る喜びを	第14代 鹿嶋 健	
1994	第44回	釧路	心ときめく、創造の喜びを求めて		
1995	第45回	千歳	豊かな心と確かな力をはぐむ造形学習を	第15代 船着 昭弘	
1996	第46回	札幌	～造形＝愛感美遊創in札幌～ 自らの心を拓く造形学習の在り方	第16代 白井 園毅	
1997	第47回	根室	感性から発し躍動する力を育む造形学習を！	第17代 吉田 倭雄	
1998	第48回	留萌	楽しさにひたり伸びやかに表す造形 活動と共感し寄り添う指導	第18代 芝木 秀昭	
1999	第49回	網走	オホーツク発 思・創・喜・感 ～一人ひとりが創造的な喜びを実感するために～		

年	回数	開催地	テーマ	委員長(会長)	備考
2000	第50回	函館	心の風景(ビジョン)の発信を! ～豊かな自分づくりを生かす想創活動～		
2001	第51回	札幌	風よ、大地よ、夢よ、北からはじまる造形の未来 ～〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を基軸 にして造形の未来をつくる～		第54回全国造形教育研究大会 を兼ねる
2002	第52回	帯広	広い大地に紡ぐ夢 豊かな感性をはぐくむ造形教育	第19代 藤井 正治	
2003	第53回	滝川	つくる喜びを実感できる造形教育		
2004	第54回	旭川	豊かに感じ、おもしろくまかせあらず喜びを 生の造形教育～身体で感じ、感性を 磨くための出会いを求めて～	第20代 富田 泰	
2005	第55回	函館	めざめる感性(こころ) きらめく個性(かたち) 地域空間がいざなう造形活動のひろがり	第21代 今 裕子	
2006	第56回	札幌	楽しさあふれ、確かな表現を実感する造形教育		
2007	第57回	釧路	「できた!」「いいね!」の喜びが息づく時間を求めて ～つくる喜び、感動する心をつなげていく造形教育～		
2008	第58回	北広島	豊かな心と確かな力を育む造形教育を!	第22代 菅原 清貴	
2009	第59回	旭川	身体で感じ・心はずませ・創造する喜びを ～「いま・ここで」「つなげる」造形教育を求めて		規約改正により委員長を会長に改称
2010	第60回	函館	創造!ときめき!実感! ～感性と知性の出会い心うるおす造形活動～		
2011	第61回	札幌	“わたし”を創る ～自立と共生の造形教育をめざして～		第64回全国造形教育研究大会 を兼ねる
2012	第62回	帯広	つくるとき・つながるとき ～豊かな心をはぐくむ造形教育～	第23代 稲貫 順	
2013	第63回	石狩	豊かな心と確かな力を育む造形教育 ～子どもの「こうしたい!」があふ れる授業を通して～		
2014	第64回	旭川	『「わたし」の喜び』あふれる造形活動	第24代 安木 尚博	
2015	第65回	函館	夢・つくる・人 ～未来をはぐくむ造形教育～	第25代 三井 哲	
2016	第66回	札幌	“すぎ”が輝く造形活動		
2017	第67回	釧路	わたしをつなぐ造形活動の時間 ～想いを豊かに育む造形活動の展開～	第26代 阿部 時彦	
2018	第68回	岩見沢	まなざしを共有し、おもしろをつなげる造形教育 ～おもう・さぐる・つながる・つなげる～	第27代 森長 弘美	
2019	第69回	旭川	『「わたし」を映す』		道北ブロックにて開催
2020	第70回	函館			新型コロナウイルス感染症 により研究大会開催を中止
2021	第70回	札幌	この子が感じる=考える=表す 造形活動 ～造形的な見方・考え方が豊かにする学びを通して～		第73回全国造形教育研究大会 を兼ねる

北海道造形教育連盟規約

1. 名称と目的

本連盟は、北海道造形教育連盟といい、北海道の造形教育の振興を図ることをもって目的とする

2. 事業

本連盟は、目的を達成するため次の事業を行う

- ①研究会・講習会・展覧会等の開催及び後援
- ②造形教育に関する教科書・教材・教具等の研究
- ③会報の発行
- ④他の造形教育団体との連絡提携
- ⑤その他、本連盟の目的達成に必要と認められる事項

3. 会員

会 員 本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員

賛助会員 本連盟の目的に賛同するもの

4. 組織

地区サークル 本道各地にサークルを置き、会員は原則としてこれに所属する

本 部 本連盟の本部は、札幌に置く

5. 構成及び任務

①役員

会 長 1 名 本連盟を代表する

副 会 長 若干名 会長を補佐する

会 計 監 査 2 名 会計の監査をする

②委員

地区委員長 地区1名 地区サークルを代表する

地 区 委 員 地区1名 地区サークルの連絡調整にあたる

(地区委員は、地区委員長を兼務してもかまわない)

常 任 委 員 若干名 会長が委嘱し、本連盟の運営に当たる

顧 問 連盟の重要な問題につき意見を述べる

③部長 各部推進の要として常任委員より会長が委嘱し、会務の分掌及び執行にあたる

6. 選任

会長、副会長、会計監査は委員総会で選出する

地区委員長及び地区委員は、地区サークルで選出する

常任委員は会長の委嘱による

顧問は委員総会において委嘱する

7. 任期

役員及び委員の任期は1カ年とする、但し再任を妨げない

8. 会 議

- 総 会 必要に応じ開催し、連盟事業につき協議する
- 委員総会 役員、委員をもって構成し毎年開催する
役員を選出、予算、決算及び事業の年度計画等につき審議する
- 常任委員会 役員及び常任委員をもって構成し、連盟の事業を執行する
- 役員会 会長、副会長、事務局長、会計により構成し、必要に応じ会の運営について協議する
- 部長会 本部役員、各部部长により構成し、必要に応じ各部事業等についての連絡調整を行う

9. 会 計

- 本連盟の会計は、会費・事業収入及び寄付金により執行する
- 会 費 会員は、一人 年額2,000円を納入するものとする
地区サークルは、年額10,000円を納入するものとする

10. 事務局

- 事務局は事務局長在勤の学校に置く
- 事務局長は常任委員中より会長が委嘱する
- 事務局には必要に応じて各部を設け、業務を分担する
- 事務局に事務局次長、会計担当を置く

11. 年 度

- 本連盟の事業並びに会計年度は、5月に始まり翌年4月に終わる

12. 規約の改廃

- 規約の改廃に当たっては特別委員会（規約改正委員会）を設け、規約改正案を総会に提出する本規約の改廃は委員総会の決議による

(平成6年4月29日改訂)

(平成19年4月28日改訂)

(平成21年4月総会にて改訂)

本部役員・事務局・各部長・副部長

本部役員（札幌市勤務）

役名	氏名	勤務校	郵便番号	学校住所	学校電話
会長	森長 弘美	新陵中学校 長	006-0805	札幌市手稲区新発寒5条4丁目4-1	011-684-6333
副会長	石垣あけみ	前田小学校 長	006-0816	札幌市手稲区前田6条11丁目3-1	011-683-3749
	黒田 正則	帯広市立帯広第八中学校 長	080-0027	帯広市西17条南6丁目1	0155-35-6593
	蓑島 裕二	江別市立文京台小学校 長	069-0833	江別市文京台70	011-386-7700
	西田 朋代	富良野市立布礼別小学校 長	076-0175	富良野市北布礼別	0167-29-2019
	谷口 光伸	乙部町立乙部小学校 長	043-0103	乙部町緑町641-1	0139-62-2021
事務局 長	東 尚典	福住小学校 長	062-0043	札幌市豊平区福住3条5丁目1-1	011-854-1318
会計	堀口 基一	附属札幌小学校 副	002-8075	札幌市北区あいの里5条3丁目1-10	011-778-0471
会計次長	櫻田 悟	琴似小学校 頭	063-0812	札幌市西区琴似2条7丁目1-30	011-611-4391

事務局

役名	氏名	勤務校	郵便番号	学校住所	学校電話
次長(研究担当)	湯浅 大吾	鴻城小学校	002-8073	札幌市北区あいの里3条6丁目2-1	011-770-5151
〃(教美展担当)	池田 武彦	南白石小学校	003-0022	札幌市白石区南郷通2丁目南6-35	011-863-0701
〃(庶務担当)	八田 博之	光陽小学校 頭	001-0905	札幌市北区新琴似5条11丁目4-1	011-761-2521
〃(広報担当)	小林 知広	西小学校 幹	063-0827	札幌市西区発寒7条13丁目2-1	011-662-5227
〃(中学・高校担当)	平井 歩	清田中学校 頭	004-0843	札幌市清田区清田3条3丁目7-1	011-881-2034
〃(中学・高校担当)	寺田 実	札幌中学校 頭	007-0868	札幌市東区伏古8条1丁目1-28	011-781-2221

各部長、副部長

役名	氏名	勤務校	郵便番号	学校住所	学校電話
庶務部長	森 久根	西野小学校	063-0038	札幌市西区西野8条4丁目4-1	011-662-5811
副部長	木村 美香	伏見小学校	064-0918	札幌市中央区南18条西15丁目1-1	011-551-2771
広報部長	黒川 友理	栄西小学校	007-0839	札幌市東区北39条東4丁目1-1	011-751-1852
副部長	篠原 貴	桑園小学校	060-0008	札幌市中央区北8条西17丁目	011-611-4211
	濱口 裕子	山鼻南小学校	064-0929	札幌市中央区南29条西12丁目1-1	011-532-8340
研究部長	中村 珠世	幌南小学校	064-0921	札幌市中央区南21条西5丁目1-1	011-521-0214
副部長(研究部門)	菊地 惟史	円山小学校	064-0821	札幌市中央区北1条西25丁目1-8	011-631-3437
〃(NW部門)	舘内 徹	西岡中学校	062-0033	札幌市豊平区西岡3条12丁目1-1	011-583-3560
	矢野 宜利	ノホ口の丘小学校	004-0032	札幌市厚別区上野幌2条4丁目5-1	011-893-5055
〃(研修部門)	石川 早苗	啓明中学校	064-0809	札幌市中央区南9条西22丁目2-1	011-561-4168
〃(教美展部門)	渡邊 千晴	中沼小学校	007-0890	札幌市東区中沼町73番地10	011-791-0031

各地区サークル（地区代表・地区委員・ネットワーク担当者）

道	サークル名	役名	氏名	職	市町村	勤務校	
札幌	札幌市造形教育連盟	会長	勝田 真塩	校長	札幌市	札幌市立伏見中学校	
		事務局長	石垣あけみ	校長	札幌市	札幌市立前田小学校	
		研究部長	十亀 健	教諭	札幌市	札幌市立伏見小学校	
		NW担当	矢野 宜利	教諭	札幌市	札幌市立ノホ口の丘小学校	
道央	石狩造形教育連盟	委員長	蓑島 裕二	校長	江別市	江別市立文京台小学校	
		事務局長	岩崎 愛彦	教頭	北広島市	北広島市立双葉小学校	
		NW担当	竹田 睦生	教諭	江別市	江別市立野幌若葉小学校	
	空知美術教育研究会	会長	鎌田 俊博	校長	岩見沢市	滝川市立明苑中学校	
		事務局長	中澤 孝仁	主幹教諭	赤平市	岩見沢市立中央小学校	
		NW担当 研究部長	桔梗智恵美	教諭	芦別市	雨竜町立雨竜小学校	
	後志教育研究会図工美術部会	部会長	嶋影 哲弥	主幹教諭	小樽市	小樽市立奥沢小学校	
	道北	上川造形教育研究会	会長	西田 朋代	校長	富良野市	富良野市立布礼別小学校
事務局長 研究部長			藤原 賢	教諭	富良野市	富良野市立富良野西中学校	
NW担当			吉野 法行	教諭	東川町	東川町立東川中学校	
旭川市教育研究会図工美術研究部			会長	成田 慎司	教諭	旭川市	旭川市立明星中学校
旭川市教育研究会図工美術研究部		事務局長	佐藤 賢一	教諭	旭川市	旭川市立近文第一小学校	
		研究部長 NW担当	西村 徳清	教諭	旭川市	旭川市立神居中学校	
留萌地方美術教育研究会		会長	村元 隆一	校長	留萌市	留萌市立港北小学校	
		事務局長	小澤なつき	教諭	遠別町	遠別町立遠別小学校	
		NW担当 研究部長	米澤 卓也	教諭	増毛町	増毛町立増毛中学校	
宗谷造形教育研究会		会長	中野 悟	校長	稚内市	稚内市立富磯小学校	
		事務局長 NW担当	遠藤 大輔	教諭	礼文町	礼文町立船泊中学校	
		研究部長	松尾 道行	教諭	稚内市	稚内市立稚内南中学校	
道南		渡島美術教育研究会	会長	船橋 恭二	校長	知内町	知内町立涌元小学校
			幹事長 NW担当	高島 純	教諭	森町	森町立森中学校
			研究部長	藤本 大介	教諭	北斗市	北斗市立上磯中学校
		函館市美術教育研究会	会長	仲井 靖典	校長	函館市	函館市立本通中学校
	筆頭幹事		後藤 征秀	教諭	函館市	函館市立亀田中学校	
	研究部長		木村 麻岐	教諭	函館市	函館市立五稜郭中学校	
	NW担当		進藤 宏美	教諭	函館市	函館市立南本通小学校	
	檜山造形教育研究会	会長	谷口 光伸	校長	乙部町	乙部町立乙部小学校	
		事務局長	吉川 聖	校長	江差町	江差町立南が丘小学校	
		研究部長	近藤 覚	教頭	今金町	今金町立今金小学校	
		NW担当	吉川 聖	校長	江差町	江差町立南が丘小学校	

道	サークル名	役名	氏名	職	市町村	勤務校
道南	室蘭市教育研究会造形部	部長	佐々木有美子	教諭	室蘭市	室蘭市立八丁平小学校
	苫小牧市教育研究会造形研究部会	部長	三和 瑞紀	教諭	苫小牧市	苫小牧市立拓進小学校
	日高造形教育研究会	会長	神成 浩	校長	新ひだか町	新ひだか町立静内中学校
事務局長 NW担当		中村 里美	教諭	新ひだか町	新ひだか町立静内中学校	
道東	十勝造形サークル	委員長	小泉 佳一	教諭	豊頃町	豊頃町立豊頃中学校
		事務局長	村中 鉄也	教諭	本別町	本別町立勇足中学校
		研究部長	斎藤 卓	教諭	池田町	池田町立池田中学校
		NW担当	松岡奈々美	教諭	上士幌町	上士幌町立上士幌中学校
	帯広市教育研究会図工美術部会	部長	黒田 正則	校長	帯広市	帯広市立帯広第八中学校
		事務局長 研究部長 NW担当	梅津 美香	教諭	帯広市	帯広市立西陵中学校
		釧路造形教育研究会	会長	佐々木 宰	教授	釧路市
	事務局長		小濱 道子	教諭	釧路市	釧路市立武佐小学校
	研究部長 NW担当		更科 結希	教諭	釧路市	北海道教育大学附属釧路中学校
	オホーツク造形教育連盟	委員長	小野寺哲浩	校長	斜里町	斜里町立知床ウトク学校
		事務局長 NW担当	玉造 至	教頭	湧別町	湧別町立上湧別小学校
		研究部長	赤岩 穂清	教諭	滝上町	滝上町立滝上小学校
	根室造形教育連盟	委員長	外川 篤司	教諭	標津町	標津町立標津中学校
		事務局長	安井加奈子	教諭	別海町	別海町立中春別中学校
		研究部長 NW担当	仲 悠輔	教諭	別海町	別海町立別海中央中学校

第73回 全国造形教育研究大会北海道大会 (兼 第70回全道造形教育研究大会札幌大会)

◇大会役員

大会会長	森長 弘美 (札幌市立新陵中学校長)
大会副会長	黒田 正則 (帯広市立帯広第八中学校長)
	藁島 裕二 (江別市立文京台小学校長)
	西田 朋代 (富良野市立布礼別小学校長)
	谷口 光伸 (乙部町立乙部小学校長)
大会顧問	大野 正人 (全国造形教育連盟委員長 東京都杉並区立杉森中学校長)
	稲貫 順 (北海道造形教育連盟顧問: 第23代会長)
	安木 尚博 (北海道造形教育連盟顧問: 第24代会長)
	三井 哲 (北海道造形教育連盟顧問: 第25代会長)
	阿部 時彦 (北海道造形教育連盟顧問: 第26代会長)

大会実行委員長	勝田 真塩 (札幌市立伏見中学校長)
大会実行副委員長	佐藤 正行 (札幌市立西岡南小学校長)
	金子 睦 (札幌市立藤野中学校長)
	安田 仁昭 (札幌市立北野台中学校長)
	福島 祥郎 (札幌市立あやめ野中学校長)
	木原 英俊 (札幌市立厚別北中学校長)
	野切 卓 (札幌市立伏見小学校長)
	花輪 大輔 (北海道教育大学札幌校准教授)
大会事務局長	石垣あけみ (札幌市立前田小学校長)
大会副事務局長	東 尚典 (札幌市立福住小学校長)
全道連事務局長	鶴内 秀一 (東京都立川市立第三小学校)

◇大会実行委員

大会実行委員長	勝田 真塩 (札幌市立伏見中学校長)
大会実行副委員長	佐藤 正行 (札幌市立西岡南小学校長)
	金子 睦 (札幌市立藤野中学校長)
	安田 仁昭 (札幌市立北野台中学校長)
	福島 祥郎 (札幌市立あやめ野中学校長)
	木原 英俊 (札幌市立厚別北中学校長)
	野切 卓 (札幌市立伏見小学校長)
	花輪 大輔 (北海道教育大学札幌校准教授)
大会事務局長	石垣あけみ (札幌市立前田小学校長)
大会副事務局長	東 尚典 (札幌市立福住小学校長)
大会事務局次長	山 薫 (札幌市立石山緑小学校)
	森貫 祐里 (札幌市立大倉山小学校)
	沼崎 和典 (札幌市立陵北中学校)

【総務・会計部】

部 長	藤岡 真弓 (札幌市立手稲宮丘小学校)
	吉伊 宏子 (札幌市立西小学校)
副 部 長	森 久根 (札幌市立西野小学校)
	木村 美香 (札幌市立伏見小学校)
部 員	山内詩絵里 (札幌市立円山小学校)
	箭内 浩之 (札幌市立南小学校)
担当顧問	安田 仁昭 (札幌市立北野台中学校長)

佐藤 正行 (札幌市立西岡南小学校長)
寺田 実 (札幌市立札幌中学校頭)

【WEB部】

部	長	矢野 宜利 (札幌市立ノホ口の丘小学校)		
副	部	長	小林 知広 (札幌市立西小学校)	
部	員	植松 賢治 (札幌市立発寒西小学校)		
		長峰 里佳 (札幌市立中央小学校)		
		奥山 博文 (札幌市立苗穂小学校)		
		濱口 裕子 (札幌市立山鼻南小学校)		
		阿部 永 (北海道教育大学附属札幌中学校)		
		向川 美桜 (札幌市立西岡北中学校)		
		光永 江里 (札幌市立元町中学校)		
		渡部 功哉 (札幌市立厚別南中学校)		
担	当	顧	問	福島由紀子 (札幌市立藻岩北小学校長)
				富波 修 (札幌市立新琴似南小学校長)
				福島 祥郎 (札幌市立あやめ野中学校長)
				花輪 大輔 (北海道教育大学札幌校准教授)
				岩崎 重明 (札幌市立平岸小学校頭)
				八田 博之 (札幌市立光陽小学校頭)

【研究集録部】

部	長	本多 隼人 (札幌市立北の沢小学校)		
副	部	長	池田 武彦 (札幌市立南白石小学校)	
部	員	篠原 貴 (札幌市立桑園小学校)		
		細川亜矢子 (札幌市立厚別中学校)		
		小林 充裕 (札幌市立東白石小学校)		
		根山 梓 (札幌市立平岡中学校)		
担	当	顧	問	金子 睦 (札幌市立藤野中学校長)
				木原 英俊 (札幌市立厚別北中学校長)
				本間 真理 (札幌市立稻積小学校頭)
				櫻田 悟 (札幌市立琴似小学校頭)

【研究部】

部	長	十亀 健 (札幌市立伏見小学校)	
		中村 珠世 (札幌市立幌南小学校)	
副	部	長	湯浅 大吾 (札幌市立鴻城小学校)
		川島 正夫 (札幌市立手稲宮丘小学校)	
		舘内 徹 (札幌市立西岡中学校)	
		中村 麻紀 (札幌市立厚別東小学校)	
		矢野 宜利 (札幌市立ノホ口の丘小学校)	
		石川 早苗 (札幌市立啓明中学校)	
		水野 一英 (札幌平岸高等学校)	
部	員	鳥海 利織 (札幌わかくさ幼稚園)	
		三浦真奈美 (北海道教育大学附属札幌小学校)	
		渡邊 千晴 (札幌市立中沼小学校)	
		中川 治 (札幌市立北野台小学校)	
		加藤 眞 (札幌市立百合が原小学校)	
		大門 沙織 (札幌市立信濃小学校)	

- 千葉紗希子 (札幌市立伏古小学校)
 成田 七海 (札幌市立山鼻小学校)
 藤川 真治 (札幌市立和光小学校)
 八子 晋嗣 (札幌市立定山溪小学校)
 黒川 友里 (札幌市立栄西小学校)
 菊地 惟史 (札幌市立円山小学校)
 中村 嘉宏 (札幌市立資生館小学校)
 保科 治恵 (札幌市立福住小学校)
 鈴木美奈子 (札幌市立西園小学校)
 中島 結衣 (札幌市立栄東小学校)
 橋本 祥子 (札幌市立清田緑小学校)
 米谷 智成 (札幌市立栄町小学校)
 吉田 敬康 (札幌市立手稲宮丘小学校)
 久蔵美和子 (札幌市立あいの里東中学校)
 市川 雅基 (札幌市立新陵中学校)
 寺林 陽子 (札幌市立発寒中学校)
 杉本 真紀 (札幌市立屯田北中学校)
 石河 明子 (札幌市立北栄中学校)
 柏木 智裕 (札幌市立簾舞中学校)
 高橋 樹生 (札幌市立羊丘中学校)
 田村まりこ (札幌市立平岸中学校)
 藤井 毬愛 (札幌市立上野幌中学校)
 藤森 渚 (札幌市立明園中学校)
 山崎 久子 (札幌市立宮の森中学校)
 山田 優太 (札幌市立新川西中学校)
 伊藤 彩乃 (札幌市立真駒内中学校)
 千葉 有造 (札幌平岸高等学校)
 細川亜矢子 (札幌市立厚別中学校)
 佐々木雅子 (札幌市立前田北中学校)
 打田 愛美 (札幌市立星置中学校)
 越智あずさ (札幌市立栄南中学校)
 須摩 大輔 (札幌市立陵北中学校)
 椿野 衣江 (札幌市立平岡中央小学校)
 西川 花音 (札幌市立藤野中学校)
 根山 梓 (札幌市立平岡中学校)
 古山 慶 (札幌市立澄川中学校)
 堀口 基一 (北海道教育大学附属札幌小学校副校長)
 野切 卓 (札幌市立伏見小学校長)
 木原 英俊 (札幌市立厚別北中学校長)
 花輪 大輔 (北海道教育大学札幌校准教授)
 齋藤 啓代 (仁木町立仁木中学校長)
 平向 功一 (札幌大谷大学教授)
 平井 歩 (札幌市立清田中学校頭)

担 当 顧 問

共に挑戦した大会 心から感謝を

大会実行委員長
札幌市造形教育連盟会長

勝田真塩



このような新しい形による大会になることを、誰が予想していたでしょうか。

本大会のために初めて実行委員会を開催したのは、令和元年（2019年）11月30日でした。窓の向こうの雪景色を見ながら、平成23年（2011年）に札幌を会場に開催した前回の大会のように、多くの授業公開をし、北海道らしいアトラクションなどで参加者に楽しんでいただける大会にしたいと意気込んでいました。しかし、それから数か月も経たないうちに、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて社会は一変し、学校の教育活動も子どもの姿も、以前とは全く異なるものになってしまいました。

造形活動においては、感染防止のために共同制作や向かい合っでの表現活動を控え、道具等の共有にも消毒作業が必要となりました。感じ取ったことを交流したりすることも控えなければなりません。休校措置などもあり、一時は子どもたちの笑顔や歓声が学校から消えました。

そのような状況の中、本大会の準備は再スタートしました。会議もままならず教科指導も十分にできない状況下で、北海道・札幌として大会を開催することができるのだろうかというところから話し合いは始まりました。しかし、このような状況だからこそ、研究の灯を繋ぎ、どのような形であっても全国大会・全道大会を開催したい、否、開催しなければならないという思いにまとまりました。

この数年、私たちは全国大会の開催を目標にして研究活動に取り組んできました。意欲にあふれる仲間を増やしながら、「この子」という言葉を研究主題に入れ、かけがえのない一人一人の子どもを一層大切に作る授業づくりに励んできました。そのため、厳しい状況ではあるけれども、子どもたちの学びの姿を全国の仲間と交流し、明日につなげたいと願うようになりました。本大会の運営面では、全国の皆様にご迷惑をおかけしたところも多かったのですが、大会後のアンケートでは励ましのお言葉をたくさん頂戴いたしました。共に本大会をつくってくださったことに、心から感謝申し上げます。

結びになりますが、本大会集録の作成に当たり、お忙しい中、原稿や写真をお寄せいただきました方々、限られた期間で対応いただきました小南印刷株式会社の方々には心より感謝申し上げます。ありがとうございました。私たちの本当の挑戦はこれからが本番だと思っています。友達と学び合ったり様々な行事に取り組んだりする機会を失った子どもたちが、感性を働かせてのびのびと造形活動に浸り、豊かに成長して幸せな人生を創れるように、造形教育の在り方を今後も探っていきたいと思います。そして、子どもたちの姿を、直接見ていただく機会を早くつくりたいと願っています。





73 R
z z
2021 北海道

